

俺ガイナーイ物語

ベリーベリーハード

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

やはり俺の青春ラブコメはまちがっている

×

物語シリーズ

いわゆるクロスオーバー。

内容成分的には物語シリーズ七割の、俺ガイル三割くらいの代物です。

『本物』に救われた阿良々木暦と、『本物』に救われなかった比企ヶ谷八幡。

—そんな二人の人生が唐突に色んな意味で交じり合った駄文です。

阿良々木ハーレム（一部除く）と比企ヶ谷八幡。もしくは奉仕部と阿良々木暦の会話劇に興味がある方は、ぜひ一読していただく。

※実をいうと、以前、投稿したことのある作品です。ネットに自分の文章を載せ続けることになんとなく悶えはじめて一度消したものを、何故か再び投稿しています。きつと作者はDMです。

一応、流れは基本的に投稿したままのものです。所々に改稿をさせていただきましたので、よろしければ二度目ましての方も再び目を通していただければ幸いです。

もう出来上がっているものなので、更新ペースは最終回を迎えるま

で、一日、二日おきぐらいの速度になると思います。

目次

一話	1
二話	10
三話	17
四話	23
五話	32
六話	43
七話	48
八話	55
九話	65
十話	71
十一話	82
十二話	89
十三話	96
十四話	106
十五話	113
十六話	121
十七話	128
十八話	136
十九話	143
二十話	151
二十一話	160
二十二話	166
二十三話	176
二十四話	186

二十五話	192
二十六話	201
二十七話	211
二十八話	220
エピソード	237
後書きというか蛇足というかお願いというか	249

一話

夏休み。

それは至高の言葉。甘美な響き。リア充非リア充問わず万遍に、平等に安らぎと遠足前の小学生のような高揚感を与える安寧の時の始まり、つまりはその初日。

俺こと比企谷さん家の八幡くんは普段であれば登校の準備に割かれているであろうその朝の一時を、しかし恐らく今年に入って初めて感じるだろう幸福感を胸に抱きながら、ただただ純粹に惰眠を貪っていた。

時間に追われることのない朝の、なんたる素晴らしいことか。

ぼっちは自由を何よりも愛する。だからこそ時間に縛られることを嫌い、世俗に縛られることを嫌い、そして友達とかいう人生の上で最も不必要ともいえる足枷を……人間関係とかいう腹の足しにもならない束縛を忌嫌することによりただ一人となりて、解放感を満喫する。それこそがぼっちジャステイス。

つまりぼっちとはこの世で最も崇高で純粹でかつフリーダムな人種なのだ。

そこにエレガントという単語を付け足してもいい。ちなみに俺は中学の終わりまでエレガントという言葉をなにか卑猥な隠語のことだと思っていた。ぼっちの想像力は宇宙よりも遙か壮大なのである。ともかく。

俺が何を言いたいかというと、つまり夏休み最高。冷房バンザイ。もう学校なんて行かずにこのまま布団の中でずっと睡眠学習したい。

しかし世の無常は無垢なる少年のそんなささやかな願いも叶えてくれないわけで、だったらもう夢の中で夢見るしかないよね？俺だけの理想郷を作るしかないよね？

というわけで、頭の前から足のつま先まで、俺は深々と掛け布団に包まれてアヴァロン建設に着手するのであった。

いや、つかもうね、マジで眠いのだわ。異常に高まる夏休み初日

テンションに流されてマンガ全巻一気読みなんざするんじゃないかって。おかげで、ロードローラーに踏み潰される夢で一旦目が覚めちゃった。そうです深夜にジヨジヨ読んでました。

やっぱり三部は最高だよな……と、俺はうつらうつら回想しながら身体を布団に埋めてダンゴムシのように小さく丸まる。そろそろ本格的にセカンドチャンスがやってきた。

縛りは何もない。今だけは世界も社会も出席日数も平塚先生の拳も気にせず寝ていられる。なんという優しい世界。この世界ならば誰もがハッピーエンドを迎えられるに違いない。つまり第三部、完。

比企ヶ谷先生の次回作にご期待ください。

(……もう今日は昼まで寝ていよう)

別に早起きしてまでやりたいことなんてないし。それに今日は平日だ。うるさい親も仕事でいない。……まあ、うるさい妹は居るが。

とはいえ、小町も俺と同じタイミングで夏休みを迎えたのだ。アイツだって夏休み初日の魔力には勝てなかったはず。さすがにこんな時間に起きてきて、あまつさえわざわざ俺を起こしに来るなんてありえないだろう、と。

俺は高を括っていた。

結論から言うと、それは大きな間違いだったのだが。

「おつきろー！兄ちゃん、朝だぞー！」

戸を叩く謙虚な音なんて無かった。代わりに、朝の訪れを知らせてきたのは扉を蹴破るような大きな物音と、鼓膜を突き破るような大きなグツドモーニング。

おいふざけんなこんな朝っぱらから一体誰だこの野郎ーなんて、考えるまでもなく、この世界に置いて俺を兄と呼ぶ存在はギャルゲー内に数多といる妹キャラ以外には残念ながら一人しかいなかった。

「おーい！朝だぞー！兄ちゃん兄ちゃん朝だぞー！ほら起きろ今起きろ早く起きろー！」

「……んだよ小町、夏休みの朝ぐらいいは静かに寝かせてくれよ。朝飯なら後でちゃんと食べるからさ。今の俺は死ぬほど疲れてるんだ。お兄ちゃんは今日一日布団と同化すると決めたんだけだから……お

やすみ」

「おやすみじゃねえっての!!」

「ん、むう……!!」

乱暴にグラグラと揺らされる身体。布団を介した頭越しからは相変わらず不快ともいえるほどに大きなキンキン声が聞こえてくる。おまけに上半身も袋叩きにされている。

なんとというかー普段のきやびるんとした小町からは考えられない野性味溢れるその直接的な目覚まし方法に、俺は違和感を覚えるよりも先に殺意を覚えていた。

うぜえ。マジでうぜえ。

今ここにデスノートがあつたら迷いなく名前を書き込んでるレベルでイラツとした。あ、いや、でもやっぱり小町をデスしちゃうのは可哀想なので、代わりに親父の名前を書いて親父をデスしようと思います。

子供の責任は親の責任!

「火憐ちゃん。お兄ちゃんもう起きたー?」

「ああ、月火ちゃん。いやそれがさあ、今日はいつにも増して強情に起きようとしなんだよ。どうする?もうこうなったらあたしが兄ちゃんの脳天にローリングソバット食らわすしかないかもしれねえ」

「……ふーん、せっかくわざわざ可愛い妹が起こしに来ているというのに、お兄ちゃんはその優しさも親切心も無下にして一人のんきに寝てるんだあ。私なんてわざわざ朝食の用意までしてあげたのにそれも生ゴミにして一人ぬくぬくと眠り続けるつもりなんだあ。ふーん、へー、ほおー」

「……………」

「……そう。わかった。火憐ちゃんそこどいて」

「あ、月火ちゃん。もしやるならヘッドの部分じゃなくて持ち手の方が……いや、やっぱりなんでもない。じゃあ、とりあえずあたしは先に下行ってるな」

トコトコトコ。

ガタ、ガタ、ガタ。

騒音は足音と物音に分離して遠ざかっていく。静けさを取り戻した室内で、俺はようやく訪れた再びの平穩に安堵した。そしてどこか勝利にも似た余韻を胸に抱いて、寝返りを打って、瞼を深く閉ざしてーそこで初めて、途方もない違和感に目を開けた。

小町の言動も、行動も、なんなら声音も。その異常の全てが夏休みの魔力なのだと言われたら何となく納得出来る。俺にも経験はあるからな。ついテンション上がり過ぎてロボットダンスしてみたり、裏声でノリノリに歌ってみたり、意味もなく鏡の前でシャドーボクシングしてみたり。

つまり兄妹とは同じ血を持ち、似たような習性を持ち得るわけで、そこに関しては変だとは思わない。むしろ何とも思わない。無関心しかない。

しかし、今さっきの、布団越しに聞こえてきた会話には関心を向けるをえなかった。というか、えっ、会話？小町ちゃん誰と喋ってたの？

意識すると知覚出来るものはあるものだ。

背後に感じる確かな気配。

嫌な悪寒を覚えながら、お化けなんてないさお化けなんて嘘さと掛け布団から目だけを出して、そろりと振り向く。

その先、視線の先には小町ぐらいの背丈の見知らぬ女の子が映っていた。その両手には鈍い銀色の金属バットが握られていて、それが大きく振り上げられた態勢で動作を停止。沈黙の間が空き、視線と視線が合う。

瞬間、ゾクリと背筋が凍った。

「ちえすとおおおお!!」

「うをおおおおお!!」

唐突に振り下ろされた銀色の凶器が脳天目掛けてパイルダーオン!

その身命を賭した合体を俺は運よくギリギリのところ回避し、次いでベッドから転げ落ち、そしてゴキブリのようにカサカサとそのデンジャラス少女から早急に距離を取った。

やだこれ。なにこれ。ウソこれ。

先ほどまで自分の頭があった場所に視線を滑らせる。そこには俺の腕よりも太いだろう銀色の凶器がメリメリと枕にめり込んでいた。つまりあと少しでも反応が遅れていたらあの枕の代わりに俺の後頭部にアレがメリメリしていたわけであって、アンパンマンでもなければ知り合いにジャムおじさんさえいない俺にとっては替えの一つもないこのわりと水準以上の顔がメリ潰される一歩手前だったというわけで。

想像して恐怖する。というか想像しなくても恐怖の権化がすぐ目の前に居た。

「……なんだ、起きたんだ」

「ひいっ!？」

バットを握りしめたまま少女の視線が俺に落ちる。

怖い。つーか怖い。いやマジで怖すぎるんだけどなんなのこの子だれなのこの子もしかして悪魔の化身かなにかなの？

その無言の迫力に、わりと冗談抜きに悪魔の類かなにかなんじゃないのかと全身全霊でビビりながら壁際まで後ずさる俺。少女は未だ俺を見下ろしたまま、ユラリと身体をこちらに向き直してきた。

人間味をまるで感じさせない冷酷な無表情。

カラン、と。バットの頭部がベツドの足に当たり無機質な音を鳴らす。更にビビりすぎて、胃がギリギリと強く痛んだ。

金縛りにあったかのように身動きが取れない。そんな蛇に睨まれたカエル、雪ノ下に睨まれた材木座状態と化した俺の視界の内、その少女はにやりと口元だけに笑みを浮かべた。

こ、殺されるう……!!

「うん。じゃあ早く下に降りてきてね。言つとくけど二度寝なんてしちゃダメだからね?」

「ひいっ!!……いっ?」

パタパタと足音が遠ざかっていく。気付けば、瞬く間に、俺は一人きりだった。

いやまあ、一人なのはいつものことだけれど、それでも今ほどぼつ

ち全開なこの状況を嬉しく思ったことは恐らく未だかつてない。

なんだか知らんが……とりあえず危機は去った、んだよね？

そろそろと立ち上がり警戒心モリモリで部屋を見回す。

そして気が付いた。

「……………、どっ？」

見知らぬ部屋だった。知らない天井どころではない。前後左右そして上下に至るまで知らない光景。間違いなく、昨日までマンガ片手にゲラゲラ笑っていた俺の部屋では断じてない。もしや俺が寝ている間に匠がビフォーをアフターしてしまったのだろうか。

解らん。

え、っーかマジで何も解らないんだけど。

「お兄ちゃん、なにしてるのー。……もしかして本当に二度寝してるんじゃない、」

「は、はひっーすみません今すぐ行きまふ!!」

開きっぱなしな扉の向こう側から漂ってくる殺気に俺は条件反射で足を動かした。嘘だろ世紀末覇者でもこんな威圧感だせないぞ。

状況への理解が未だ追いつかないものの、しかし恐怖からか身体は勝手に階下へと降りていく。すると、不意にほのかな味噌の香りが見ついた。

匂いのもともとまで視線を向けると、そこには朝食らしきものが並べられたテーブルと、そのテーブルの横で行儀よく座る二人の少女の姿が。内一人は先のデビルレディーである。つい数分前に人を撲殺しかけたというのに今では涼しげな笑みをこちらに向けていた。

もう怖いとか通り越し過ぎて普通にキチ○イだろこの女。人格破壊者といっても過言ではない。雛見沢出身とか言われてもコンマ何秒で納得出来ちゃうレベル。

「ん？そんなに私の顔を見つめちゃって、どうかしたのかな、お兄ちゃん」

「べ、べつに？なにも？」

「そう？なんだかそこはかとなく貶されてるような気がしたんだけど」

恐ろしく的確な発言に俺は引き攣り笑いを浮かべるほかない。

エスパーかよ、こいつ。

デビルで狂人でエスパーとか、属性積みすぎだろ。

「……まあいいや。とにかく早く座ったら？せつかくの月火ちゃん特製スペシャルスクランブルエッグが瞬く間のうちに冷めちゃうよ」

「そうだけ兄ちゃん。それに今日から勉強会に行くんだろ。さっさと食って支度しねーと間に合わないんじゃないのか？」

「……………」

交互に掛けられた言葉に俺は全くといっていいほど反応が出来ない。というか今更になって寝ぼけた頭が正常に稼働を始めていた。

見知らぬ部屋、見知らぬ女の子、本当にスクランブルしちやっついている可哀想なスクランブルエッグに、何故かワカメまみれの味噌汁。あと白米。

そうか、なるほどな。……全然わからねえ。

「…………お兄ちゃん？」

「のおっ…………!?!」

と、危ない方の片割れがこちらに近づき、おもむろに顔を覗き込んできた。

ちよ、近い近い近い匂い！

なんで狂人のくせにこんな甘い香り漂わせてるのこの子！

「なんか…………今日のお兄ちゃん、変だよな」

更に顔を寄せるキチ女。

すかさず後ずさる八幡くん。

「うん？…………まあ、確かになーんか違和感あるよな、今日の兄ちゃん
は」

続いて、もう一人の少女までもが参戦。

甘い香りが更に強みを増し、同時に俺のSAN値が減少。

よくよく見れば二人とも可愛いなどっちか俺と結婚してくれないかなとトチ狂うぐらいには正気度が削られた。

「なんだろうね」

「なんだろうな」

ずずいっと。もはやこのまま流れでチュウしちやつても許されるんじゃないかと勘ぐるほどに顔が寄せられ、そうして俺の中のロンリーウルフなイケない遠吠えをしそうになるぐらいの時間をかけてから、唐突に二人の瞳が同時に見開かれた。

そしてようやく俺のパーソナルスペース外へと離れると、

「あつ、そうか！わかった！」

またもや同時に声をあげながらポンツと両手を合わせ、

「目が死んでるんだ！」

俺の顔面に人差し指を突きつけてきた。見事なハモリ具合である。あまりに巧みな連携に感動してうっかり自殺しそうになったぐらいだ。

「道理で今日の兄ちゃんからは魚の腐ったような奴みたいなの雰囲気を感じ取れたわけだ。だって目が死んでるんだもん！」

「道理で今日のお兄ちゃんからは汚らしい家畜みたいな雰囲気を感じ取れたわけだね。だって目が死んでるんだもん！」

「ねえ、ちよつとやめてくんない？納得したーみたいな清々しい顔しながら俺の人間としての尊厳コナゴナにするのやめてくんない？死んじゃうよ俺？あまりのショックで本当に死んじゃうよ俺？」

暴言に重ねられた暴言が俺のガラス細工のようなハートを打ち砕いていった。いや、打ち砕いただけならまだしも、心情的にはそのあとに破片をすりこぎですり潰して粉末状にしてからキラウエア火山の火口へ放り込まれたぐらいの衝撃である。

今ほどマゾヒストに生まれていれぱと思つたことはない。やはり女なる種族は小町を除いて全員滅べばいいのにと心の底から願つた瞬間だった。

「うんうん。じゃあ、とりあえず顔でも洗ってきたらどうか？多分、お兄ちゃんまだ寝ぼけてるんだよ。冷たい水でしゃつきりしてきなつて」

「……そうだな。そうする。で……洗面所、どこ？」

「……兄ちゃん、もしかして本当に寝ぼけてんのか？」

ほらあつちの方だよ、と。

俺の背面方向へと差された指先に従って、俺はふらふらと足先を向けた。とびらをくぐる。倒れこむようにぐにやりんと洗面台に上半身を傾け、バシャバシャと顔を洗う。こする。取れないヨゴレをとるように力強くゴシゴシと。それこそ擦痛でなにかが覚めないかと期待するよう念入りに顔面をこすり続けた。

そうして一息ついてから、顔を上げた。

鏡を見る。そこには死んだ目をしたまるで見知らぬ一人の男が鬱々しげに俺を睨んでいた。右手を上げる。すると鏡の中の男も寸分狂わぬタイミングで手を上げていた。パチパチと。二回瞬きをすると、これまた同様に鏡の中の男も瞬きをする。最後にウインク。誰とも知らぬ野郎に返されたウインクを見て思わず吐きそうになった。嫌悪感と共に唾を排水口へ吐き出し、再び鏡の中を見る。

「……………俺、ガイナイ」

三秒後。今世紀稀にみるレベルの絶叫がどことも知れぬ洗面所の内を響きわたった。

二話

阿良々木曆。

財布の中に入っていた一枚の学生証にそのなんともいえない微妙に噛みやすい語調の名前が記されていた。

そして名前の横にはどこかで見ることがあるような、詳細に言うならば一時間ほど前に鏡に映っていただろう顔面と瓜二つな顔写真が貼られている。

前髪を片目に被せるというお前どこのキタローさんだよと言いたくなるようなヘアスタイルを除けば、ごくごく一般的な目立ち鼻立ち顔立ち。もちろん見覚えなんてない。むしろ、今のところは見知ったものを一度だつて目にしていない。

ため息を一つ。

身も知らない男の顔面なんて、いつまで見ても愉快的な感情は湧かない。

だから俺は、学生証を適当にポケットに突っ込んで、顔を真上に向けた。

「……………」

空が綺麗だった。

透き通るように澄み渡った広大な青の下、少しばかり自己主張の激しい太陽からの熱光線でジリジリと肌を焼きながら、俺は中途半端に広い公園の内のこれまた中途半端に横幅の広いベンチの上に座り、ただただボーっと空を眺めていた。

その姿をはたから見るならば、さながらリストラされたことを家族に打ち明けることも出来ず一人誰もいない公園で途方にくれるお父さんのような図になっていたかもしれない。

俺はお父さんではないし、将来的には専業主夫となって家庭に入るつもりなのでリストラされるような心配は全くもって皆無なわけだが、しかし、今現在進行形で途方に暮れているという部分だけは図らずもお父さんと一致していた。

そう、俺は途方に暮れていたのだ。

一時間前、鏡に映し出されたこの顔面を見た俺は半ば逃げ出すようにあの家を飛び出して、それから走って走って走って走って走って、それで、気づいたらベンチに座っていた。

裸足で、もろに寝巻きっぽい格好で、そうしてなにをすることもなく空を眺めていたらふと財布がズボンに入っていることに気づいて、学生証を見つけて、そこには墓場鬼太郎みたいな髪型野郎の顔写真が貼られていて、で、リストラされた架空のお父さんのことを考えて鬱になって、そして今こうして途方に暮れていたのだ。

なにがどうしてこうなったのかは知らないし、解らない。

もしや、とうとう比企谷八幡という男の子の存在感が世界にも認知されなくなるほど薄くなり、そうして輪廻転生森羅万象消費税増税みたいなミラクルが起こって俺の魂だけが他の人間へと乗り移ってしまったのだろうか。

不意に、そんなライトノベルみたいなトンデモ設定が頭をちらついたので、しかしこの仮定が真実であればそれはそれでスゴいな俺。世界から見放されるとかそれもう究極的なぼっちだろ。もはや新世界創造出来ちゃうレベル。たぶんその世界でもぼっちであろうことは間違いないだろうけどな。

思わず笑みが浮かんでしまう。人間、どんな時でも笑うことは出来るんだなとちよつとしたニヒルを気取っていると、ふと視界の中に、連れ立って歩く親子の姿が入った。誰も居ない砂場の脇で、幼稚園児らしきガキが横に立つ母親らしき女性を見上げながら何事かを尋ねている。何故か俺に人差し指を向けながら、もう片方の手で女性の服の裾を引っ張っている。

女性はにこやかに笑いながらチラリとだけ俺に視線を向け、そうして不自然にもすぎる笑顔固定のまま一言二言返してから、ガキを連れて公園からフェードアウト。

その会話内容はとも簡単に想像出来た。

『ねえー。ママー。あの人なんで一人で笑ってるのー？ぼっちなのー？』

『ユウくんアレと視線合わしたらダメよー。視線を介してぼっちが移

るわよー？ほら、とりあえずあつちに行きましようか、ふふふふふふー』
とかいう内容に違いない。

そうか、ぼつちに視線合わせるとぼつちが移るのか。納得納得。だから中学ん時誰も俺と視線合わせてくれなかったわけだな。いやー、知らなかったわー。てつきり学年全体で存在を無視されてるのかと思ってたわー。

「あれ、なんだろう。なんだか目から汗が……」

「いえ、それは汗ではなく涙ではないんですか、あららららぎさん」
込み上げる塩水的なものを指で拭っている最中、突然に背後から声が聞こえてきた。俺は首を後方へねじる。果たして、そこには大きなリュックを背負ったツインテのロリ少女がニコニコ笑顔を俺へと向けていた。

……え、誰？

「……………？」

俺、沈黙。

そして言葉なく、ジロジロとそのロリを見てしまう。そのせいか、ロリは笑顔を崩しどことなく不満気味に眉根を寄せた。

それからえへんとわざとらしい咳を一つし、

「いやあ、それにしてもお久しぶりです。今日も実にいい天気ですね、シヤララ木さん」

「……はあ」

「……………」

とりあえず同調的な意味合いで相槌を返してみる。が、何故かロリはさらに眉根にシワを寄せるとまるで躊躇なく右足を振り抜き俺の脇腹へ痛え!?

「お、おうふ……!!」

声が漏れるぐらいには地味な鋭さを伴った痛み。うずくまる俺の頭上からは氷点下並の冷たさを伴った視線が落ちる。そしてロリはあからさまに不機嫌な音程で鼻を鳴らした。

「……失望しましたよ、阿良々木さん。まさか二度もネタ振りをされておきながらそれをスルーするとは。信じられません。芸人の風上

にもおけませんね。罰としてこれからは空気読めない略してKYさんと改名して以後の人生を酸素の供給なく過ごしてください」

「この、クソガキ……!!」

遠回しな死ね宣告にもれなく泣かしてやりたい気分一杯だった。というかなんでこいつは俺の昔のアダ名を知ってるの？ちなみにその時は『空気読めない』の略ではなく『キモいやばい』の略でKY。なんだよキモいやばいってキモいのかやばいのかどっちかにしてくれよ合わせ技は無しだろ……。

若かりし頃のトラウマにより八幡の精神に八万のダメージ……：八幡だけにな。くふっ。

「ああ、いまなにか即興で駄洒落をお考えになったようですが残念ながら全然おもしろくない上に激さむですよ、それ。人間としての品位を疑うどころか最早出来がひどすぎて死んじやってもいいくらいのレベルです。平然と生きていけるのが不思議なくらいの恥晒しっぷりですよ」

「うるせえな。というかお前も勝手に人の心と呼んでんじやねえよ。なんなの、もしかして俺が知らないだけで女の子は生まれながらにして読心術とかマスターしちゃってるわけ？」

「いえいえ、そんな大層な技術など身に付けてはいませんよ。ただこのツインテールに他人の思考を受信する機能がついているだけです」
なにそれ欲しい。

ということはそれさえあれば俺の事を好きな女子が簡単に割り出せるといわけか！

「ただし人の悪意限定ですが」

「絶対いらねえ……」

瞬間的に俺のソウルジェムが穢れマックスになることうけあいである。

他人の悪意ほど汚いものはない。しかし、悪意を抱かない人間などこの世界には一人としていないわけで、つまりぼっちである俺はそういう穢れの集合体から切り離された純粹無垢な人間なのであることが暗に証明されている。

要約するとぼっちマジ天使。

ハチマニエルと呼ばれる日はそう遠くはないかもしれない。

「……ふむ、どうやらツツコミを放棄したわけではないようですね」と、俺がまっさらな心で神の啓示をいまかいまかと待っているとなり失礼しますね』微かな揺れと共に俺に寄り添うような形でツインテロリ少女がすぐ真隣に座ってきた。

不意に左腕に伝わる熱。瞬間的に、俺は体を反対側にずらす。いや、違うから。ちよつと風邪気味なだけだから。ソーシャルディスタンス守っただけだから。

空いた間を視線で制し、ついでにロリにも牽制の眼差しを向ける。ロリはきよとんとした顔を浮かべたのちに、次いでハハーンと悪意に満ちた笑みを浮かべ、そしてまたしてもピツタリと身体をすり寄せてきた。

……なにこいつ。一体なにがしたいの？

「それですわねロリコンさん」

「おいふざけんな誰がロリコンだ。俺は断じてロリコンではない！」

「失礼噛みました」

「いや、どう噛んだらロリコンになるんだよ。絶対ウソだろ。絶対わざとだろ」

「かみまみた」

「わざとじゃなかった……」

「……ふむう」

再び距離を離す俺に、ロリ少女はなにやら胡乱な眼差しを向けてくる。なにが気に入くないのか、不満気に鼻息も漏らしていた。しかし不満度具合では言えば明らかに俺の方が上だ。いきなり蹴られるわ暴言吐かれるわロリコン扱いされるわで、もう雪ノ下の毒舌に慣れていなければ確実に今夜はまくらを涙で濡らしていたことだろう。もうマジで危なかったわ。もうマジで雪ノ下さんに感謝だわ。

……やばい、調教済み過ぎてなんだか違う意味で泣けてきた。

「やはり、なにかがしつくり来ませんね。それになんでしょう。なにやら今日の阿良々木さんはいつもと少し違います。一体なにが、どこ

が違うんでしょか」

そう言つてズイツと顔を寄せてくる少女。素晴らしく激しい既視感を覚えながらも俺は視線を明後日の方向へ。

そうして、一方的にガン見されること数秒。

少女は何事か閃いたかのようにぱあつと顔を明るくさせ、

「わかりました！そうです、なにかが変だと思つたら今日の阿良々木さんは目が死んでいらつしやるんですね！それはもう三年ぐらい常温で放置した牛乳のようなドロドロとした目なんです！見事と言つても過言ではない腐り具合ですよ！」

「やっぱりまたそれか……」

もはや聞き慣れすぎて何の感情も湧いてこない。いや、嘘だった。やっぱりムカつくし、腹立たしい。

というか、そんなに俺の目つてダメなの？いやいや、そんなことないって。ほら、納豆とかくさやだつて見た目や臭いは腐つてるっぽいけど実際食べてみると美味しいでしょ。つまり、そういうことだよ。……いや、どういうことだよ。

「つまり腐つてるように見えて、しかし実際は食べてみると美味しいというわけなんですね、阿良々木さんの目玉は」

「違えし何よりも発想が怖すぎんだろ……」

思わず返してしまつたツツコミに少女はニシシシと楽しげな笑みを見せる。そんな年相応な表情を見ながら俺はしばしの間を閉口し、そして……一つ、大きな溜め息を吐いた。

立ち上がり、一步を踏み出す。案の定、後ろから声がかげられた。

「阿良々木さん？」

「……………」

だが、俺は無言で足早に歩を進める。一刻も早くこの少女から離れたかった。……離れる必要があつた。

雰囲気から察するに、たぶん、こいつは『阿良々木暦』の知り合いか何かなのだらう。ずいぶんと慣れ慣れしいことから、きっと親しい間柄であることは間違いないと思う。

小学生と親しい間柄とか一男子高校生としてはある意味でギリギリ

リアウトなんじゃないのかと思わないこともないが、だが、今はそんなことはどうでもいい。今はそんなことを考えている余裕は無かった。何故なら俺は『阿良々木暦』ではなく『比企谷八幡』だからだ。だったら……あとは言わずもなだらう？

砂場を通り過ぎ、出入り口付近の掲示板を横切る。……が、そこで俺の歩みは止まった。

後ろから腕を掴まれていた。

振り向く。ふんわりとした柔和な笑顔が俺を見上げていた。

「待って下さい、阿良々木さん。……いえ、阿良々木さんの姿をした誰かさん、といった方がいいでしょうか？」

「っ……!?!」

驚く俺にもう一度柔らかく笑いかけ、その少女は言う。

年不相応に穏やかな声で、

「私は八九寺、真宵。八九寺真宵と申します。よろしければ、貴方の話を聞かせてはくれませんか？」

三話

「比企谷八幡さん、ですか」

ツインテロリ少女ー八九寺真宵は反芻するように俺の名前を呟いた。ベンチの上、二人並んで座りながら、八九寺は比企谷八幡比企谷八幡と繰り返しの口の中で舌足らずに発音してから、俺に向き直る。

第一声。

「で、ひき肉八宝菜さんは」

「こら待てなんでそうなる。びっくりを通り越してちよつとだけ美味しそうだとか思っちゃまったじゃねえか。っていうかさっきまで普通に言えてただろ、お前」

「失礼。噛みました」

「絶対わざとだろ」

「かみまみた」

「わざとじゃなかった……」

「彼氏見た？」

「ちっ、ビッチが……!!」

つい反射的に怨嗟の念を込めてしまった。

少子化万歳、世界中のカップルは破局もしくは爆発すればいいのにと世界の意思に願いながら真横の女子小学生に目を向ける。

彼女、八九寺はくふふと無邪気に笑っていた。

「……んだよ」

「いえいえ、べつに。ただ他の方とこのやり取りをするのも新鮮だなあと思ひまして」

「はあ？なんだそりゃ」

「だからこちらの話です。で、そんなことよりもですね、比企谷さん。話を戻しましょう。確か助けたカメに連れられて竜宮城へ、というところまで話をされたんでしたっけ？」

「全然違え……。一体何島太郎さんの話だよ、それ」

話聞いてないどころのレベルじゃねえ。つーか、一呼吸の合間合間にボケを突っ込まなきや気が済まないのかこのチビッコは。

「はっはっは、冗談ですって。しかし目が覚めた時には既にその状態だったとなると……うーむ、やはり原因は寝る前、もしくは直前にあったと見るべきかもしれませんね。なにか思い出せる範囲で心当たることはないですか?」

「いや、んなこと言われてもな……」

別段、特別なことをしたような覚えは無かった。まあ強いて言うならば普段よりもほんの少し夜更かしして、ジョジョの奇妙な冒険を一気読みしていたぐらいだろう。

はっ!まさか知らぬ間にスタンド攻撃を受けていたのか……!?!
んなわけないって。

「やっぱり解らん。なにも思いつかん」

「うむむむむ、そうですか」

そう言つて八九寺は全力稼働するエアコンみたいにウンウンと唸り声をあげている。

どうやら真剣に思い悩んでいるらしいその女子小学生に、俺はつい聞いてしまう。それは俺からしてみれば根本的にも過ぎる疑問。

「お前さ、もしかしてマジで信じるのか?」

「はい?」

きよとんとした顔を浮かべる八九寺に俺は言葉を続ける。

「いや、だから俺の身体が入れ替わったって話のことだ。普通に考えて突拍子無さすぎだろ。少しぐらいは俺が嘘ついてるかもって考えないのか?」

「え、嘘だつたんですか?」

「……まあ、嘘じゃあないけど」

「だったら問題無いじゃないですか。比企谷さんが嘘をついていないと仰る限り、私はそれを信じますよ」

「……………」

愕然とするとは正にこの事だった。

え、マジでなんなのこの子。ちよつと眩しすぎて直視出来ないんだけど。というか、人を信じやすいにもほどがある。アホの子筆頭でもあるあの由比ヶ浜でさえもう少し疑り深いというのに。いや、さすが

にこれは将来が心配になってくるぐらいのレベル。

試しに、嘘をついてみた。

「実はな、俺は地球の平和を守る為に月の裏側からやってきた宇宙人だったりするんだ」

「えっ！本当ですかっ!?!」

「昨日の時点で悪の怪人を三百人くらいはやつつけてきた。ちなみに走行速度はマツハニ。○だ」

「三百人！マツハニ。○！めちゃくちゃ格好いいです！」

「という冗談はさておき、本当のところ俺は幼い頃にお前と生き別れになった実の兄だったのだ。会いたかったぞ、妹よ！」

「お、お兄ちゃん！」

ガシリつ、と。

潤んだ瞳で抱きついてきた八九寺の肩をポンポンと叩きながら、そつと身体を離す。感極まった表情の八九寺に慈しみを含んだ視線を向け、俺はフツと柔らかい笑顔を浮かべて一言。

「まあ全部嘘なんだけどな」

「最低です！最低な嘘つき野郎でした！」

マツハニ。○で俺から離れていった。

距離を取り、まるで親の仇だとしても言わんばかりに俺を睨んでいる。いや気付くの遅過ぎるだろ。全部棒読みだったぞ、俺。

「ひどいです！あんまりです！信じていたのに……!!」

「くっくっく、馬鹿め。この世は騙すか騙されるかだ。つまり、この薄汚れた世界においては簡単に騙される方が圧倒的に悪いんだよ。くははははは！」

それこそがこの世の真理であり、事実、俺は人生においてだいぶ早い段階で、その理をこの身をもって味わっている。

高笑いしながら思い出すのは、俺が小学四年生だった時のこと。

——ふとその存在に気付いた机の中の可愛らしい柄の便箋。

——そこには女の子特有の丸文字で書かれた「ずつとあなたが好きでした」の言葉。そして、その下には「放課後、体育館の裏に来てください」と小さく書かれた呼び出し文が。

——驚き、しかし喜び高揚しながらその日一日を過ごし、そうして瞬く間にやってきた放課後。俺はウキウキワクワクと心臓を弾ませながら体育館の裏を目指し、そして——

「……ドッキリってなんだよ……ドッキリとか、無いだろ……!!返せ……!!俺の純情とトキメキを、今すぐ返せ……!!」

「あ、あの……大丈夫ですか？元氣、だしてください比企谷さん」

死にたくなるような思い出し憂鬱を会って間もない小学生に慰められた挙句、ちよつとだけその言葉で落ち着きを取り戻してしまった哀れな男子高校生の姿がそこにはあった。

というか俺だった。

小学生の言葉に安心感を覚えるとかどんだけ優しさに飢えてるんだよ。もはや可哀想すぎるだろ、俺。

「……………」

「どうです？少しは落ち着きましたか？」

「……はい」

「そうですか。それはよかったです」

満面に浮かんだその柔和な笑みに一瞬だけ鼓動が高鳴ってしまふ。

い、いや、違うからね。別にロリコンってわけじゃないからね。ただちよつと年下の小学生にトキメキを覚えちゃっただけだから。ちよつとだけ好きになりそうになっちゃっただけだから。いやそれも立派なロリコンじゃねえか。

「まあ、ともかくです。そうですね。何故信じるか……ふむ、確かに比企谷さんが不思議に思うのも無理はないのかもしれませんが。身体が入れ替わるだなんて話、普通は信じられない。信じられるわけがない。何故ならありえないからです。そんなことはマンガやアニメといった空想の中でしか存在しえない空想の出来事、現象でしかないのだから。だからありえない。ありえるはずがない」

「……そうだ。だから、」

「しかし、実際にはありえるとしたら、貴方はどうしますか？」

「——は？」

悪戯っ子が浮かべるような笑みを前に俺は言葉を詰まらせる。

八九寺はこちらに向き直り、真っ直ぐ俺の目を見据えながら続けた。

「そんなマンガのような出来事が、空想上のものでしかない事が、物が、実際に存在するとしたらどうしますか？それは入れ替わりの話だけではなく、例えば数百年も生きた凄絶な吸血鬼の伝説だったり、重みを根こそぎ奪っていく蟹の神様の話だったり、あらゆる願いを叶えてくれる猿の腕だったり、人の身体に乗り移る白猫の怪異だったり、……永遠に迷い続ける、かたむつりの霊だったり」

八九寺は言う。それは真っ直ぐで、毅然としていて、そして何よりも重みのある言葉だった。

「私は知っています。そういった空想が、しかし実際には現実に入り混じっているのだということ。私は知っています。この広い世界の中でありえないなんて言葉こそが実はありえないことなのだということ。だから……ともかく、私は信じますよ。そして貴方を助きたいとも思っています。誰かに助けられた私だからこそ、今度は誰かを助けてあげられたらなって。まあ、つまりそういうことですよ」

「……………」
そう言つて、最後に恥ずかしそうに照れ笑いする八九寺が本当の意味で眩しかった。

薄っぺらい俺なんかとは違う。あいつとー雪ノ下雪乃とはまた違う種類の輝き。

眩しくて、尊くて、美しい。

もちろん俺は断じてロリコンではない。だからこそ、この気持ちは恋愛感情なのではなく、多分、きつと……

「……………なあ、八九寺」

「はい。なんですか？」

「あのさ。もしお前さえ良ければけど……その、俺の友達にな」

「あ、すみません、それは全力で遠慮させていただきます」

「……………」

多分、今までで一番キラキラとした笑顔だった。引き攣った笑みのまま、俺はおもむろに天空を見上げる。

はいはいはいはい、どうせトチ狂った俺が馬鹿でしたよー。

もうホント、俺以外みんな爆発すればいいのに。

四話

三人寄れば文殊の知恵。昔の人はこんなことわざを残している。確か意味としては「特別に頭のいい奴がいなくても、何人かで集まって相談すれば良い案が出てくる」的なものだっただろうと記憶している。

なるほど。一見してみれば確かに良い言葉だ。たとえば優れたものがないくとも、人は協力することによって優れたものを生み出せる。それは暗に協調の重要性を説いた言葉であるのかもしれない。

だが、待てよ……と。

そんな素晴らしい故事を前にして、しかし俺はここで一つの異を唱えてみようと思う。

それは事の根幹であり、根っここの部分についての問いかけでもあった。それは単純にして簡潔な問い。……果たして、本当に人は真なる意味で協調のなせる種族なのか、と。

人間は本来利己的な生き物である。

自分の意見を最良と捉え、もしその意見に対してわずかにでも否定的な言葉を向けられれば、即座にそのものを敵とみなす。絶対的に相容れないものとし、力の限り排除しようとする。

何故ならば、人は意見の否定そのものを自らの否定と受けとるからだ。

自分の意に沿わない、たとえば反対意見を出されずとも賛成的な態度を取られないだけでもあいつは気に入らないと吐き捨て、あわや少しでも違う意見を出すだけで調子に乗っているとさげすむ。底知れぬ悪意を向け、容赦なく追い詰め、そして挙句の果てには自身の正当性を示すためだけに相手をとぼしめるのだ。ソースは俺。おかげで俺は中学の三年間を「うん」か「はい」だけで過ごすハメになった。

というか、なんであいつらちよつと嫌そうな顔しただけで本気ギレしてくるの？もしかして普段からカルシウム足りてないの？

俺なんてほぼ毎日練乳たっぷりカルシウムたっぷりの手作りM A Xコーヒーを飲んでるというのに。……だって、この世で唯一俺を甘

やかしてくれるのがその一杯だけだからね、ふへっ。

「……比企谷さん。なにやら私の気のせいではないければ更に目が濁ったように見えるんですが本当に大丈夫ですか？というか、いい加減その顔で目を腐らせるのは是非ともやめてもらいたいんですが。阿良々木さんの容姿でそれをやられるとヒドく違和感がありすぎて、その……非常に気持ちが悪いです」

「知るかよ。文句なら俺じゃなくて、俺に優しくないこの社会に言え。っていうか、そうだよ。きつと俺の目が腐ってるわけじゃない。この世界そのものが究極的に腐ってるからそれを映しだす俺の目まで腐ってるように見えるだけで、つまり結論から言えば俺は悪くない。悪いのはこのぼつちに優しくない世界の方なんだ！」

「お、落ち着いてください比企谷さん！その責任転嫁はあまりにも無理があります！あなたは一人でこの世界に反旗を翻すというのですか！」

何故か話が壮大になっていた。ちよつとだけ厨二心もくすぐられる。ただ、その話の大元があまりに矮小すぎて悲しくなってくるのが普通に辛い所だ。

「まあ、涙を拭いてください比企谷さん。それにあなたの身に起こった現象そのものに厨二病感が漂っていることは確かに否めませんね。精神が別のモノに入り込んでしまうなんて、普通に考えれば相当に現実離れしていますし。ねえ、引きこもりさん？」

「誰が現実社会から隔離された生粋の引きこもりさんだ。一瞬、なんの違和感もなく肯定しそうになつちまったじゃねえか」

少なくとも夏休み中はそれこそ俗世との縁を切った釈迦のごとく外界との接触を断とうと思っていたから尚のことである。危ねえ危ねえギリギリセーフ。

というか厨二病なんて言葉よく知ってたな、このロリ。

「失礼。噛みました」

「絶対わざとだろ」

「噛みまみた」

「わざとじゃなかった……」

「噛みまみた?」

「いや、疑問系にされても……」

それよりもキョトンと小首傾けながら俺を見るな上目遣いをする
なちよつとだけ可愛いとか思っちゃまったじゃねえかこの野郎。いや、
だからボクはロリコンではないです。

自身の性癖に、否、心に今一度戒めの言葉を刻み込み、そして溜め
息を一つ。

駄目だ……全然話が進まねえ。

文殊の知恵どころか「もんじゅ?それって鉄板の上で焼くやつ?」
ぐらいのレベルでしか話し合いが出来ていない。

やっぱ、いくらなんでも小学生には荷が重すぎる話だよな……と、
そんな思いを視線に乗せて向けているとその眼差しの意味に気付い
たのか。八九寺はムツと唇を尖らせた。

「なんですか。まるで私が真剣に考えていないんじゃないかとでも
言いたげな腐ったお顔ですね」

「腐ったは余計だ。言つとくが俺の本来のお顔は目以外はわりとハイ
スペックなんだぞ。むしろ目以外はイケメンだと言つても差し支え
ないほどだ」

「そんな虚言妄言はさておき、心外です。憤慨と言い換えてもいいで
しょう。まさかこの私が比企ヶ谷さんごときに見くびられるとは
思ってもいませんでしたよ。ほのかな怒りを覚えるほどです。もう
こうなれば比企谷さんには真なる私の力をお見せするほかにないよ
うですね」

あと変身を二段階くらい残していそうなラスボスじみた言葉と共
に、八九寺はビシリとこちらに指を突きつける。そして犬歯を剥き出
しに、大口を開いた。

「二時間。一時間、私に時間をよこすがいいです。私はその制限時間
内に必ずや突破口を見つけ、そしてそれをあなたの鼻先へ突きつける
ことをここで約束しましょう」

「ほお、随分な自信だな。だが本当にそれだけの大見得を切つてもい
いのか?後で後悔しても知らんぞ?」

「ふっふっふ、あいにくと後悔なんて言葉は私のタウンページには載っていないんですよ！」

まあ載っていないだろうな。だってそれ電話帳だし。

「ではまた一時間後に……さらだばー！」

そうして八九寺は野菜食べ放題な捨て台詞を最後に旅立っていった。菜食主義だったんだな、アイツ。

さて……で、俺はどうすりやいいんだ？

遠くの方でひそひそチラチラと顔を寄せ合う主婦達からのプレッシャーを尻目に、仕方なく、俺は一人再び空を眺める作業に移った。

それから、かつきり一時間後。

俺が不審者としてご近所の奥様方から通報されるような事態に陥るよりも早く、八九寺は約束通り、時間通りに再び俺の前へと現れた。えっへんと自信満々な表情を浮かべるロリ少女。その横にはどこだかの学生服に身を包んだこれまた誰とも知らぬ女学生が立っていた。

ちらりと目を向ける。すかさずニコリと笑いかけられ、俺はとっさに視線を地面に落とした。それから無い胸を張った状態の寸胴ボディへと、的確な問いを向ける。

「……誰？」

「ふむ、彼女は羽川さん。羽川、翼さんです。私の知る限りにおいて最高の人格者であり、また今件に関して是最強の助っ人ともいべき天下無双のスーパーアドバイザーです」

「どうも初めまして。羽川翼といいます。確か……比企谷八幡くん、でよかったのかな？ 私なんか力がになれるかは判らないけれど、それでも早く元の生活に戻るよう尽力させてもらうね」

「……は、はあ。どうも」

無駄に折り目正しいご挨拶に俺は引きつった笑いで会釈する。

まさかの登場人物追加。それも女子。しかも俺のような下位カー
ストからしてみれば、それはもはや雲の上の存在ともいうべき美少女
だった。

その容姿は三浦や由比ヶ浜のようにビッチビッチした風ではなく、
むしろ淑女の鑑とでもいったように清廉であり清らかな美。

肩口で揃えたふんわり黒髪ショートカットに印象強い大きな黒い
瞳。化粧つ気のない所やまるで改造のされていない制服から察する
に、たぶん、今時の女子としては珍しい品性校正な部類の人物なのだ
ろう。例えるならば清楚系美人とでもいうべきところだろうか。

どちらかといえば雪ノ下雪乃のタイプに属するだろうその洗練さ
れた佇まいに、しかし俺は知らずの内にA・Tフィールドを展開。

そして再び八九寺に視線を移した。

「おい、八九寺。……ちよつとこつちにこい」

「はい？」

疑問符を浮かべながらも近付いてきた八九寺に、俺は小声で言葉を
続ける。

「お前、これは一体どういうことだ」

「はて。どういうこととは、どういうことですか？」

「いや、だからな。……もしかしてこの羽川さんとやらの話したのか
？その、色々と全部」

「……うゝええ、もちろん話しましたよ。色々と全部」

平然とのたまったアホのアホ発言に軽く「イラッ☆」ときてしまっ
た。

この野郎。ただでさえ現実では受け入れられない、ともすれば電波
ゆんゆん野郎とさえ受け取られかねないこの現状を、よりにもよって
こんな知的度限界突破な清楚女子に全部話しやがったのか。

失策……!! 圧倒的失策……!!

まさかのウルトラミスだ。もはや呆れを通り越して怒りの感情が
こみ上げてきた。

「ありえねえ……。ないわ。マジでないわ、お前」

「むっ、何やらずいぶん言い草じゃあないですか。確かに羽川さんのものに比べれば私のものなんてそりゃあ無いにも等しい体積量であることは認めますが、しかしそれでも同年代の子たちと比べればそれなりに大きい方ではあるんですよ？むしろ、これでも発育はよろしいほうだと自負しております」

そうして胸元に両掌を当てる八九寺。

なにをどう勘違いして聞いたのか。思わず可哀想な子を前にしたような態度で丁寧に言い直してやろうかとも思ったが、まあしかし、ボケを重ねられても面倒くさいのでとりあえずやめておく。

それよりも問題は……と、わずかに顔を上げた所で不意に、唐突に、羽川翼の顔がデデンと視界の中央に現れた。

すぐ近く。それこそ彼女が使っているだろうシャンプーの匂いが鼻腔をくすぐるぐらいに極近な距離で、羽川は再びニコリと俺に笑いかけてくる。

俺、フリーズ。

やっぱり近くで見ても可愛いな、とか。近くで見ると余計に胸でけえんだな、とか。そんなどうでもいい思考だけが働く状態で、しかし身体は固まったままだった。

目と目が合う。羽川は一切視線を逸らすことなく、口を開いた。

「大丈夫。安心して喋ってくれていいんだよ、比企谷くん。たとえ貴方の口から出た言葉がどんなに突拍子のないものだったりしても私は決して笑ったりしない。否定したりしない。だから……ねっ？私にも力にならせてくれないかな？」

そう言つて羽川は俺の顔をジッと見る。

純粹で、透明で、そして異質。まるで心の裏側まで見透かされるようなその瞳に気圧される形で、俺は大きく後ろに仰け反った。

というか、その……すごく、近いです……。

どいつもこいつも俺のパーソナルスペース内にずけずけと入り込んでくる。領空侵犯もいいどころだ。おかげで胸のドキドキが止まらない。

はっ!!もしかしたらこれが……不整脈ツ!?

そうだ、病院へ行こう。

「あの……ダメ、かな？」

「は？……ああ、いや、別にダメってことはないけど……」
「けど？」

「……いやなんでもない。その、よろしく、頼む」

「うん。よろしくね」

笑顔がまぶしい。とりあえずは警戒の必要のない相手なんだろうか。少なくとも、人の悪意や害意を見定めることにかけては右に出るものは居ないと自負している俺の外敵センサーにも一切の反応はない。

ならば……仕方がない。一応は仮初めの馴れ合いに興じてやるかと。俺は八九寺を防御壁として間に挟みこみ、強者の笑みで羽川翼を我が傘下に迎え入れてやることにした。

べ、べつに笑顔はひきつってないよ？女の子との距離感を測りかねてるなんてこともないよ？全然、もうホント、至って冷静。超クール。

……イヤ、ホントニホントダヨ？

「比企谷さん、服の布地が伸びるのであまり強く袖を握らないでくれませんか？っていうか、後ろからグイグイと押さないでください。非常に鬱陶しいです」

小学生にめちやくちや本気のトーンで嫌がられた。

傷付いた。「全くもう、俺ってば老若男女問わず嫌われるダメな子なんだから☆」なんてキャラがブレブレになっちゃうぐらいには傷付いた。

大人しく離れ、心なし二人から距離を取りつつ、ベンチの端に座る。

羽川翼はそんな俺にそこはかとなない苦笑を向けながら、とりあえず場を一旦整理するように「じゃあ、挨拶はこれぐらいにして」と手を叩き、

「では作戦会議を始めます」

ちよつとだけおちやらけた風に号令が発せられる。

横で「さ、作戦会議……!!」と瞳を輝かせるお子ちやまをガン無視し、俺はいの一番に手を挙げた。

「はい、比企谷くん」

「まず始めに確認しておきたいのだが、具体的にはこの場で何を会議すりゃあいいんだ？」

「なにつて、それはもちろんどうやって比企谷さんを元に戻すかということについての話し合いじゃないんですか？」

俺の質問に羽川よりも先に八九寺が反応を示す。だが、そのアンサーは少しばかり見当違いなものだ。

仕方ないな。ここは俺が年上らしくバシッと……

「ううん、確かに大枠で言えば真宵ちゃんの言う通りなんだけど、その前にまず行動指針を決めなくちゃいけないかな。比企谷くんの場合、はなんでこうなったのかっていう原因も理由もまだ分かってないし、それに比企谷くんだけじゃなくて阿良々木くんの所在——今回の件においては、阿良々木くんの精神の所在もまだ解らないし。阿良々木くんの身体に二つの精神があるのか、単純に入れ替わったのか、それとも第三者の存在があるのか。そういう現状とか、原因とかをまず明確にして、それから対策を考えるっていう風に物事を順序立てて決めていくような話し合いにしたいと思ってるの」

「なるほど、そういうことですか。さすがは羽川さんです！頼りになります！」

「……………」

……まあ、そういうことですよ、はい。

準備万端に開いた口をゆっくりと閉ざし、俺はベンチの片隅で物言わぬ銅像と化した。

べ、べつに気にしてなんかねーよ？だって俺も同じこと思ってたし。

聞く人が聞かなくても十分に負け惜しみに聞こえる言を胸中で呟きながら、俺は俺抜きで順調に進んでいく話し合いをソツと草葉の陰から見守る。

時折思い出したように向けられる意見に適当に頷き、適当に反対意見も交えながら、考えることは一つ。

話し合いのルビは話し合い（ただしぼっち teme はダメだ）で間違

いないと思えました。
ファイナルアンサー！

五話

どうすれば美人で優しくてかつ俺を十二分に養ってくれるぐらいには経済力のある女性と巡り会えるのだろうか……と。

俺の将来設計において最も重要といえるだろうまだ見ぬパーフェクトレディの攻略法を一人、微動だにもしない置き物と化しながら真剣に黙考していた最中のことだった。

羽川翼が俺にその言葉を向けたのは。

「……家に戻れ……だと?」

「うん。お願い出来ないかな?」

そう言って羽川は手を合わせる。その姿になんとなくナマステと言いたくなつた衝動はともかくとして、俺はさほど要領を得ないままに羽川を見やる事しか出来なかった。

戻るって、それはつまりこいつのー阿良々木暦の家に戻るってことか?」

「えっと、そうだね。とりあえずこれから図書館で可能な限りの情報を調べようって話までは聞いてたよね?」

「お、おう」

もちろん聞いていなかったがとりあえず表面上では肯定しておく。

「だけどね、その……ちよつと言いくいんだけど……」

そして若干の苦笑いで言葉を濁す羽川。それに訝しみの視線を向けていたら横からフォローが入った。

「つまりですね。比企谷さんの今現在の格好があまりにだらしなすぎて国家権力にさえ目をつけられかねないので可及的速やかに真人間な服装に着替えて欲しいんです、と。端的に言えばまあそういうことですよ」

「……………」

清々しいほどにハッキリとした物言いに清々しいほどにハッキリと傷つきながら、俺は視線を自らの身体に落とす。

ヨレたTシャツにスウェット生地のハーフパンツ。更にその下へと目を向ければ土で汚れた素足がことさらに不潔感を際立たせてい

て……なるほど、確かにアレだな。

その姿は最近の無職住所不定な方々の方がまだマトモな格好をしているのではないかと錯覚してしまうぐらいにはみすぼらしいといえる。

「どうです。もはや存在していること自体が恥ずかしいぐらいの格好でしょう？ねえ、生き恥さん」

「別にそこまでは思ってたねえよ……。あと、お前にとつては上手く言っちゃった感があるのかも知れんが、少なくとも俺にとつては今の人生において最も傷ついたといつても過言ではないアダ名だぞ、それ。むしろ致命傷過ぎて一瞬死んじゃおうかなって思っちゃまったじゃねえか。違う。俺の名前は比企谷だ」

「失礼。噛みました」

「絶対わざとだろ」

「かみまみた」

「わざとじゃなかった……」

「ハルヒ見た？」

「いや、俺ガガガ派だから……」

「ちなみに私は講談社派ですね」

「うーん、なら私も講談社派かなあ」

……わあ、なにこの会話すごくどうでもいい。

というか着替えがどうのつて話はどこにいったんだよ、おい。

「ああ、そういえばそうでしたね。いやはや、まったく忘れてました」

「……………」

何やらゆとり教育の弊害を目の当たりにしてしまつたような気分だった。

正しくはすつかり。はい、やっぱりどうでもいいな。

「ちよつと待った。戻るつつつてもだな、俺、帰る道すらわからねえんだけど」

「あ、だったら私のご案内しましょうか。以前伺つたことがあるので大体の場所は把握していますし。それでいいですよね、羽川さん」

「うん。調べものの方は私一人でもなんとかなると思うし、全然問題

ないよ。というわけで、比企谷くんのごことは真宵ちゃんにお任せしちゃおうかな？」

「はいっ、ご安心して任せてください！それこそマリーセレスト号にでも乗ったような気分です！」

「なにそれ全然安心できねえ……」

不吉すぎんだろその大船。そして誰も居なくなるの？

まだバナナボートの方が安心出来そうだな……と、不安しかない俺に羽川翼は無駄に整った笑みを向け、

「じゃあ、私はもう行くね。比企谷くんも、向こうに着いて準備が出来たようなら連絡もらえるかな？きつと阿良々木くんの携帯に私の番号が入ってると思うから」

「……おう、わかった」

「よろしくね。それじゃあまた後で」

そして歩き去っていった。後に残された俺と八九寺は顔を見合わせる。

「では、私達も行きましょうか」

るんるんと足進む八九寺の背に俺も渋々と、嫌々と、付いていく。

——せめて誰も居ませんようにと。

天を仰いで、神に祈るばかりだった。

それは、俺にとって悪魔城にも匹敵した威圧感を放っていた。

「はい、到着です」

「……………」

そこそこに立派な一軒家。入り口そばには阿良々木と表記された長方形のプレートがこれみよがしに掛けられている。

間違いなく、むしろ間違いであって欲しかったが、残念ながら、こ

こが俺達の目指していた目的地であるらしい。

着いてしまった。とうとう、着いてしまったのだ、この魔窟に。

「……はあ」

「むっ、なんですか比企谷さん。わざわざ案内したというのに、浮かない顔で溜め息なんてずいぶんとご挨拶ですね」

せつかく連れて来てやったのに不満でもあるのかアアン？とでも言いたげに眉をひそめる八九寺だったが、けれど俺は返答の一つも吐き出さずにジッと阿良々木家を見上げる。

思い起こすは朝の惨状。金属バット、デビルレディ、真なる意味でスクランブルしてしまった可哀想な卵に、味噌汁、白米、それと奇声を上げながら家を飛び出したあの思い出したくもない情景、黒歴史。……やべえ、超入りたくねえ……。

ピクリとも足が先に進まない。もしやこの家屋には不可視の魔術結界的なものが張られているのではないだろうか。だったらば、致し方ない。この場は退却するのが一番の良策だろうと確信し、回れ右、そして後方へ全速前進しようと身体を傾けた俺の身体がしかすかさず掴まれた。

しまった！伏兵か！とか気分を出して驚いてみたがどう考えても違いますよね知ってます。

振り向けば普通に八九寺が俺のシャツの裾を力の限り握りしめていた。

「どこ行く気ですか。方向間違えてますよ。進む先はこっちです。腐りすぎて現実すら歪めて映しているんですかその瞳は」

「……………」

えらい言われようだったが地味に否定出来ないのが悔しいの……ビクンビクン。

とりあえず再び旋回し、元の位置へ。背中にせつつかれるような視線を感じながら玄関のドアノブに手をかけた。開く。幸か不幸か、錠はされていなかった。

「って、いいのか？これって立派な家宅侵入じゃないのか？」

「何言ってるんですか。今の貴方は阿良々木さんで、この家は阿良々

木さんの家なんですから。ただ自分の家に帰るだけで不法なものもないでしょう？」

……まあそれもそうだな。

当たり前にも過ぎる言葉に納得し、それでもおそろおそろと家の中へ。足裏の土を払い、そうして周囲を警戒しながら上がり込むが……しかし、どういうことだろう。家中には会話の声はおろか、物音一つさえもしていなかった。呼吸さえ躊躇われるような沈黙しかない。

「どうやら、家の方は留守のようですね」

「……施錠もせずに家を空けるとかマジかよ。随分と無用心な奴らなんだな、この宅の住人は」

だが、それはそれで俺にとっては都合のいいことではある。この隙にさつさと支度を済ませちまおう。

記憶を呼び起こしながら、二階にあっただろう阿良々木暦の部屋へ無駄に忍び足で侵入。適当にクローゼットの中からパーカーとジーパンを見繕い、ついでにベッドの脇に置かれた携帯も運良く見つけ、ゲットした。

……よし、目的のブツは全て揃ったな。

気分的には空き巣ドロのようで内心ドキドキだったが、まあそれも仕方のないことなわけで。

とりあえずさつさと着替えてしまおうと服に腕を通し、足を通し、ようやく住居不定無職風な呪われた装備からは脱することが出来た。

あとは携帯から羽川に電話するだけ……と、携帯電話を手に取り、画面へと視線を向ける。

そして戦慄とした。

『小妹 不在着信 五十一件』

『大妹 不在着信 二十七件』

こ……怖えええ!!

嫌がらせなんてレベルじゃない。軽くホラー過ぎてマジで笑えない。

背筋に確かな薄ら寒いものを感じながら、俺は履歴を追って確認していく。小妹。大妹。これは多分、今朝に見たあいつらの事だろう。

どうやらとんだブラコン二人組らしい。恥ずかしい奴らだ。それに比べて俺の小町なんて全く俺に電話してこない。たまにメールで『コーラ飲みたい』『ぶっちょ欲しい』『砂糖切れたから買ってきて』とやり取りするぐらいだ。おかげで俺のお世話力はメキメキと力をつけている。世間話の数よりお世話の数の方が多いためである。つまり妹としては小町の勝利。そして兄としては俺の完全敗北だった。

なんだかすごく悲しくなった。

「……………」

と、向けられた愛情の格差に絶望している間に、俺はまた別の不在着信を画面上に見つける。

名前の表示は『戦場ヶ原ひたぎ』

……………誰だ？

「ふむ、不在着信ですか」

「ぬおっ!？」

いきなり再登場した(ちなみに着替えが終わるまでドアの外で待ってもらっていたのだが)八九寺がキリンがごとく首を伸ばして後ろから携帯の画面を覗きこんでいた。普通に、平凡に、びっくりした。

が、身体を仰け反らせた俺のことなどまるで気にも留める様子もなく、八九寺は言葉を続ける。

「珍しいですね。阿良々木さんの携帯に着信が入ってるだなんて」

「そうか？着信ぐらい別になんてことないだろ」

「ああ、いえ、間違えました。言い直しましょう。珍しいですね。友達のない可哀想な阿良々木さんの携帯に着信が入ってるだなんて」

「ほお」

新たに知った阿良々木暦のステータスに少しばかりのシンパシーを覚える。そうか、やはりこいつもそうであったか。

ぼっちは同族を見つけることに関しては他の誰よりも秀で、長けている。

どこことなく幸の薄そうな顔面からなんとなくそんなオーラは感じ取っていたが、そうかそうか、やはり俺のぼっちセンサーは間違っていないかったようだな。

そうなつてくると……ふむ、何故だろう。そうと分かった途端、さつきまでは空気中の塵以上にどうでもよかった阿良々木曆なる男に妙な親近感を覚えてしまった。ならば仕方がない。この場に居ない奴の代わりに、多少は俺からフォロワーを入れてやるとするか。

「まあ待て。友達が居ないことと可哀想ってことは別に同意義ではないはずだろう。というか年がら年中人間関係とかいう不要極まりないしがらみから解放されていることを考えればその逆、むしろ羨望の眼差しを向けられてもいいぐらいだと俺は思うわけで、つまり逆説的に言うならばぼっちマジ最高という結論に至る。更に言うならば普段から着信がないということは他人以上にその分の時間を違う事に効率的に使えているということに他ならないわけであり、要するに着信すら無いぼっちは時間的精神的余裕において常人よりも一線を画した自由度を有していると証明が出来る。この絶大なメリツトを鑑みるに、ぼっちと非ぼっち、もはやどちらが悠々自適に生を謳歌しているかは論議するまでもない。やはり揺るぎないな、ぼっち」

こうやって客観的に分析すればするほどぼっちの優位性が溢れ出てくる。

ふむ、やはりぼっちこそが選ばれし人類、優良種たる存在であるのかもしれない。なんならジークジオンとか叫びたくなつてくる。どうせなら俺の中の人を銀河万丈だったら良かったのに。

……なんの話だ。

「……なんかいきなり饒舌になりましたけど、それは友達の居ない可哀想な自分の正当性を回りくどく示しているんだと受けとつてもいいんでしょうか？」

「ふっ、確かに俺の携帯にも家族ぐらいしか電話はしてこないが、しかしそれは違うな。間違っているぞ、八九寺。俺は単に自分の価値観を相手に押し付けるなど言ってるんだ。友達居ないから可哀想って誰が決めた。少なくとも俺は一人で居ることに苦痛を感じたことなんて一度もない。むしろ他人の行動や言動に囚われて一喜一憂するぐらいなら常に一人で居たいまでである」

「むう。ですが、それは比企谷さんが友達付き合いの下手な方だから

そう思われてるだけなんじゃないんですか？」

「そうかもな。だけど、それが俺の価値観だ。俺の信条なんだよ。それを他人にどうこう思われたくないし、あわや同情されるなんて真っ平ゴメンだ。その阿良々木がどうかは知らんが、少なくとも俺はそうなんだよ。つまり世の中にはそういう人間も居るってことだ。かの有名な金子みすゞも言ってただろ？『みんなちがって、みんないい』ってな」

「……金子みすゞ先生もまさかこんな話にあの名文を持ち出されるとは思ってもいなかったでしょうけど……けど確かに、悔しいですが今回は比企谷さんの言うとおりのかもしれないかもしれませぬ。私が間違っていました。友達がいないから可哀想というのは私の価値観をただ押し付けていただけのようです。反省しますよ」

言って、八九寺は頭をうなだれた。

普段から毒舌が過ぎるやつではあるが、しかし反省すべき所ではちゃんと素直に反省するらしい。やはり、根本的にはしっかりした奴なんだろう。

世のビッチ共にこいつの爪のアカをせんじて飲まさせてやりたいぐらいだ。

「まあ反省するほどの事でもないけどな。今のだって、他人から見れば俺の価値観を押し付けたように見えたかもしれないねえし」

「いえ、そんなことはありませんよ。勉強になりました。それに私にも言い過ぎた感があった所は否めませぬしね。阿良々木さんにだつて決して交友関係がないわけでもありませんから」

陰の差していた八九寺の表情に笑顔が灯る。……ふむ、阿良々木暦の交友関係か。小学生なロリ少女を知り合いに持つぐらいの男だ。普段ならばまるで気にもかけない他人事情ではあったが、何故かこの時ばかりはわずかなりとも興味を持ってしまった。あまつさえ聞いてみようかと考えてしまったぐらいだ。

自分らしくない行動だと思う。そして、そういつたらしくないことをした時に限って嫌な思いをするのだということ、俺は失念していた。

「交友関係って、お前や羽川以外にもか？」

「ええ、まあ。一応私の知る限りでは……」

思い出すように宙空に視線を彷徨わせながら、八九寺は舌を滑らせる。

一人目、スタイル抜群でスポーツ万能で明るく元気で阿良々木暦を心底から尊敬している後輩の美少女、神原駿河。

二人目、内気で大人しいが阿良々木暦には『暦お兄ちゃん』と親愛を持って接する妹的存在これまた超絶美少女、千石撫子。

そして最後に、極度のツンデレでありながらも外見はパーフェクトなクールビューティを地で行く綺麗系美人な阿良々木暦の『彼女』、戦場ヶ原ひたぎ。

……彼女。そう、彼女。彼女である。

彼女の女と書いて彼女。阿良々木暦の彼女と書いて戦場ヶ原ひたぎである。

つまり、同じぼっちであると親近感を覚えていた阿良々木暦には実は頻繁に不在着信を残し合う同士の彼女がいたのであった。しかも知り合いは全員美少女で、おまけに好感度もMAX近いときた。

もはやハーレムといっても過言ではない。

もはや暦氏ねといっても過言ではない。

リア充、滅ぶべし！

「……とりあえず、出会い系サイトに登録しまくっておこう」

固く決心し、再び携帯を見る。と、ちよūdそそのタイピングで着信が入った。見れば画面には羽川の文字が。無視をするわけにもいなかったので、とりあえず出ることにした。

「もしもし」

『あ、もしもし。比企谷くん？』

その声はまぎれもなく羽川のものだった。真横で耳を澄ます八九寺から身をよじって離れ、俺は続けて応答に答える。

「ああ、羽川か。どうした？」

『そろそろ支度が終わってるんじゃないかと思って電話したんだけど、どうかな？ちよūdと連絡するには早すぎちゃったかな？』

「……いや、そうでもない」

むしろドンピシャだった、とは言わないでおく。ついでに阿良々木暦の携帯をスパムメールだらけにする所だったとも言わないでおいた。

『じゃあ、もうすぐにも出れたりする？実は私いま駅前に居るんだけれど』

「駅前？」

その言葉に違和感を覚えた。こいつ確か図書館で調べものするか言ってなかったか？

『そっちはもう終わったの。だから、あとは合流するだけなんだけど……』

「終わったって……っ、まさかこうなつた原因がわかつたのか!？」

ガタン、と。突然に隣の部屋から聞こえた物音にも意識を逸らさず、俺は息を荒げながら羽川に問いかけた。

知らずのうちに携帯を握る手に力がこもる。……が、羽川はYESともNOとも答えず、どこかもの鬱げな声音で、

『ごめんなさい。まだハッキリとはしてないから明確に答えを出すことが出来ないけど、でもその答えを導き出す方法なら私は知ってる。だから……ごめん、電話だとちよつと話しづらいから、とにかく今は急いで駅前まで来てもらえないかな？』

それはどこか腑に落ちない返答だった。答えは出せないけど導き出す方法は知ってる。それは答えを知っているということと同じ意味じゃないのか？

理解が難しい。羽川のその妙な日本語がどうにもよく分からなかった。

『……比企谷くん？』

黙る俺に受話器の向こう側から発せられた気遣うような声。

……いや、そうだったな。今は黙るよりも考えるよりも先にするべきことがあった。

俺は閉じた口を再び開いた。

「わかった。駅前だな。すぐに行く」

『うん、お願い。待ってるね』

通話が切れる。そして何事かと俺を気遣わしげに見る八九寺に、一言だけ。

「駅前まで案内してくれ」

ーようやく、この意味のわからない現状が進展を見せようとしていた。

六話

駅前広場の。老若男女入り乱れたそんな鬱陶しすぎる人混みの合間から、俺はベンチに座る羽川翼の姿を見つけた。

やたらと行儀のよろしい姿勢で、彼女は膝の上に置いた鈍器のように分厚い本へと視線を落としている。その表情は固く、それは声をかけようと開きかけた口を思わず閉じてしまうほどには真剣味を帯びたもので。俺はやはり沈黙を保ったまま静かに近寄った。

背後に立ち、とりあえず咳払い。……しかし気付かれない。更に大きくゴホンゴホン。……だが気付かれない。

もうなんか仕方ないので声をかけた。

「……羽川」

「ひゃっ!？」

ビクリと縦揺れする背中。とっさに振り返った羽川は俺の顔を見るなり更に驚いたように身を引いた。

……ああ、いるいる。俺の顔を見るなりこんな反応するやつ。特に女子。それで必ず最後には『うわ……』とか言うの。もうホント、なんなんだろうな、アレ。……本当になんなんだろう。

「恐らく比企谷さんの腐った目が原因なんじゃないんですか？パニツク映画とかでよく目にする類のリアクションですし。なんか生理的に無理、みたいなの？」

「おいやめる。俺のことを建物の陰からいきなり現れたゾンビと同列に語るんじゃない」

隙あらば精神攻撃をしかけ、そして汚物を前にしたような表情でスツと身を引く八九寺真宵。どうやら一撃離脱を得意戦法としているらしい。とんだヒットアンドアウェイである。というか、むしろ俺の立場がアウェイだった。なんでだ。

「ごめんなさい！そういうつもりじゃなかったの。ただ、ちよつと本を読むのに集中してたせいで気付かなくて……嫌な気分になんかせちやったね。本当にごめんなさい」

そうやって羽川は申し訳なきように頭を下げる。しかし、その対応

に逆に俺は面食らってしまった。

おいおい、なにこの子。めちやくちや礼儀正しいじゃん。めちやくちや良いやつじゃん。いや、ホント、こんな心暖まる気遣われ方したのは今までの人生の中で初めてのことだったかもしれない。もしかしてこいつ俺のこと好きなんじゃないの？いや、むしろ俺の方が好きになっちゃうレベル。それで告白したら笑顔で振られるんだろうなあ……と、そこまでの未来予知を完成させてから、俺はふと羽川の手元に視線を滑らした。

そこにあつたのは先ほども見た分厚い書籍。表紙には『日本・怪異譚』と書かれている。

……怪異譚？

「もしかして、それが調べものの収穫か？」

「……まあ、そんなところかな？」

曖昧な返事。と、その不自然な対応に言及の矛先を向けるよりも早く、羽川は言葉を続ける。

「それよりも聞いておきたいことがあるんだけど。確か、比企谷くんは千葉県の出身であってるのかな？」

「はあ？」

突然の質問に俺、困惑。合ってるといえば合ってるが、それがなんだというんだ。

「そっかそっか。うん、良かった。じゃあ、はいこれ」

にこやかスマイルで、これまた唐突に渡されたのは一枚の切符だった。

『新幹線特急券』と書かれたその文字の下には行き先の地名が記されている。その名は……千葉。

俺は羽川に向き直る。はいこれって……いや、なにこれ？

「千葉に向かう為の切符だよ。ああ、それとこっちは真宵ちゃんのおね」

「へ？私の分もあるんですか？」

「もちろんだよ。はいこれ」

「いえ、ですが、私は……」

「ううん。たぶん、いざって時は必要になると思うから。だから、ぜひとも受け取ってくれないかな?」

「……羽川さん」

たかが切符の受け渡しだけだというのに、何故か背景お花畑なマリ見て空間が展開されていた。

いや、つーか、だから、なにこ（ry

「比企谷さん!切符っ、切符を貰ってしまいました!それも新幹線のですよ新幹線の!ひかりです!のぞみです!こだまです!きよしです!」

「……はいはい、わかった。わかったから落ち着いて喋れっつての」

八九寺は興奮のあまりアタックチャンスでもかましそうな勢いで鼻息を荒げていた。

とりあえず最後のは新幹線じゃないからな?つなげて読んだら人の名前になっちゃうからな?」

今は亡き名司会者に合掌。そして俺は残念な小学生から視線を外し、その横に立つニコニコ笑顔に再度物申した。

「で、羽川。これは一体どういうことなんだ?」

言いたいことは色々とあるが、ひとまずはこの件について問いただす必要があった。

単刀直入に向けた疑問に、羽川は至極落ち着いた風に口を開く。

「……実はね。比企ヶ谷くん達と別れてすぐに携帯に着信があったの。その身体の本来の持ち主でもある、阿良々木くん本人から」

「……!!」

「ほ、本当ですか、羽川さん!?!」

目の色を変えて前のめりになる八九寺に羽川はこくりと頷いた。

「彼はいま千葉に居るらしいの。千葉の……比企谷くん、貴方の家。たぶん、いま貴方の身体に入っているのが阿良々木くんということになると思うわ。阿良々木くんから聞いた情報を鑑みるに、恐らくまちがいないと思う」

「俺の……」

つまりこの不可思議な現象は俺単体の幽体離脱でもなければ、神様

がぼっち過ぎる俺に与えた第二の人生というわけでもなく、やはり俺と阿良々木暦の入れ替わりという形で起こったものであるらしかつた。

なるほど！そういうことだったのか！……なんて、驚く気は特に無い。どちらにせよ、ややこしい状況に変わりはなく、むしろ余計にカオス度が増したぐらいだ。なおさらに問題の解消が難しくなったといっても過言ではないだろう。最早こうなったら俺は阿良々木暦としてセカンドライフを生き、そして合法的に小町と結婚するしか道は無いのかもしれない。

……え、なにその最高の選択肢。もしかしてこの道ずっと行けば幸せな未来に続いている気がするんじゃないのかントリーロード。

「マジかよ。そんな状況じゃあもう打つ手ねーだろ。仕方ない。こうなったらもはや諦めるしか方法はないのかもしれないな（歓喜）」

「ううん、そんなことはないよ。むしろ阿良々木くんが居てくれたからこそ、取れる確実な手段が一つ増えたといってもいいぐらい」

「……あ、そうなの」

おのれ阿良々木暦よけいなことを！……なーんてな。

とまあ冗談はさておいて。……いやホントに冗談だったからね？確かに俺は小町を愛してはいるがそれはあくまでも親愛の情ではないわけで。まあでも確かに小町は可愛いし、器量は良いし、料理は美味しいし、あとはちよつと馬鹿だけどそれがまた愛嬌というかなんとか、それになによりも俺に優しいし……あれ、もしかして小町が俺にとつての理想のお嫁さんなんじゃないの？

おのれ阿良々木暦よけいなことを!!

「……なにやら比企谷さんから腐敗しきった負のオーラを感じます。果たして、このまま彼を阿良々木さんの下まで連れて行ってもよいものなのでしょうか」

「あ、あはは。大丈夫だよ……たぶん」

わりと本気で不安がられてしまった。

いかん、どうやら思考がドリップしていたらしい。いやドリップしてどうするんだよ。全くもう八幡ったら超絶うっかりさん☆。

……いかん、どうやら自分でも思った以上に俺は動揺しているらしい。

気を取り直し、空咳を一つゴホン。そして羽川に視線を向け、「まあ解った。つまりその確実な手段とやらを確立させるために千葉に、ひいては阿良々木暦に会いに行く。それがお前が電話で話していた答えを導き出す方法ってことになるんだな？」

「うん、そうだね。正しくはその手順の一つといった方がいいかもしれないけれど。とりあえずはそう思ってもらえたらいいかな。あとは向こうに着いてから残りの手順を踏めばいいと思う。……それが上手くいくかは神頼みならぬ鬼頼みになってしまうかもしれないけどね」

目を伏せた羽川は何故か俺の影に視線を向けていた。

そうして瞬き二つ分ほどの時間をかけてから、羽川は広場脇に設置された時計に視線を移す。そして、あっ！と口を大きく開いて、再び俺に向き直った。

「ごめん！発車の時刻を比企谷くん達が駅に着くタイミングに合わせてたから、実はあまり時間的な余裕が無かったりするの。だから……」

その言葉の先は聞かずとも理解出来た。

発車時刻と現在の時刻とを見くらべる。その差、約十分。特に急がずとも間に合いはするだろう時間ではあるが、しかしここで会話を重ねるほどの猶予はたしかに無いだろう。

申し訳なきげに上目遣いしてくる羽川にうつかり恋をしそうになりながら俺は視線を逸らし、駅の入り口へと向ける。

ともかくにも目的地は決まった。受け取った切符を手に、俺は羽川と八九寺を連れ立って歩き出す。

行き先は日本屈指の名産製造県。

いざ、千葉へ！

七話

ところで三人分もの切符代をどこから捻出したのかと。

不思議に思い羽川に聞いてみた所、なんとこの女、実にあつけらかんとした口調で「貯金を切り崩した」とか言い宣ってくれやがった。

儉約家として知られるこの俺でさえ貯金に手をつける時は俺のやりたかった新作ゲームが出た時か、もしくは小町がやりたかった新作ゲームをねだられた時ぐらいのものだというのに。それを羽川翼は自分とは関係のない筈であろう他人のいざこざを解消するために使ったのだという。もはやドが付くほどのお人好しだ。

正直言つて、その思考形態は俺にはまるで理解し難い。しかしだからこそ俺には得難い何かをこの美少女は持ち合わせているのかも知れない。少なくとも、俺の目に映るこの羽川翼という人間は、そういったものを得るにたる確固たる信条のようなものを持っているのだろうと、俺はその横顔を覗き見ながら一人でに悟った。

ともかく、代金の件に関しては後日しっかりと返済しよう。

羽川翼という本物がその胸の内に確固たる信条を抱いているように、比企谷八幡という偽物にだって薄く小さな信条というものが宿っている。

それはつまり『借りと借金と友達に絶対に作らない』

だからつまり材木座は友達には入らない。もちろん戸塚も別な。

戸塚は俺の嫁だから。

「ふっ、はーっ。ここが『千葉』ですかあ！」

とまあ。

そんな風にニヒルでクールでハードボイルドな感じを装おつてーつまりは他二人の会話の輪から弾き出されるように一人無言で外を眺めていただけなんだけどー新幹線に乗車すること一時間弱。俺は、俺たちは、早くも千葉の地に足を踏み入っていた。

窮屈な座席から放たれたこの解放感たるやいかに。俺は少しばかり凝り固まった身体を伸ばし、そして潮風の香りを深呼吸と共に体内に取り込む。

……なんでだろうな。たかが半日と経っていない筈なのに、何故か俺はその潮の匂いを懐かしく感じてしまっていた。

ふっ、千葉県民よ……私は帰ってきたーッ!!

「んー、出来れば観光とかもしたいけど、今は阿良々木くんとの合流を優先しなきゃだね。ところで比企谷くん家があるのはこっちの方向で合ってる?」

「おう。……いや、待て。なんでお前が俺の家の方角を知っている」

羽川が指差した方向は寸分狂わずにマイホームのある方角を示している。

なに?もしかしてお前、俺のファンなの?もしくはストーカー?やだなにそれ屈折した愛を感じちゃう!!……なんてことは当然なく、どうやら羽川は阿良々木暦からある程度の位置情報を聞き伝えられているらしかった。

しかし、それにしても千葉初心者である羽川に我が物顔で地元を案内されるのは千葉検定初段の俺からしてみればプライドが許さない。

どれ、ここは俺が一つ、余裕をもって最適な道へと誘導してやるでしょう。

「ちよつと待て羽川。確かに方角はそっちであってはいるが、こっちの道の方が遥かに近道になる。っーわけでこっちから行こうぜ」

「ううん。確かに近いは近いんだけどそっちは極端に人通りと交通量が多いからね。はじめての場所ではぐれてもいけないし、やっぱりこっちから行こうよ」

「……………」

一つ西に外れた大通りを示した俺の指先は、しかし予想以上に的確な羽川の言葉によってアツサリと折れ曲がる。

え、なにこいつ。なんで千葉の交通事情にこんなに詳しいわけ?

「ん、べつに前に来たことがあるとか、ましてや昔住んでたなんてこともないよ。ほら、いまってネットでストリートビューとか見れるでしょ?わたし、そういう擬似的にでも外の世界を眺められるのが好きで、その時たまたまにこのあたりを見ていたっていうだけなの。ほんと、それだけ」

言葉を失っていた俺からの確に感情を読み取ったのか。羽川はアツサリと種明かしをしてみせた。

……ストリートビュー、ねえ。

図書館での調べものといい、今回のことといい、どうやら羽川はアナログにもデジタルにも特化している人種とみた。そういう人間は大概にして様々な知識をその脳みそに有している。ソースは俺。友達とかと遊ぶ時間を一人、読書やネットサーフィンに割いていた自称比企ペディアな俺に知らないことは、まあ興味の無い事柄を除いてはほとんど無いと断言出来る。

試しに知恵比べをしてみた。

「では外の世界に興味津々なそんな羽川翼に問題だ。世界で一番水深が深い湖の名前は？」

「ん？バイカル湖？」

「……正解だ。次の問題。世界一高い山、エベレストの標高は？」

「たしか八千八百四十八メートルだよね」

「正解。なら千葉県で一番高い山はなに山？」

「愛宕山、でしょ？ちなみに全国で同名の山が百二十二個もあるんだよね」

「ぐっ、正解。なら最後に、全国で現在生産量が一位とされる千葉特産の果物は？」

「梨！美味しいよね。私も好きだよ」

「……負けた」

完敗だった。しかも後半に至っては千葉限定でのクイズだということに、まさか数まで正確に覚えられているとは……。おかげで俺の知らない雑学まで増えてしまった。愛宕山って同名の山がそんなにあるのか……。

「羽川翼恐るべし。実はお前なんでも知ってるんじゃないの？」

「あはは、別になんでもは知らないわよ。知ってることだけ」

そう言う羽川はただ苦笑いを浮かべるだけだった。

と、俺が何も言わずに悔しさを噛み締めていると、急に横からクイクイと腕が引かれる。そちらに目を向ければ何やら八九寺がえへん

ごほんと咳をしながら、チラチラと流し目で俺に視線を向けていた。
あん？なんだ？

「わたし、これでも同年代の子達に比べれば雑学がかなり豊富な方なんですよ？ですからもし比企谷さんさえよろしければわたしがお相手になってあげてもいいんですがねえ」

ニヤリと口角を釣り上げる。それは見るからに挑発的な態度だった。

……ほほう、千葉の雑学王としてこの県下に君臨する俺に無謀にも挑戦とは。八九寺真宵、まるで身の程知らずなやつである。

ふっ、だがいいだろう。その小さな自信、この俺がすぐにでも刈り取ってくれよう！

「ふっ、ではいざ……!!」

「勝負だ……!!」

そして女子小学生と男子高校生の真剣な闘いの火蓋がこの場で切って落とされた。

デュエルスタンバイ！

ガンダムファイト・レディー・ゴー!!

住宅街。もはや網膜に焼き付いていると言ってもいいほどに見知りすぎた景色のその中に、比企谷家の居城はあった。

平々凡々な中流家庭に相応しいそこそこな家。まだローンが数年残っている、幾らか屋根の色もハゲかけた我が家を目前に、俺は人知れず胸中から込み上げてくるものを感じていた。

ははっ、全然変わっちゃいないんだな。……いや、まあ、当たり前っちゃ当たり前なんだけど。

「じゃあ、阿良々木くんを呼ぶね？」

「……ああ」

羽川の人差し指が呼び鈴を押す。かすかに聞こえる電子音。そして少しばかりの静寂ののち、扉は開いた。

「……羽、川？」

「ふふっ。一日ぶりだね、阿良々木くん。どう？ちゃんと大人しく勉強してたかな？」

笑顔の先、羽川の言葉が向けられた先に……俺ガイル。いや、俺の姿をした阿良々木暦が立っていた。

阿良々木は俺の顔でホッと安堵するような表情を形作ると、俺の顔で羽川に向き直り、そして俺の顔で何かを言いかけて、俺の顔で今度は羽川の隣を見た。

「……八九寺？どうして、お前までここに……？」

「どうして、とは心外ですね。私は八九寺真宵であると共に八九寺Pでもあるんですから。たとえどこの彼方で迷子になろうとも、阿良々木さんごときを見つけ出すぐらい、この私にとっては造作もない事だということですよ。伊達に、迷子のプロを名乗っているわけではないですからね」

「……そうかい。そりゃあお見それしたよ」

いや、お前なにもしてねえじゃん。

そんなツツコミを心中で八九寺に投げかけながら、俺はどこか呆れたような面持ちの俺……じゃなくて、阿良々木をジッと眺めていた。

なんというか、他人の目から通して見る自分というものは予想以上に奇妙なものだ。不思議と鏡で見る自分とは幾らか違っていているようにさえ思える。

たとえば……目とか瞳とか眼差しとかその辺りが特に。

「……あ」

と、わりとジロジロ見過ぎていたのが原因か。

俺の視線に気付いた阿良々木はようやくやくのこと俺の存在に気が付いたようだった。どうやら身体は違えど、そのステルス技術にはまるで衰えがないらしい。もはやスパイの鏡といっても過言ではないな。まあそもそもがスパイとかじゃないんですけどね、僕。

「……………」

「……………」

無言が生まれる。とりあえず合った視線はそのままにミリ単位で会釈すると、阿良々木も慌てたように俺に会釈を返してきた。

そして、また、無言。

……おいおい、なにこの気まずい空気。「いやあ、お互い大変でしたねえ！」とか言った方がいい感じなの、これ？

「あ、阿良々木さんっ！その、こちらの方はですね……」

「ああ、いや、知ってる。というよりはもう聞いてたといった方が正しいかもな。たしか、比企谷八幡……くん、だっけか？」

「……ああ」

「そうか……」

頷く。

沈黙。

会話終了。

……ホント、初対面の相手に何話せばいいのかって全然分かんないよね！

「えーっと、こんな場所で立ち話つてのもさすがになんだしき。お互い積もる話もあるだろうし、とりあえずは中に入って話をしない？いいでしょ、阿良々木くん。……あ、ううん、この場合は比企谷くんに聞くのが正しかったかな？」

「……なんでもいいけど、まあ、中に入るってのは賛成だ。こんな往来の場で出来る話ってわけでもないだろうし」

「そ、そうだな。じゃあとりあえず、全員中へ入ってくれ」

促されるままに俺たちは歩をすすめる。そうして、俺含めた三人はめでたくも比企谷家の敷居をまたぐこととなった。

羽川が先に行き、続いて八九寺が、そして最後に俺が入ろうとした瞬間、妙な視線が俺の背筋に絡みつく。

後ろを振り返る。しかし、そこには誰もいない。

……なんだ、いまのは。

「どうした？」

「いや、べつに……なんでもない」

たしか、あの感じは……いや、たぶん、きっと気のせいだろう。
そんな言葉で自分を誤魔化し、そしてなんとも言えない不快感を胸
に俺は再び足を家中へと向けたのだった。

八話

「予兆があったわけでも、ましてやこうなった原因に心当たりがあるわけでもない。ただ起きた時にはもう既にこうなっていたんだ」

リビングに四人、テーブルを囲むように座った俺たちの前で、阿良々木は言った。

そして羽川から向けられた「それじゃあ、阿良々木くんも詳しいことはなにも……？」という問いに、ほんのわずか目を伏せ、

「……ああ、本当に申し訳ないばかりだけれど、僕にもわかることは何一つ無いといってもいい。それこそ、お前に電話をかけるまでは今回のことを現実味のある悪夢ぐらいにしか思っただけであつたぐらいなんだ。だから、その……ごめん、羽川。わざわざこうして来てもらったというのに何の役にも立てなくて」

「ううん、気にしないで、阿良々木くん。そもそもこの件に関しては私達も知らないことばかりだし、だから阿良々木くん一人を責めるなんてことは私達にも出来ないよ。それに……私はこうして、もう一度阿良々木くんと話が出来ただけでも十分嬉しいから」

「羽川……」

確実なる殺し文句だった。たった一回の返し言葉で男心を掴むなんて……羽川翼、恐ろしい子ツ!!

「あ、一応言っておきますが私はべつにそうでもないですよ？むしろ奇天烈な状況に陥って慌てふためいているだろう阿良々木さんを見たいが為だけに羽川さん達に付いてきたといってもいいでしょう」

「八九寺……!!」

対する八九寺も存外恐ろしい子だった。

たった一回の発言で空気を台無しにするとかお前一体どこの材木座くんだよ。少しぐらいは空気を読むというプロセスを踏んだ方がいい。何を隠そう俺なんて空気読み過ぎてもはや空気と同化してるといつても過言じゃないレベルだというのに。

「……まあ、なんだ。感動の対面のところ悪いんだが、とりあえずさつさと本題に入らないか？」

「あれ？居たんですか比企谷さん」

「……………」

いや、確かに空気と同化してるとか言っただけどさすがにそれはヒドインじゃないんですかねえ、八九寺さん？

見れば八九寺はチャシャ猫みたいな笑みを浮かべながら笑っていた。それから「冗談ですよ、冗談」と、語尾にテヘペロ☆とでも付けないほどにきやびるんとしたウザったい声を出してから、

「それでは、比企谷さんの言う通りそろそろ本題に入るとしましょう。そもそもが私は今回の件が【怪異】に関係するものであると考えているんですが、一応念のために聞いておくと皆さんもそのようにお考えになっていると思っても構いませんか？」

「ああ、そうだな。少なくとも僕は、こういった事例に関しては怪異を抜きにしては考えられないと思ってる。それは、羽川も同じだろう？」

「うん。私もみんなと同じ考え。けど、だからこそここで問題になるのは、たぶん……………」

「…………それが『何の怪異』であるか、という一点に尽きるでしょうね」
うーん、と。考えこむように唸る八九寺の隣で、俺は砂糖 & amp; ミルク漬けになったコーヒートを味わいながら、そして考える。

というか怪異ってなんだよ。

そんな純然たる疑問に、しかし俺は口を挟めずにいた。いや、だって俺を除いた全員からしてみればそれは既知の事であるようだし、そうであるならば俺がここで疑問を挟むことによつて話の腰を折るような事態になるのはなるべくでも控えておきたい。空気を読むということはそれはつまり一切の邪魔をしないという事と同義なのである。

というわけで仕方がない。ここは俺の秘奥義でもある『なんやかんや知ってるような感じを醸し出しながら、ひたすらに沈黙を決め込む』を発動し、端つこの方ただコーヒートをすすするだけの置物と化すのが上策であろう、と。そう決心したところで不意に羽川と目が合ってしまった。

ぱちぱちと瞬くその大きな瞳が俺を見ること少し、それから羽川は気遣うように口を開いた。

「そういえば、比企谷くんは怪異のことは全然知らなかったんだよね。あのね、怪異っていうのは……」

そして羽川は頼んでもいないというのに親切丁寧にその疑問に答えてくれた。

曰く、そこにあつてそこにはないもの。

曰く、認識してはじめてそこに生まれるもの。

曰く、普通ではない異なるもの。

簡潔に要点だけをかいつまんだような、それでいて不可解なほどに曖昧な言葉の数々に俺は眉をひそめる。しかし、羽川も羽川で上手く説明が出来ないのだろう。困ったように眉をハの字に下げるだけだった。

そうか、こいつにも出来ない事があつたんだな……と。

そんな身勝手にも過ぎる押し付けがましい感想をコーヒーと一緒に胃に流し込み、俺は前述の言葉を反芻させながら思考にふける。

そこにあつてそこになく、認識してはじめて存在が生まれ、そして普通ではない異なるもの……あれ、つまりそれって俺の事じゃね？というか的中率が百パーセント過ぎてむしろ否定が出来ない。

要するにぼっちⅡ怪異という図式が成り立つことになるんだろうか。それはそれで妙に納得出来てしまうのが哀しすぎる。

そうか、俺が怪異だったのか……（錯乱）

「まあ、いきなり怪異がどうだと言われても解らないのは無理もないよな。事実、他人よりかはそういつたものに多く関わってきただろう僕だって理解の難しい所なんだ。あの忍野でさえ、怪異の全容を把握するのは無理だと断言していたぐらいだし。そもそもが理解しようと思うこと自体がおこがましい事なのかもしれない」

「そうですね。結局のところ、怪異というものは知ることには出来ても解ることは出来ないものですから。とりあえず、今の時点では難しい事を考えず、『怪異』という言葉はどこか頭の隅っこに置いておく程度の認識でいいと私は思いますよっ。」

「……………」

言葉無く、俺は浅く息を吐く。どうやら予想以上に面倒な話になっているようだった。

見ようによつては都市伝説とでも取れるような、はたまた講談社あたりから出版された小説の中で見られるような設定が現実存在するとは到底思えないが、しかし事実、こうして俺はそんなものに遭遇してしまっているので否定を述べることも出来ない。

とりあえず、モヤモヤと胸中に浮かぶ感情を再びコーヒーと一緒に飲み下し、俺は投げやりに頷くことにした。そして考えることをやめた。

考えても仕方のないことを考えても結局はメモリの無駄づかいでしかない。なので他のことにメモリを割くことにした。

例えば……と。向けた視線の先には羽川翼の姿がある。

そして目と目が合い、ここから恋が始まる……なんてスイーツ(笑)な展開があるわけもなく、当然のように羽川はきよんとした顔をしていただけだ。

……実を言うと、先ほどから一つだけどうにも不可解なことがあった。不可解というか、そもそもソレが最初に話題に出てこない事こそがどう考えてもおかしい。

だから、俺はその違和感なるものを解消すべく口を開く。

「解った。……いや、それはもちろん何もわからないということが解ったってことなんだけどな。でも、正直言えば怪異がどうのつてのは俺からしてみれば至極どうでもいいことなんだよ。違うだろ、羽川。そもそもが俺達はなんのためにここに、阿良々木に会いに来たんだ?」

「つ……それ、は」

途端に目を伏せる羽川に、俺は『ああ、やっぱりな』と一人納得する。

羽川は当然そのことを忘れていたわけではない。ただ切り出すタイミングを伺っていたのか、もしくはソレ自体が非常に言い出しにくい事だったんだろう。

俺に話を切り出されたことで腹を括ったのか、羽川は阿良々木の伺い見るような視線に顔を上げ、真っ直ぐと、そのブラックトルマリンのような瞳で阿良々木を見返す。

羽川は一つ、小さく息を吸ってから、

「……阿良々木くん。実は一つだけ阿良々木くんに頼みたいことがあるの」

阿良々木の視線を一身に受けながら。続く言葉は何故か重々しく、歯切れの悪いものだった。

「忍ちゃんとー話をさせてもらえないかな？」

視点ちえんじ。

脈絡もなくそんな言葉が頭に浮かんだのは恐らく、きつと、今の僕が多分に緊張していることに起因しているのかもしれない。

僕の、ではなく比企谷の部屋で。僕と比企谷は二人きりで対面していた。羽川は居ない。ちなみに八九寺も。あの二人にはいわゆる供物というか、献上品というか。ともかく、いざという時の為に買い出しに、いわゆるミスタードーナツまでお使いに行ってもらっているのだ。

確実性を上げる為にーとかなんとか理由を付けて。その実は、とどうか裏は、単純に僕があのだ二人に情けない所を見せたくなかったというだけなのだけれど。

なんとというかーこんな時だというのに本当、器が小さいよな、僕。軽く自己嫌悪だった。

「……………」

「……………ん？」

と、一人自分の小ささを嘆いていると前から視線が。見れば比企谷が実にモノ言いたげな顔で僕を見ていた。

僕の顔で、僕を見ていた。

……いや、まさか、地の文でこんなめっちゃやな文章を綴る羽目になるとは思いもなかったが、事実そうであるのもはや何も言うことが出来ない。それにさっきまでは羽川達に意識を向けていたからあまりマジマジと見る機会は無かったのだが、その、なんだろうー僕って他人の視点から見るとこんなにも目が淀んでいたのか。淀んでいるというか、腐っているというか。

ともかく、軽くショックを受けてしまっていたことは言わずもがなである。

しかし本当にドロドロしてるよなあ……なんて。そんな事を考えながら、ついジロジロと見てしまったせいだろう。

言葉にはしなかったものの、比企谷はどこか嫌がるように身を引き、視線だけで抗議を申し出てくる。

目は口ほどに物を言うというけれど。

比企谷は特にわかりやすいほどに拒絶を示していた。

とはいえ、誰であろうとさすがに凝視されるのは嫌なものだろう。

僕は慌てて、取り繕うように謝罪の弁を述べた。

「いや、悪かった。ただこうして他人の目線から自分を見るなんて機会無かったからさ。それにいつも鏡で見る自分とは少し違って、だからついつい見入っちゃっただけなんだ。気分を害したようなら謝るよ。ごめんな」

「……………べつに。気分を害したってほどじゃない」

「……………そうか」

言葉少なに比企谷は言う。

そもそも僕もあまり口数の多い方ではないけれど、比企谷はそんな僕に輪をかけて喋らない男だった。

それは単に口下手というわけではなく、そう、言うならば必要が無いから喋らないとでもいうように見える。

必要がない。必要性を感じないからコミュニケーションを放棄している。そんな感じ。

そして、その振る舞いはどこか昔の僕を思わせるようでもあった。友達を作ると人間強度が下がると公言してはばからなかった頃のあの僕を、思い起こさせる。

……まあ、単純に口下手なだけなのかもしれないけれど。まだロクに会話を交わした事もない相手を知った風に言うのも失礼だろうと僕はそこで思考を止め、作業に移る。

といつても、部屋のカーテンを閉めて暗闇を作り、そして電気を点けて、はいおしまいという簡単な作業だ。

白色電球が作り出す人工的な光が僕と比企谷を照らす。これで準備は整った。

あとは僕のすべき事をするだけ、なのだが……。

「……はあ」

自然と溜め息が漏れる。

忍とはアレ以来――あの紆余曲折とあった羽川の時以来、一度として顔を合わせていなかった。

たしかに障り猫であるところのブラック羽川の魔の手から僕を助けてくれた忍ではあったが、しかし、助けてくれたイコール赦してくれたという解釈をするのは幾らか自分本位すぎる所があるようにも思えてしまう。

つまるところ、僕は忍と顔を合わすのが若干なりとも心苦しかったのだ。果たして、あいつは僕の申し出に応えてくれるのだろうか――と。

一度目は、一日中を土下座してなんとか力を貸してもらえた。

二度目は、その名を呼び、助けを求めたことで力を貸してくれた。

なら三度目は……？

二度あることは三度あるというが、けれど今回に限っては仏の顔も三度までかもしれない。三度までということは、三度目でアウトということだ。いや、正確にはあいつは仏ではなく吸血鬼なので更に事は難しくなるとさえ考えられる。

吸血鬼の顔も三度まで。

僕からしてみれば仏以上にその存在は重い。だからこそーはあ。緊張は解れないし、溜め息も途切れなかった。

駄目だ。こんな状態じゃあ。少しでも緊張を解さないと。

「……なあ、少しだけ世間話をしないか？」

「はあ？」

いきなり何言っただコイツ？みたいな視線が痛い……。

けど、僕は負けじと言葉を続ける。

「いや、なんていうか僕と比企谷って会ってからまだ一度もまともに話してないだろ？こんな状況になって色々大変な思いをした同士だし、やっぱり少しぐらいは親睦を深めたいなあ、なんて」

「……………」

比企谷は無言だった。無言で嫌そうな視線を僕に向けていた。

……お前はそんなに僕と話すのが嫌なのか？

あからさまな拒絶に結構本気で傷ついてしまった自分がいた。

いや、だが、それでも僕はめげないぞ！

こうなったら絶対に親睦を深めてみせる！

「……比企谷は、なんか趣味とかあるのか？」

「特に無いな。強いて言うなら、読書くらいか」

「へえ。読書か。良い趣味だな。本が好きなのか？」

「べつに好きってわけでもない。単に一人でも出来る事だから読書っただけだ。だって、ほら、俺友達とか居ないし」

「……………」

……重い!!

趣味の話をしてこんな重い空気になったのは僕史上初めての経験だ!!

「そ、そうか。じゃあ普段はなにしてるんだ？」

「……………なになってなんだよ？」

「いや、例えば……そうだな。図書館行って本を読むとか、はたまた部活動に精を出すとかさ。ああ、そういえば比企谷は部活に入ってるの

か？」

「……あれを部活というなら、一応は入ってるって事になるかもな」

「へえ、なんだか意外だな。どんな部活なんだ？」

「さあな。奉仕部って名目で活動してるがその実情はほとんどボーッと椅子に座りながら時間を潰してるだけだ。けど、だからって行かなかったら顧問の女教師に身体的に打ちのめされるし、行ったら行ったらで部長兼独裁者みたいな女に人格存在否定されて精神的に打ちのめされるし……考えれば考える程もうマジで有り得ねえ……。俺不幸過ぎるでしょ……」

「……………」

比企谷は一体どんな学園生活を過ごしているんだろう……？

わりと本気で心配になる程に、比企谷のその背中からは濃い哀愁が漂っていた。そこはかかない闇の一端を垣間見た瞬間でもあった。

「……というか何で最終的には話が暗くなっていくんだ……」

もう半ば諦め気味になりながら、僕は最後となるかもしれない質問を投げかける。

「そ、そういえば比企谷にも妹って居るんだな。たしか小町ちゃんだったか。なんか僕の顔を見るなりエライ形相でどこかに電話して、それで一目散に家を飛び出してたけど……」

「小町がなんだって？」

「うおっ……!!」

それは電光石火の動きだった。

一瞬にして僕との距離を詰め、比企谷は視線だけで人を射殺さんばかりの剣幕で僕を睨んでいる。

それは先ほどまでの比企谷のクールな印象を大いに裏切る程に真に迫ったもので、恐らく会ってから初めて感情をさらけ出した瞬間でもあったかもしれない。

それにしても妹の話題でここまで食い付いてくるとは……。

予想外といえば予想外だった。

「い、いや、だから電話するなりどっかに行っちゃったんだけど、もしかしたらそのことで何か知ってることがあったのかと思って……」

「……そうか。出かけたのか。だから小町はどこにも居なかったんだな……」

ブツブツと何事かを口の中で呟く比企谷。その姿はやはり、さつきまでの寡黙な印象とは大きく違っているように見えた。そんな比企谷の新たな一面を見れた事に僕は内心で驚き、そして本心でドン引きする。

いや、さすがの僕もこの温度差は普通に引くぞ……。

だが、そんな僕の心情などなんのその。比企谷は真剣に何事かを考え始め、そして思考を終えたのか、これまた真剣な表情で僕を見据える。そして、言った。

「なあ、親睦を深めんのもいいけど、いい加減さつきとやることをやらないか？何をするのは知らんけど、とりあえず準備は出来たんだろ？」

「……ああ。そう、だな。それは確かに、そうだ」

比企谷の至極もつともな言葉に、僕はあらためて顔を引き締めた。確かにこれ以上、現実逃避に時間をかけるわけにはいかない。比企谷のおかげで緊張だつて多少なりとも解れた。それに羽川達だつていつ帰ってくるかわからないんだ。

要するに——ここが覚悟の決め時なのだろう。

比企谷に、詳細に言えば僕の身体から生まれ出でた影に向かい合ひ、僕は意を決して両膝を床に付ける。

そして頭を下げ、忍の名を呼ぶ——その瞬間だった。

「ビッキ—!!どん!!どん!!に居るの!?!」

女の子のものだろう叫声。

その声に、何故か、比企谷の顔が薄く引きつったものへと変わっていた。

九話

それは聞き覚えがあり過ぎる女の声だった。

ヒッキーヒッキーと繰り返されるマヌケな響き。まるでいなくなつたペットでも探すような、それでいて新種のポケモンみたいな声をあげるその人物に、しかし俺は遺憾ながらも心当たりがありました。

(……なんで、由比ヶ浜がここに……!!)

声は続く。阿良々木はジッと俺に視線を向けていた。そして当の俺はというと、想定外すぎる事態にあらゆる動作を停止。迫り来る嵐を察知した小動物のように身を縮こませ、息を潜め、気配を押し殺す。そんなヒキガヤニンジャと化した俺に、阿良々木もまた息を潜めながら、小声で話しかけてくる。

「……なあ比企谷。さつきから聞こえるこのヒッキーってのは、まさかお前の事なのか？」

「……………」

無言で聞き流す。一応は事実であるが、それを自分から肯定するほど俺はヒッキーというその響きをさほど気にいつてはいない。どうか普通に嫌がつてさえている。

ただ、阿良々木は俺の沈黙を肯定として受け取ったのか。

続けるように言葉を発した。

「友達、か？それとも……………」

「……単なる同級生だ。間違つても、由比ヶ浜はお前が思つてるようなもんじゃない」

「……そうか。いや、べつに比企谷の交友関係を無闇に詮索するつもりなんて無いんだけど、じゃあ何で、単なる同級生がお前の家に居て、お前の名前を呼んでるんだ？」

それが分かつたら苦労はしない。

不安そうに俺を見る阿良々木になんの答えも示せないまま、俺は扉を睨みつける。聞き耳を立てる。

扉の向こう側から、声が続く。

「ヒッキー!!……もうっ、一体どこに居るのよ、ヒッキーのやつ」

「……あの、本当にごめんなさい、結衣さん。わざわざこうやって家まで来てもらっちゃって」

「あ、ううん。全然気にしないでよ、小町ちゃん。あたしが勝手に付いてきちゃったようなもんなんだからさ。それにあたしだって、その……ヒッキーのことが心配っていうかなんというか……」

「うう、すいません。ありがとうございます」

次第にすぼんでいく由比ヶ浜の声に続いて聞こえてきたその声は聞き間違いでなければ、いや、聞き間違いようもなく小町のー俺の妹である比企谷小町の声だった。

そういえば、と俺は思い出す。

『なんか僕の顔を見るなりエライ形相でどこかに電話して、それで一目散に家を飛び出してたけどー』

「……それでこんな状況になったってわけか」

恐らく小町が電話した先は由比ヶ浜の携帯で、そして飛び出した先で会っていたのも由比ヶ浜なのだろう。

阿良々木の言葉を聞く限り、もしかしたら小町は普段の俺と今の俺との違いに何かしらの気付きを得たのかもしれない。小町はあれでいて実は突発的なアクシデントには弱い方だからな。それでつい動転して由比ヶ浜に相談めたものをしていて、と。俺は刑事コロンボ並みの閃きをもってそう推察する。

……まあ、それにしても過剰に反応し過ぎだとは思っけどな。しかし逆を言えばそれだけ小町の目には今の俺（in阿良々木）が不気味なものに見えたのかもしれない。

それとも……まさかこいつ、自己申告をしていないだけでひよっとして俺の小町に、俺の小町に（大事なことなので二回言いました）なにか良からぬことをしたんじゃないだろうなアァン!?

そんな心配症な兄心が爆発し、俺は内なる怒りを小宇宙と共に燃やしながら阿良々木を睨めつけるように見た。

奴は要領をえないように眉をひそめるだけだったが……まあいい。だが、もし本当に小町に何かしら手を出していたらタダではおかな

い。お前の携帯電話（こじんじょうほう）を握っているのがこの俺だ
ということ、決して忘れるなよ小僧！

……と。

妹への純粹な愛のせいであつたキャラがブレブレになりながら
俺は阿良々木をもう一睨みし、そして、とりあえず継続してジツと無
動を貫いた。

無になれ。そして世界の理と同化するのだ！

そんな老師の声が脳裏をよぎる。もしくはマスターアジアだった
かもしれない。ともかく、俺はただただその教えに殉ずるのみであ
る。

さあつ、こんな時こそ『あ……居たんだ』の異名を持つ俺のステル
ス力を発揮する時だ。

世界よ……今こそ我と一つに！！

「あ、そうだ。もしかしたら兄は自分の部屋に居るかもです。基本的
に休日はリビングで寝転ぶか自室で寝転ぶかのどちらかですから
ねえ、あの自堕落さんは」

「……うわあ。ヒッキーってマジヒッキーなんだね」

しかし、俺の試みはあっさりとなりに帰した。

トンテンと階段から聞こえてくる二つの足音。俺と阿良々木は咄
嗟に顔を見合わせる。考える時間も余裕もない。ついでに言えば俺
の部屋にはプライバシーの要となる内鍵さえも付いていなかった。

焦燥を促すように足音はみるみる内に近付いてくる。やがて、それ
は扉のすぐ近くでぴたりと止まった。

沈黙と静寂の間が空き、そして扉が開く。

「……お兄ちゃん？居るの？……入るよー？」

「お、お邪魔します……」

相対する。

恐る恐ると開かれた扉の向こう側には由比ヶ浜と小町の姿があつ
た。二人はそろりと部屋の中へ足を踏み入れるとまず初めに正面に
座る阿良々木の存在に気付き、次いで真横に座る俺へと視線を滑ら
せ、そしてその表情に驚愕とした感情を張り付けた。

え、この人誰？……みたいな視線がザクザクと突き刺さる。まあ由比ヶ浜はともかくとして、それよりも小町からそんな他人行儀な視線を向けられたのは思った以上に堪えた。あまりのシヨックにちよつとだけ泣きそうになってしまった。だがしかし、残念なことにはそんな感傷に浸っている状況でないことも確かである。

……迷ってるヒマは無いな。

覚悟を決める。掌に浮かんだ汗を拳を作って握り潰し、そして平然を装った表情ですかさず『比企谷八幡』に言葉を向けた。

「……あー、『比企谷』。もしかして、この人達がさつき言ってた妹さんの比企谷小町と、同級生の由比ヶ浜結衣さんか？」

「……!!」

驚いたように目を見開いた『比企谷八幡』……まあ要するに阿良々木が俺を見返す。その揺れる瞳を俺はただジツと見据えるだけだった。

そして一瞬の間ののち……阿良々木はゴクリと唾を飲み下して、意を決するように喉を鳴らして、ゆつくりと口を開いた。

「あ、ああ、そうだよ。この二人がちようどさつき話題に出ていた妹の小町と、同級生の……そう、由比ヶ浜結衣だ。とりあえずお帰り、小町。それと……やあ、いらっしやい、由比ヶ浜」

「へ？……あ、うん、ただいま」
「えと、お邪魔、してます……」

阿良々木の幾分か引きつった笑みに、小町と由比ヶ浜はそれぞれ挙動をおかしくしながらも返事を返す。……が、恐らく、というかどうかどう見ても二人揃って不審感を露わにしたような表情を浮かべていた。

それもそのはずで、まず第一に繕ったような笑顔が気持ち悪い。第二に俺は間違っても「やあ」なんて朝ドラに出てくる好青年みたいな爽やかな挨拶はしない。第三に目が腐っていない。あ、でも逆に腐ってる方が不審者っぽいですよ、テへっ。……なんて言っている場合ではない。

だが、俺の物申したげな視線に阿良々木は気付いていないのか。はたまた、そんな余裕がないのか。相変わらずの引きつりスマイルを小

町達に向けながら、言葉を続けた。

「そ、それよりもどうしたんだ二人共。ひよつとして、僕になにか用なのか？」

「僕……!?!」

由比ヶ浜が目を見開いた。

おまけに、既に由比ヶ浜の背後へと隠れていた小町なんかは小声で「やっぱりお兄ちゃん、変になっちゃったんだ……!!」とか言いながら怖れの入り混じった視線を阿良々木に向けている。

マズい。出だしから最悪だ。やはり即興での誤魔化しでは無理があったか。

もはや引きつりすぎて新たな次元に辿りつきそうな表情となっていた阿良々木の横顔に危険を感じ、俺はすかさず次なる行動へと移った。

次なる行動。それ即ち、

「……比企谷、そういえばそろそろアレに行く時間じゃないのか？」

「あ、アレ……?っ、あ、いや、そうだったな! そうだそうだ! そろそろアレに行く時間ということをすっかりと忘れていたよ!」

いやあ、危ない危ない!……と。

あからさまに取り繕ったような焦燥感を言語化しながら、ついでに適当な謝辞の言葉なんかも由比ヶ浜達に向けながら、阿良々木は俺を連れ立って即座に部屋の外へと足を踏み出した。

口は禍の元であり、つまりは三十六計逃げるにしかず。

背後からかけられた「あ、待ってヒツキー!」とかいう言葉も完全に無視して、俺達は脅威を察知した脱兎のごとく玄関から飛び出す。飛び出して、だが、その足はすぐさま歩みを止めた。

皮膚を突き刺すような熱光線が明るく照らした先、つまりは目前のその視界の内に、そいつが立っていたからだ。

「……羽川?」

門扉の向こう側に立つ人物……それは買い物に出ているはずの羽川翼だった。その手には英語で店名が表記されたミスタードーナツのテイクアウトBOXが持たれていて。そして羽川の隣には八九寺

真宵の姿が……しかし、無かった。代わりにそこには別の人物が立っていた。

「……お兄ちゃん」

「っ!？」

「お前……!？」

驚きで声が出ない俺と、驚きから言葉を吐き出す阿良々木の心境が見事にシンクロした瞬間だった。

それは俺にとって二度と会いたくなかった人物。

阿良々木暦の小さい方の妹が、そこに仁王立ちしていたのだった。

十話

(どうしてこうなった?)

殺伐としたリビング。テーブルを中心にして錯綜するお互いを伺い見るような視線の中で。俺はそんな疑念と一人向きなおざるをえない状況へと追い込まれていた。

(……どうして、こうなった?)

そんな自問に、しかし答えは出せないまま、俺は視線を前へと向ける。対面には小町と由比ヶ浜が座っていた。

小町は借りてきた猫のようにどこか大人しく、静々と机上有る自分のマグカップに視線を留めている。その横で由比ヶ浜は所在なさにテーブルの端から端へと視線をオロオロさせながら、盛りに盛った自身の団子頭をポンポンと弄っていた。

そんな二人は時折ちらちらと俺の真横……つまりは阿良々木(俺ボデイ)へと視線を向けている。

それはどこか疑惑めいたものを内包した眼差しだった。

(……比企谷)

(……わかつてる。でもとりあえず今は黙ってる)

阿良々木もまた、気まずさと不安を顔色に滲ませながら所在なさにしている。だが、今のコイツは真相はともかく、その認識は阿良々木暦ではなく比企ヶ谷八幡なのだ。キョドっている所とか、まさしく俺そのものといってもいいのだが、下手に言葉を発してより深く違和感を刻んでも面白くない。

それに、正直言つて小町と由比ヶ浜が相手ならばボロさえ出さなければ多少は策も講じられるだろう。

ならばこそ、この場でまず第一に警戒すべきなのは……

(……あいつだ)

巡らせた視線をある一点で止める。そこには当然のように我が家に上がり込んできた一人の少女の姿があった。

阿良々木(妹)――浴衣を身にまとった狂気の暴君。

恐らくこの場において最も場違いな人物であり、最もこの場に居る理由が不確かなアンタツチャブルな存在。正直言つて、こいつが居るせいで今の状況が更にややこしくなっていると云つても過言ではない。

「というかホントに何でこいつがここに居るんだよもう八幡マジで超混乱ですう。」

未だかつてない三つ巴にストレスがヤバい。

それこそ八九寺がいつの間にか居なくなつたことすら忘れて、俺はキリキリと痛む胃を険しく眉根を寄せて堪えていた。

「……えーっ、皆さん。ちよつとだけいいですか？」

沈黙で停滞していた空気を打ち破る凜とした声。

見れば、羽川が場を取り仕切るように堂々とした態度で俺達五人にそれぞれ視線を巡らせていた。

「突然のことに恐らく皆さん驚かれていることでしょう。思い思いに思う所もあるかもしれませんが。ですが今は個人の事情は一旦脇に置いて、先に、それぞれ自己紹介をするのはどうでしょうか？話し合うにしても、素性の解らぬ相手を前に打ち解けるのは難しい事でしょう。それにはまず簡単に相手の事を知ることから始めた方がいいかな、と……どうかな？」

自然体にも過ぎる仕切りに幾らか感心していたら突然に言葉が向けられた。ちよつと、いや、かなり驚いた。

往々にしてこういった場ではいつも居ないものとして認識される俺である。おかげで「へえう？」とか自分でも引くぐらいのワケのわからん音域の声飛び出してしまった。

おまけにその失態をすぐさま取り繕うように「ううん、そ、そうだなー」とか全然ゴマかせてないゴマかしを続けたせいで更に痛々しさが倍増し、おかげで周囲から向けられる視線がよりいっそう冷めきつたものとなる。

もうやめて！とつくに八幡のライフはゼロなのよ！

「……ま、まあ、いいんじゃないの？」

もうどうでも。

そんな心中の呟きはともかくとして、どうやら俺以外の面々も羽川の意見におおむね賛同のようだった。

羽川は居住まいを正す。そして言葉を続けた。

「それじゃあ、僭越ながらまずは私から。私は、羽川翼といいます。私立直江津高校在学の高校生で、そちらに居る阿良々木くんとは同じ学校の同級生です。比企谷くんとはSNSの『宮沢賢治の会』というコミュニティを通じての知り合いで、今日はその会に関連した活動ということで同好の士でもある阿良々木くんと一緒にこちらのお宅に伺わせていただきました。他の方々とはこれが初対面となりますが、どうぞよろしくお願いします」

「あ、いえいえ、こちらこそよろしくお願いします」

「よ、よろしくお願いします」

見本のような綺麗なお辞儀に由比ヶ浜と小町も慌ててお辞儀を返す。が、その脇で俺は一人、羽川翼という女の賢さに人知れず舌を巻いていた。

宮沢賢治の会。

それはまあもちろんのように架空の団体であり要するに嘘でしかないのだが、しかし、まさかここで架空のSNSコミュニティを持ち出して現状に整合性をもたせるとは思いも及ばなかった。

しかもその嘘を息を吐くかのごとく自然に言葉の中に織り交ぜるとは……言うなれば策士孔明ならぬ策士羽川である。

すごいぞ策士羽川すごいぞ策士羽川。

とはいえ、その嘘のおかげで下手な言い訳を考えずに済んだことは僥倖だ。とりあえず俺もその流れに乗っからせてもらうことにしよう。

「では特に質問が無いようであれば次の人に移りたいんですが……」

「じゃあ、次は俺の」

「はい」

「なんだなーと。続けようとした言葉は割り込むように放たれた一つの声によって呆気なくかき消される。見れば、羽川の横で阿良々木

(妹) が身を乗り出すようにピンと右手を天高く伸ばしていた。

「羽川さん。一つ、質問があるんですけどいいですか？」

「ええ、どうぞ」

頷く羽川。

阿良々木(妹)は小さく一礼すると間髪入れずに一言。

「お兄ちゃん、なんでこんな所に居るの？」

「いや、俺じゃなく羽川に質問しろよ」

なんの悪びれもなく俺に穂先を向けてきた。しかもその台詞は完璧に自分の事を棚に上げての発言である。

もはや図々しいにも程があるだろ。もしかして面の皮がフェイズシフト装甲とかで出来ちゃってるんじゃないの、こいつ。

「……ていうか、なんでもなにもないだろ。さっき羽川が言ってた通りだ。聞いてなかったのかよ」

「失礼な。ちゃんと聞いてたもん。でもそれにしたっておかしいよ。だってお兄ちゃん宮沢賢治とか全然読んだことないじゃん。日本文学とこの僕は水と油ほどに相容れないものなんだよって、前にドヤ顔にキメ顔で言ってたじゃん。ねえ、そうでしょ？」

「……………」

「……阿良々木くん」

沈黙というか沈没している真隣さんに羽川のジト目が炸裂。

そうか。ドヤ顔にキメ顔で言ったのか。それは何というか……痛いな。うん、超痛い。

「ち、違う！確かに僕ーいや、阿良々木暦がその昔にそういった発言をした事は残念ながら事実ではあるが、しかしだ、だからといって今の阿良々木暦と昔の阿良々木暦をまるで同列のように語ってもらってはぜびともやめてもらおうか！今の阿良々木暦は昔のソレとはまるで違う！つまり昔の阿良々木暦をアルファとするならば今の阿良々木暦はオメガであり、要するに別物、言うならば別人と評してもいいぐらいの個体差を有しているといっても過言ではないわけで。ていうか羽川の前で適当なこと言ってるんじゃねえよいい加減にしろやこのちつちやいの!!」

「はあ？」

猛る阿良々木に阿良々木（妹）は『誰こいつ童貞？』みたいな訝しげな視線を向ける。

だがまあそれも当然のこと。というかね、阿良々木くん。誤解を解こうと松岡修造ばりに熱くなるのは別に構わないんだけど、でもいい加減にしろやはむしろ君の方だと僕は思うの。

それを証拠に、小町と由比ヶ浜は実に分かりやすく啞然と目を見開いていた。

まあ、なんだ……一応心中はお察しする。

もしも逆に小町が見知らぬ相手であるだろう阿良々木に憤怒の形相で食いかかっていたら多分きつと俺だって同じ顔をしていただろうからな。むしろ思考が一周してもしかして小町ちゃん今日はアレが重い日なのかな？とか勘繰っちゃうぐらいだ。伊達に心配り屋さんとは呼ばれていない。自称なので本当に呼ばれていないという点はまあ、うん、ともかくとして。

俺は、すかさず羽川を見た。意味する所は一つである。

『もう頼むから早いところこの状況をなんとかしてくれ』

羽川は、蝶の羽ばたきのような吐息を零していた。

そうして俺のアイコンタクトに苦笑を返してから瞬時に口元を引き締め、それから園児同士の小競り合いを諫めようとするベテラン保母さんのようにやんわりと、アツサリと二人の間に割り込んだ。

その瞳はまず阿良々木（妹）へ向けられる。

「まあまあ、二人とも落ち着いて。月火ちゃんも、阿良々木くんに聞きたいことはそれこそたくさんあるのかもしれないけれど、まず最初は自己紹介からって話だったでしょ？大丈夫、その件だったら今度ちゃんと阿良々木くんの口から直接説明させるから、だから今は、ね？少しだけ待っていてもらえないかな？」

「……むう。わかりました」

諭すような羽川の声音に阿良々木（妹）は驚くぐらい素直に身を引いた。

続けて羽川は反対方向に轉身。先の阿良々木（妹）に対しての時よ

りも幾らか険の込もったその瞳は真つ直ぐと阿良々木暦を見据えていた。

『比企谷』くんも。『初対面』の女の子にちっちゃいのっちは言い過ぎでしょ？今のは阿良々木くんのことを庇つての事だったのかもしれないけれど、それとこれとは話が別です。だから、ヒドイこと言つてごめんなさいって、ちゃんと月火ちゃんに謝らなきゃね？」

「いや、だけど……」

「だけど？」

「……いえ、ごめんなさい」

「謝る相手が違うでしょ。私にじゃなくて、月火ちゃんに謝らなきゃ」

「………はい。ヒドイこと言つてごめんなさいでした」

「うん。よく出来ました」

そうして。

強制的に自分自身の謝罪シーンを真横から見せつけられるという全然俺は悪くないのに後味だけがすこぶる悪い光景を最後に、泥沼と化しそうだった状況はあつという間の内に解消された。

げに恐ろしきは羽川のカリスマ性とでもいうのだろうか。

戦慄さえ覚える巨大すぎる人望に思わず『ジーク・羽川！』とか口走りそうになる。もしかしたらIQ200とかあるんじゃないの？それでc vはもれなく銀河万丈さんになるんですね、わかります。

いや、だから何の話だ。

「うん？私の顔になにか付いてるかな？」

「……いや、べつに」

なににせよ。

相当なことがない限り、羽川翼と対立することだけは是が非でも避けるべきだと。そんなザコ敵根性丸出しで心に強く、深く誓った俺だったのです。まる。

……あれ？作文？

「――阿良々木月火です。中学二年の十四歳。一応、そちらでデロデロと目を腐らしてゐるお兄ちゃん野郎の妹です。趣味は正義の遂行、兼業で正義の味方なんかもやっちゃつてゐるのでお悩みお困りな事があるようであれば、この梅の木二中のファイヤーシスターズ参謀担当の月火ちゃんにぜひぜひご相談ください。はいっ、自己紹介終了！で、お兄ちゃんさっきの続きだけどー」

「――比企谷小町、中学三年生です。趣味は……貯金？あつ、いえいえ、今のはちよつと無しで。えと、趣味は料理と裁縫です♪それと先ほどお騒がせした、そちらの目の……全然腐つてない、ちよつと朝から様子がおかしくて今現在進行形ですごく近寄りたいたいお兄ちゃん、妹です……多分」

「――へ？あつ、つ、次あたし!?……あ、あの、えつと、由比ヶ浜結衣、です。趣味は……えーつと、えーつと……料理？あつ、今は高校二年生で……その、ヒツキーとは同じ学校の同級生で、今日は、えつと、小町ちゃんからヒツキーのことで相談を受けて、それでちよつとだけ心配になつて来ちゃつたというかなんというか……」

「阿良々木暦。……以上」

「比企谷、八幡だ。……あー、以上」

「はい、皆さんありがとうございました」

呆気ない程につつがない進行を経て、その不毛ともいふべき自己紹介タイムは羽川の締めの一言によつてようやくのことその幕を降ろした。

そして……またしても沈黙がリビング中を覆う。

というか結局の所ここからをどうするんだよ。むしろ、なまじ素性を明かしてしまったという事もあつて、余計に話を切り出しにくくなつてないか、この状況。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

三点リーダ地獄の再来。またしても繰り広げられる視線の応酬に、羽川は困ったように笑うだけだった。その視線は俺と阿良々木の二人に向けられている。

……いや、そこでこちらを見られても対応に困るんだけど……まあ仕方がない。

視線の矛先を羽川の真横へとずらす。

そして重い口を、俺は渋々と開いた。

「おい、妹」

「むっ。なによ、兄」

「お前に一つ言いたいことがある」

「私にはお兄ちゃんに言われたいことなんてなに一つもないですう」

そう言っつて阿良々木（妹）は当て付けのようにそっぽを向いた。

一々切り返し方が腹立つが、けれど今はそんな粗末なことに気を取られるわけにもいかない。俺はマリアナ海溝のように懐深い自制心を持って、その生意気な妹（偽）に切れ味するどくその言葉を放った。

「お前、今すぐ家に帰れ」

「はあ!?!」

そして切れ味するどい視線が返ってくる。

眼力がやばい。視線だけで人を殺せるんじゃないかってぐらいの威圧感が俺を強襲した。

「なにそれ意味わかんない！なんで私がお兄ちゃんにそんなこと言われなくちゃいけないのよ！」

「べつに意味わかんなくはねえだろ。お前は妹で、俺は兄。つまり、この状況において暫定的なお前の保護者は俺だろ。だから、これは保護者としての言葉だ。筋は通ってるだろ」

「通ってないよ！ぜんぜんっ、まったくっ、これっぽっちも通ってない！もうホントやっぱり意味わかんないプラチナむかつくー！」

いや、意味わかんないのはお前のその頭悪そうな造語の方なんだけどな。

なんだよプラチナむかつくって。無駄に言葉の響きが良いのが更に腹立つわ。

「あのな。じゃあ、むしろ聞くけどお前がここに居る理由はなんだよ。というか、俺としては何でお前がここに居るのかの方が意味わかんねえんだけど」

「そ、それは……」

若干の苛立ちが混じった俺の問いかけに阿良々木(妹)は言い淀む。

モゴモゴと、ムガムガと。声を発せずに口を動かしながら、やがて紡がれた言葉は、

「……だって、お兄ちゃんが心配だったんだもん」

……それはまるで予想していなかった言葉だった。

独白は続く。

「だって、だって今日のお兄ちゃんなんか様子が変わったじゃない。目もなんか死んじやあって、口調もなんか違ってて、それにいきなりワケのわからないことも言い出すし、しかも挙句の果てには私達のことなんて放って家を飛び出してそのあとは電話にも出ないで行方知れずだったんだから。それで方々を探し回って、だけど見つからなくて部屋で火憐ちゃんからの報告の電話を待ってたらいつの間にか帰ってきてるし。それで文句の一つも言おうとしたら、またさっさと出かけちゃって。それで後を追ったらいきなりこんな県外まで来ちゃってるし……もうっ、さっきの今までホントのホントのホントに行動の全部の全部が意味わかんなかったんだから！てつきりヤバイ世界とかクスリとかに手を出してたんじゃないかって想像もしてたぐらいなんだからね！このバカアホチビバカ！パパとママになんて説明すればいいんだろうって不安になってた私の純情な妹心を今すぐ返せこの妹不幸者がア！」

しおらしいから一転して怒鳴りちらすヒステリック女を前にして、俺はかける言葉が何も見つからない。

おい、お前の妹どうすりゃいいんだよ。盛り上がりすぎてなんか今にも爆発しそうだぞ……と。

SOSを求めて阿良々木を見るも、阿良々木は「月火ちゃん……」と

か呟きながら、ただただ苦虫を噛み潰したような顔をしていただけだった。

空気は更に重くなる。

が、そんな状況の中で、いち早くに彼女へと手を差し伸べたのはまたしても羽川翼――ではなく、これはまた、不思議な組み合わせとしか言えない。

今まで沈黙を保っていた小町がうんうんと頷きながら、いつの間にか阿良々木（妹）の側に寄り添っていた。

「うん、わかる。その気持ちスゴくわかるよ、月火さん。出来ない兄を持つ小町としても、その月火さんの漠然としない不安……身内の将来における不安がとてよく伝わってくるのですよ。何を隠そうウチの兄も一歩間違えるだけで確実に社会不適合者の烙印を押されるような人間で、だからこそいつも小町はその一歩を間違わせないように身を粉にして頑張っているという訳です。でも、その努力はさほど兄には伝わらなくて、だから兄を見守る妹としては色々ヤキモキとする時もあるんだよねえ。ああ、もう、ダメな兄を持つ身としては月火さんの抱えるその葛藤とかが自分のことのように思えてきちゃうよ。これがあの有名な以心……以心天津？なのかもね、うんうん」

「……比企谷さん」

最後に馬鹿をさらけ出しながらも、しかし言葉の奥深いところで妹的にかが共鳴したのかもしれない。わめき散らしていた阿良々木（妹）は突然に大人しくなり、そして感極まったような表情で小町と見つめ合っていた。

……まあ、理由はどうあれ仲良くなれるってことはいいことだよね！例えそれがお兄ちゃんに対する不平不満がキツカケだったとしてもさ！

「……比企谷。この居た堪れない空気を僕はどうやって乗り切ればいいんだ？」

「……俺が知るかよ」

そうして出来ない兄二人はただただ沈黙する。

ここに妹同盟の結成が成立したのだった。

十一話

妹二人が結託した。

まあそれはいい。だが、その妹同盟の中に羽川と由比ヶ浜までもが併合されたのはもはや意味がわからなかった。

「……うわあ、ヒツキーってば中学の時からそんなだったんだー。なんか納得といえれば納得だけど……でも、流石にちよつとそれは引くかも」

「ですなあ。まあ、だからこそそのお兄ちゃんとも言えるんですけど、でも流石に妹としては兄のそういうシーンを目の当たりにするのはやっぱりドン引きですよ。あの頃の小町がお兄ちゃんの事でどれだけの気苦労を重ねていたか……はあ、いま思い出しても憂鬱です」

「うんうん、小町ちゃんも色々大変だったんだね。その気持ちすごくよく解るよ。実を言うとウチのお兄ちゃんもそういう所があったりしてさー」

「へえ、その話はちよつと気になるかもなあ。阿良々木くんの中学時代の話って、私一度も聞いた事がないから」

「あ、そうなんですか。だったら存分にその時の事を話し聞かせちゃったりしちゃいましょう！えーつと、確かアレは私が十歳だったときのことなんですけど……」

和気あいあいと、または姦しく、女子達は俺と阿良々木の過去話に花を咲かせている。ある時はこんなことを、ある時はそんなことを、中には俺ですら忘れていた俺のマル秘エピソードも朗々と語られ、もはや本人のあずかり知らぬところでHatiman／エピソードZeroがもれなく絶賛公開ロードショーされていた。

もちろん抱き合わせでKoyomi／エピソードZeroも公開中である。

どちらにせよ見たくもないし、聞きたくもない。むしろ早いところ上映期間が過ぎてくれとさえ思うが、残念ながら今作はエピソードZeroからIIIまでの四部作となっているらしい。新エヴァにも対抗しうる程の巨大プロジェクトである。マジで頓挫すればいいの

に。頓挫してくれないかな。というか頓挫してくださいお願いします。

「わーお、それってホントの話なの、つつきー？」

「うんうん、マジにマジ、大マジだよ、こまつちゃん」

しかしプロデューサー陣のヤル気は迸るばかりだ。

……なんか短時間の内にずいぶんと仲良くなりましたね、お二人共。もうニックネームで呼び合う仲かよ。なんなのお前らのその社交性、もしかして社交界進出とか狙っちゃってるわけ？

シヤルウイダンス？

ノーサンキュー！

「比企谷」

「あん？」

と、横からの声に目を向ければ神妙な顔つきをした阿良々木がいつの間にか俺のパーソナルスペース内へと浸入していた。

……いや、超近くて鬱陶しいんですけど。

「なんだよ。言つとくが傷の舐め合いならしないぞ。野郎同士で慰めあうぐらいなら俺は一人でマキロンを患部に塗る派だ」

「違う。というか、どちらかといえば僕だつて一人マキロン派だ。じゃなくて、羽川が月火ちゃー姉達の意識を逸らしている今のうちにここを離れよう。今ならバレずにこの場を抜け出せるだろう？」

「……おお」

言われて気付く。確かに女共はバカみたいに顔を付き合わせて話に夢中になっていた。どうやら、あまりの精神的ダメージにそこまで頭の回転が回らなかつたようだ。

というかお前、妹の事ちゃん付けで呼んでんのな。

ぶぶっ、痛いやつだな。シスコンかよ。

「……ん？どうかしたの、こまつちゃん？」

「ううん、いや、なんかいま誰かに何かを言わなきゃっていう使命感に襲われた気がしたようになしてないよう……」

「なにそれ？」

首をかしげる小町に笑う阿良々木月火。

その二人の後ろでソツと立ち上がった俺と阿良々木は天敵の目から逃れる野ネズミのようにこそこそと、リビングから階段下の廊下へと逃れた。

本当ならばこの家から出た方が都合はいいのだが、しかし諸々の障害事情原因によりそれはあえなく断念。俺たちは再び二階にある俺の部屋へと足を踏み入れる。

後ろ手で慎重に扉を閉めると、阿良々木の口から安堵のため息がもれた。

「……どうやらバレなかったみたいだな」

「そうらしいな。で、これからどうするんだ？」

「……どうすればいいんだろうな」

そう言つて阿良々木は控えめに笑う。そして気まずそうに頬を掻きながら、

「いや、冗談だよ。けど少なくとも妹達が側に居る状況でさっきの続きをするわけにもいかないし、それにあの場に居続けていらぬ追求を受けるのは比企谷だつて嫌だろう？」

「……まあな」

由比ヶ浜はともかく、小町はアレで勘もすば抜けてるからな。

万が一にもバレる可能性を考慮すると確かに抜け出してきたのは正解だろう。

「でも、それにしたつて比企谷もずいぶんと水臭いんだな。友達なんて居ないって言っておきながら、あんなに可愛い友達が居たんじゃないか。確か由比ヶ浜、だつたっけ？」

「友達じゃねえつての。何度も言つたが、由比ヶ浜はただの同級生だ。さつきも言つただろうが。俺には友達なんて居ない」

「……友達は何かい、か」

阿良々木の瞳が懐かしいものを見るような眼差しに変わる。その瞳は何故か、どこか苛立たしく俺の心を波立たせた。まるでお前の気持ちなど解つているとでも言うようなその目に、俺は知らずのうちに言葉を返していた。

「なんだよ。まさか友達が居ないから可哀想だとか言うつもりか？」

だったらそれはお門違いだな。むしろ俺は一人が好きだし、なんなら一人だからこそー」

「ー気が楽だし、自分が自由であると実感出来る。友達に気をつかわなくていいし、友達の自慢話を鬱陶しがる必要もない。瑣末なことに自分の心を、地盤を揺り動かされる心配をしなくても済む。だから一人でいい。だから、一人がいい。……だろ？」

俺の口調を真似るように言葉を被せながら。阿良々木は思わず言葉を失ってしまった俺を見て、笑う。

笑いながら、いわゆる阿良々木月火が言っていたようなドヤ顔にキメ顔を決めて一言。

「友達を作ると人間強度が下がる」

「……は？」

「数ヶ月前まで僕が抱いていた、いわゆる僕の格言だよ。友達が出来るとそれだけで弱みになる。友達が悲しくなると僕も悲しくなるし、友達が傷付くと僕も傷付く。だからといって友達が楽しそうにしていればそれはそれで羨ましいし、友達が嬉しそうだとやっぱ妬ましい。なによりも、そんな風に友達の一挙一動に一喜一憂する僕のことを僕は情けなく感じる。弱くなったと、人間強度が下がってしまったと感じる。だから僕はこの格言を胸に、肃々とこれまでの人生を生きてきたんだ」

それも羽川と出会う前までの話なんだけどなーと。もう一度、今度は苦笑混じりに阿良々木は笑った。

それは自嘲の笑みなのかもしれない。はたまた単なる思い出し笑いなのかもしれない。

どちらにせよ、俺がその阿良々木の独白になんらかのアクションを起こすことは無かった。

正直言えば「だから、こいつは何をいきなり言い出してんの？」とか思った程度だ。

友達を作ると人間強度が下がるとか。

友達が出来るとそれだけで弱みになるとか。

あえて言おう。そんなこと俺が知るかよ。

友達が居たこともない俺からしてみればその悲しみも痛みも羨望も妬みも、全てが全て知らない経験であり知りたくもない経験でしかない。

だから、それをまるで『自分もお前と一緒にだったんだよ』みたいに言われても俺にはなんのリアクションも出来ない。精々が、その俺をわかったようなフリをした同情の眼差しに嫌悪感を抱くことしか出来ない。

友達が出来ないのと、友達を作らないのでは似て非なるもので。

少なくとも俺はー昔の、まだ理想や青春を追い求めていた懦弱だった頃の俺は、少なくともその前者に位置する人間だったから。

だから、俺はー

「比企谷。だけど、だからこそ僕はそうして羽川と出会ったことで分かったんだ。今までの自分が間違いだったって。友達が出来るから弱みになるんじゃない。僕自身が薄くて、弱かったから、その弱さを友達のせいにしていただけなんだって。そう気付いたんだ。そう気付かされたんだ。だから、というわけでもないんだけどな、比企谷。正直に言えば、僕なんかそんな偉そうな事を言える立場ではないとはわかりきっているんだけど、それでも、きつと、お前は変わるべきなんだと僕は思う。僕が羽川によって間違いを気付かされたように。羽川という友達が出来たおかげで変わったように。だから、きつと、お前も」

「ー俺はお前とは違う」

短く言い放った言葉。

無感情に拒絶の意だけを示した簡潔な意思表示で、阿良々木はようやく黙ってくれた。

しかし、それでもなお言葉を探すように焦燥混じりに細められたその目に、俺は続けて意思を示す。

「間違いだとか間違いじゃないだとか。変わるべきだとか変わらないべきだとか。そんなのは結局、言葉遊びみたいなものだろうが。お前にとっての間違いが俺にとっての間違いということにはならない。お前にとっての正解が俺にとっての正解とは限らない。要するにだ

な阿良々木。……お前の価値観を俺に押し付けるな」

「……比企谷」

口を閉ざす阿良々木の視線から逃れるように俺は正面のベッドに仰向けで寝転んだ。

話は終わりだ、と。あからさまに見せたアピールに阿良々木はしばし沈黙してから、やがて小さく俯き、

「……そうだな。確かにお前の言う通りかもな。その……出すぎた事を言つて悪かったよ」

「……別に、気にしてねえよ。心底からどうでもいいことだ。つか、そんなことよりも今は現状をどうにかする方法だけを考えるべきだろう。俺たちのー阿良々木暦と比企谷八幡の入れ替わりを解消することもちろんだし、とりあえず今は下の由比ヶ浜やお前の妹をどうにかして帰らせる方法も考えなくちゃならん。というか由比ヶ浜はともかく、お前の妹をどうするんだって話しだよ。なんか知らんが小町と無駄に意気投合しちやってるし、まさかだとは思うがこのまま泊まるとかつて言い出しでもしたらマジでややこしいこと……に……？」

「……比企谷？」

どうした？と俺を見る阿良々木を越した向こう側、その背後、わずかに隙間の出来たその部屋の扉を俺は見る。

目を細め、耳を澄ませる。物音がした。続いて後ろを振り返る阿良々木の目の前でその扉はまるで意思を持ったかのように一人で開かれていき……そして、その先に居た人物を俺達の視界の内へと映し出した。

「由比、ヶ浜……!?!」

「……あ」

レモンイエローな裾の短いTシャツにホットパンツという夏真っ盛りな服装に身を包みこんだ由比ヶ浜が、放心したようにそこに立ち尽くしていた。

その瞳は阿良々木に向いている。そしてベッドの上に座る俺へと移され、大きく揺れる。

由比ヶ浜は真つ直ぐと、俺の目を見ていた。

「あ……そ、その、ノックも無しに急にごめんねっ！あた、あたしっ、サブレにエサあげるの忘れててさ！だから家に帰らなくちゃで、それで、ヒツキー達にもその事を伝えようと思って探してて、だから、別に話を盗み聞きしようと思ってたわけでもなくて、その……あ、あははっ、なんかあたしちゃん和日本語喋れてないね」

由比ヶ浜は驚きと戸惑いがない交ぜになったような、それでいて必死にそれを隠すようにくしゃりと歪めた出来損ないの笑顔を浮かべる。

俺はそんな由比ヶ浜を前に何も言うことが出来ない。

突然の事態にただただ固まるだけで、そうしている内にも由比ヶ浜は歪めた笑みのまま、無理に取り繕ったような表情のまま、ぎこちなく、たどたどしく、

「そ、それじゃあ、あたし、というわけだから、か、帰るね？……さよなら！」

そして由比ヶ浜は一目散にその場から去っていった。ボタンと閉じる玄関扉の音で、俺はハッと意識を浮上させる。

気付けば阿良々木が引きつったような顔をこちらに向けていた。

「比企谷……まさか、もしかしてだけど……」

俺は言葉を返せない。しかし、それでも、それが純然たる事実である事には変わりなかった。

——由比ヶ浜に、正体がバレた。

ただでさえ面倒くさい状況の中を、また一つ。厄介な頭痛の種が追加された事に俺は深々と溜め息を吐くことしか出来なかった。

十二話

「……そっか。由比ヶ浜さんに……」

それから数十分後。

つまり由比ヶ浜が脱兎の如き俊敏さで部屋を脱し、そうして俺と阿良々木が間抜け顔を突き合わせながら途方に暮れに暮れていた後のことである。

妹同盟の輪から離れ、再び合流を果たした羽川の前で、俺達は事の経緯をつまびらかに報告していた。

ちなみに小町と阿良々木月火は少し前に家を飛び出している。なんでも小町が地元周辺の案内を申し出たとかで二人仲良く観光を楽しんでいるらしいが……いや、まあ、それは別にいいんだけども。

でもね、小町ちゃん。確か君、お兄ちゃんの事を気にして由比ヶ浜を連れてきたりとかしたんじゃないの？

それでお兄ちゃんに一言も無く外出とかはやっぱりちよつと傷つく。いや、正確には今の俺は小町の兄ではないんですが。

月火？ああ、うん、アイツはどうでもいい。というか頼むから早く帰ってくんないかな……もう違う意味で、物理的に傷付けられそうで怖いんだけど……。

「ううん、だとしたら困ったことになっちゃったね。ありのままの事実だから釈明のしようもないし、かといって深い部分まで話して彼女まで今回の件に巻きこむわけにもいかないし。多分、一番手っ取り早いのは今の状況をすぐにも解消していつも通りの比企谷くんの姿を由比ヶ浜さんに見せることなんだろうけど……」

そう言っつて、羽川は視線を俺の影に落とす。これまでの羽川や阿良々木の態度から察するに、たぶん、解決の糸口は俺の影——というよりかは、阿良々木暦の身体から生まれ出でた影とやらかの関連性があるらしい。

LED電球の灯りに照らされた何の変哲もない漆黒を中心にして、俺達四人はそれぞれ思索を走らせる。そんな中でいの一番に発言を繰り出したのは、我らがロリイ日本代表、八九寺真宵その人だった。

「まあまあ、皆さん。時には思い悩むことも必要ですが、しかし、ここは一度頭を切り替えていきましょう。過ぎたことにこれ以上労力を費やしても時間の無駄にしかありません。まずは私達が出来ること、するべきことから始めるのが最も大切なことなのではないでしょうか？」

その幼い容姿からは考えられないほど冷静に放たれた意見に、散漫とした場が瞬く間の内に収束された。

たった一度の発言で空気を変えてしまうなんて、さすが八九寺！俺たちに出来ないことを平然とやってのける！そこにシビれる憧れ……って、おい。ちよつと待て。

「なにをしれつと会話に入ってますか、お前。というかどこから現れた？」

「ふふふつ、どうやら突然の私の登場に驚かれていますよね、比企谷さん。しかし、その問いかけは愚問ともいえるでしょう。何故なら私は神出鬼没の美少女、いつどこでどのような場面にも颯爽と登場するのが私なのですから。そう……それはさながら、テラフォーマーのように！」

いや、それって要するにゴキブリってことじゃねえか。

解って言っているのか。人気作品というフィルターを通して満足げに発せられた残念な発言に俺は可哀想な子をみるような視線しか向けられない。

そんな可哀想な女子小学生、八九寺真宵はトコトコと俺と阿良々木の間へと割り込むなり、その視線を左に立つ阿良々木へと向け、藪から棒に一言。

「ところで比企々木さん」

「ここにきてようやくの前振りであることに若干の喜びを感じ得ないでもないが、しかしだな、八九寺。現在の僕の外見と内面を足して二で割っただけのような安直な噛み方で僕の名前を呼ばないでもらおうか。違う、僕の名前は阿良々木だ」

「失礼。噛みました」

「違う、わざとだ……」

「かみまみた」

「わざとじゃなかった!？」

「かみまみ……ふう」

「そこまで言っただけで喋るのを諦めるのか!? お前は僕の妹かよ!!」

イキイキと阿良々木は糾弾し、八九寺は収まりがいいのか謎にウンウンと頷いている。……何だろう。正直、本人達以外からしてみれば超どうでもいいやり取りでしかないが、しかし、そんな無駄にも過ぎる内輪芸に知らず俺自身も組み込まれていたのかと思うと、なんだか妙なやるせなさが湧いてくる。

やっぱり内輪ネタとかはこの世から滅ばいいのに……なんて願望を心の中の神龍に願いながら、俺は続く二人の会話を遠巻きに眺めた。

「それはともかくとしてですね、阿良々木さん。私は一つだけ思う事があるんです。果たして、このクロスオーバー作品は一体全体何話まで続く気なのでしょう? ぶっちゃけると1話にして未だこの入れ替わり現象の片鱗さえわからず、ただ蛇足的にキャラクター同士の掛け合いをつらつら書き連ねているだけのこのお話に私はもちろんのこと、読者さんだって既に飽き飽きしてしまっていると思うわけです。様々な個性溢れる作品が乱立するこの第二次戦国時代を生き残るにはやはり、ここらで一つ大きなフラグというか伏線というか、そういう読者を楽しませるような要素をひねり出す策が必要なのではないでしょうか?」

「……お前が一体誰から目線でなにを言っているのかを僕はあえてここで深く追求をすることはしないが、まあ確かに冗長にも過ぎる文章というものはえてして倦みにつながるものだというからな。例えば本筋には全く関係ない言葉遊びで無駄にページ数を使ってしまうのはそれこそ冗長的とも言えるし、はたまた七ページ半に亘って目覚まし時計の考察についてを書き連ねられでもしたら僕は勢いあまってその本を投げ捨ててしまうかもしれない。そう考えると、うん、創作物というものには確かに変革というか、別冊コロコロコミックにて連載されていた電撃ピカチュウというところの『なんで後半からカスミ

の胸は小さくなつていったのか?』という大きな謎めいた伏線のような刺激が必要であるのかもしれないな」

神妙に頷く阿良々木に、それは謎でも伏線でもなく単に大人の事情でカスミは貧乳になつたんだよということをやかに伝えた。い。

電撃ピカチユウ……面白かつたよなあ。

俺が小学生の時にはあの作品にずいぶんとお世話になつたものだし……(意味深)

「でもさ、必ずしも冗長的な文章がダメということはないんじゃないかな? 物語の間に挟まれた閑話を楽しむ人だつてきつと居るだろうし、阿良々木くんだつて目覚まし時計の考察ならともかく、下着についての解説を四ページに亘つて書き連ねられたらそれはそれで面白いと思うんじゃない?」

と、完璧無比にも過ぎる……というかどこか威圧感さえ感じる笑みを浮かべて羽川は阿良々木にニコリと微笑んだ。

対して、ニコリと微笑まれた側の阿良々木はというと、何故か『しまった!』とでもいうような表情で顔を引きつらせ、そして沈黙。

それから『ギギギ』と軋んだ音でも聞こえてくるんじゃないかと思うほどに鈍い動作でその顔を八九寺から羽川へと向けた阿良々木は、聞くからに空々しい声音をその喉から絞り出した。

「そ、そんなことはないぞ、羽川。僕は下着マニアでもなければ、下着フェチでもないんだ。そんな清廉潔白なこの僕が、たかが数ミリ厚の修飾加工された布地なんかに興味を持つわけがないじゃないか。全く。面白い冗談を言うようになったんだな、羽川も。は、はっはっはっはっはっはっはっ」

「……『眼鏡の委員長特集』には興味を持つのに?」

「うぐつ!?!……はは、ははは……それはそうと八九寺、話を戻そうか。お前の意見をまだ聞いていなかったけど、じゃあ例えはどういった風の要素があればお前は面白いと思うんだい?」

無理矢理な話題転換。八九寺はゴミを見るような目付きで阿良々木にジト目を向けている。……が、やがて八九寺は仕方ないとばかり

に溜め息を吐くと、

「……ふう。まあ、そうですね。堅実な所で言えば強敵の出現といったところででしょうか。悟空にフリーザ、ウルトラマンにゼットンといった図式からわかるように、古今東西で少年達にワクワク感を与えるのはやはり主人公と強敵との対立であると言えるでしょう。それはもはや黄金のテンプレートと断言してもいいです。歴代のジャンプ編集者は常日頃からこう言って作者達に助言を与えたものですよ。『困った時は強敵を出せ』とね」

「いや、だからお前は誰目線から話をしているんだ？いつからお前はそんな風にならなからジャンプ編集者を語れるような立ち位置になったというんだ」

「あれ？阿良々木さん知らなかったんですか？実は私、昔はジャンプ編集部に籍を置いていたんですよ。なにを隠そうあの『友情・努力・勝利』という三大原則を考えたのも私です」

「なんだと！まさかお前があの有名な初代編集長、長野規だったのか！」

「いいえ、私は彼の孫です。そう、つまりは『八九寺真宵は実はあの伝説の編集長、長野規の孫だった』という事実がのちにこの作品を大いに変革させる重大な伏線になるというわけですよ！」

「もはや意味がわからねえ……。もう一生伏せとけよその事実」

くだらな過ぎて思わずそんな本心が口を突いて出てしまった。

つか、伏線違うからね。それ、ただの嘘だからね。

「さて、ともあれこれで伏線の方はバッチリです。あとは強敵さんのスカウトですが……そうですね。身内からの裏切りという鬼気迫る演出を採用するためにも私はあのツンデレさん、阿良々木さんのガールフレンドでもある彼女を強敵のポジションに据えたいのですが、その彼女の彼氏役でもある阿良々木さんからするとこのキャストイングはいかがなものなんでしょうかね？」

「彼氏役じゃなく、真に純粋な意味で僕は戦場ヶ原の彼氏だ！というか……いや、でも、それだけは本当に勘弁してくれ。ただでさえ戦場ヶ原にはこの状況について何一つの連絡も入れてないんだ。それ

でもし僕がこの事を故意に黙っていたのだという事実を今のあいつに知られでもしたら、多分、僕は不申告罪とかで瞬く間のうちにホツチキスで穴だらけにされるかもしれない。そんな惨事だけはなんと少しでも回避させてくれ」

「はあ、やれやれ。こんな時だというのに惚気ですか？全く、本当にアツアツなんですねお二人は、ひゅーひゅー」

「待て!?いまの言葉のどこに僕が惚気たような描写があったというんだ!？」

「それはもうもちろん『ホツチキスで穴だらけにされてしまうZE』の部分に決まってるじゃないですか」

「違う!!その言葉から感じるのは間違いなく惚気じゃなくて怖気だ!!というか、今どきのスプラッタームービーでさえそんな戦慄するようなシーンは早々無いぞ!？」

その言葉につられて少しだけ想像してしまう。……ああ、普通にグロ過ぎて冗談抜きに笑えねえな。

「とにかくだ。そもそも僕は戦場ヶ原をこの件に巻きこむつもりはない。羽川のおかげで少しずつ良くなっていつてらるだろうあいつに、今は余計な心配をかけたくはないんだ」

「……阿良々木くん」

明確に言い放たれた意思。ここにきて、俺は初めて阿良々木の毅然とした言葉を聞いたような気がした。

そうして、俺達から向けられた視線に阿良々木は今さらながら気付いたように照れ気味に頭を掻くと、ゴホンとわざとらしい咳を吐き、顔を上げる、

「……なんだかまたずいぶんと話が脱線してしまっただけだな。今度こそはちゃんと流れを本筋に戻そう。たしか……まずは出来ることから始めようって話をしていただったよな」

「そうだね。出来ることからって言う……ううん、そうだなあ」
「あつ」

下唇に人差し指を乗せながら小首を傾げる羽川の前方で、突然、八九寺が思い出したように声を上げた。

「そういえばまだ聞いていなかったんですが、阿良々木さん、結局のところ対話はもうお済みになったんですか？その……例の方との」

再び集まる視線に阿良々木は神妙な顔つきになり、そして八九寺のその問いに答えた。

「……いや、それはまだだ。途中で邪魔がーというか由比ヶ浜と比企谷の妹と遭遇しちゃってさ。それで、まあ、関係の無い人達が居る中で事を進めるわけにもいかず、今の今までずると先延ばしにしていた。けど……そうだな。今なら、いや、今がその時なのかもしれないな」

決心したように頷くと、阿良々木は落ち着いた所作でその両膝を床に付けた。前の時と同じ、しかし、今回は邪魔が入らない中を、阿良々木はゆっくりと額を床に付ける。何を考え、何を思いながらその姿勢を取っているのかは俺にはわからない。だが、それでも、その背中からはある種の真剣さのようなものがハッキリと感じられた。

沈黙。

静寂。

のち。

そして、阿良々木の声が室内中に響き渡る。

「ー忍。僕に……僕に力を貸してくれ!!」

十三話

「うわおー！すっごいなにこれ!?この料理全部こまっちゃん一人で作ったの!？」

そんな阿良々木月火のオーバーリアクションボイスが比企谷家の食卓に響きわたった。その視線の先、リビングの脇に置かれたテーブルの上には数々の料理が所狭しと置かれている。

ハンバーグにフライドポテトに麻婆豆腐にチンジャオロース、肉じゃがにほうれん草の胡麻和えに漬け物にキャベツの千切り、そして最後に各々の茶碗の横に置かれた小皿には千葉名物みそびーがその茶色い存在感を露わにしており、そうして食卓の上では和洋中、あと千葉という国際色豊かな中に地元愛の垣間見える料理群がそれぞれに香ばしい匂いを発しながらレッツパーティーしていた。

実に美味そうである。いや、実際にその見た目が決して味を裏切らないことを俺の舌は知っていた。

阿良々木月火の横を見る。そこに居たのはエプロン姿のプリティガール、比企谷小町が晴れやかな顔で慎ましい胸を自慢気に張っていた。

「いやいやあ、ちよつとだけ頑張つてみちやいました」

そう言つて小町は満足げにニコリと笑う。

はっ!?天使かと思つたら妹だった……なんて実に気持ち悪いことを考えながら、俺は豪勢にも過ぎる食卓を前についつい思ったままの疑問を口にしていった。

「……今日って誰かの誕生日だったりしたか？」

「いいえー。けど、せっかく我が家を訪れてくれたお客さんですからね。それにツツキーにはもちろん、羽川さんやツツキーのお兄さんにも美味しい料理を食べてもらいたかったですし。だから、たまには張り切ってみよっかなーなんて」

あ、今の小町的にちよつとポイント高かったかも。

なんて条件反射のように小声で呟く小町は普段よりかは控えてはいるものの、しかしやはりというか他人の目から見ても少々あざと

い。

だがまあ、そんな小町のあざとさはともかくとして、それよりも今は目の前の食欲であった。

時刻はすでに夜の七時を迎えている。

よくよく考えれば朝食も昼食も取っていない、せいぜいが冷えかけのポン・デ・リング一つとコーヒー一杯しか腹の中に入っていない俺からしてみれば、その目前の質と量は衝撃を越えて暴力たりえるもので。というわけで、俺の右手が無意識に手近のみそぴーへと伸びる。が、そのフライングは阿良々木月火の強烈なチョップによってあっさり阻まれた。

「こら、お兄ちゃん！つまみ食い禁止！羽川さんとこまっちゃんのお兄さんが来るまでちゃんと我慢してよね！」

「ぐっ……!!」

まったくもうっ、よそ様の家でみっともない事しないでよポンポン！

と、怒気を見せる阿良々木月火の威圧によって、俺は敗残兵がごとき心境でテーブル片隅への撤退を強いられた。ヒリヒリと痛む手の甲をさすり、仕方なく視線を番組垂れ流しのテレビへ向ける。

そうして特にこれといって面白くもないバラエティ番組を右から左へと聞き流していると、すぐ真横から小町達の会話が否応なしに聞こえてきた。

「ああ、そういえばさ、ツツキー。その服のサイズはどうか？もし小さいようであればまた違う服を取りいこつか？」

「ううん、それは問題ないかなー。ベストマツチのベストフィットだったよ。文句無しだったよ。本当にありがとね」

「そんなの全然気にしてないよー。ツツキーは大事なお友達で、それに小町だって久々のお泊まり会で気分がルンルンだしね。というかもう逆にそんな質素な部屋着なんかで申し訳ないかぎりですとかなんというか……」

「もー、そんなことないよー。暖かいお風呂に加えてこんなに美味しそうなお飯も頂いちゃって、もう至れり尽くせりだね。こまっちゃん

様々だよ。もうホント大好きこまっちゃん！」

きやーきやー言い合いながら抱きつき合うゆる百合シスターズを尻目に俺はどんよりと目を腐らせる。こうなるともはや帰れとも言えない雰囲気だった。

てつきり小町との外出を終えたらその流れで帰るんじゃないのかとも期待していたのに。しかし、その期待は俺が危惧していた事態そのままの形となって、こうしてゆる百合時空を作り出していた。

わからん。なんだって俺の周りにはこう、同性でいちやいちやするようなやつばかりが集まるんだ。もしやこれはアレか。周囲の流れに沿って俺も戸塚といちやいちやするべきだという神からのお告げかなにかなのだろうか？なにそれヤバい。なにがヤバいって、そんなことをわりと真剣に考えてしまっている俺の頭が一番ヤバかった。

八幡、あなた疲れてるのよ……。

「わあ、とてもいい匂い。まるでレストランに出てくる料理みたいに美味しそうだね」

「あ、羽川さん！」

小町の声につられて顔を上げると、そこには制服姿ではないラフな格好をした羽川翼の姿があった。

フリーサイズのジャージパンツに、多少裾の余ったシンプルな柄のシャツ。その顔はわずかに赤らみ、水気で湿った黒髪がそこはかとな艶やかさを演出している。

「お湯、ありがとね。広くて、綺麗で、とっても気持ちの良いお風呂だったよ。疲れが嘘みたい吹き飛んじゃった」

「いえいえ、お礼なんてそんな、全然いりませんよー。お気に召されたようであればなによりです。あ、それよりも服のサイズはどうでした？小町のだちよっと小さすぎると思ったので母のTシャツをチョイスしてみましたですけど……」

「うん、全然問題はなかったかな。なにからなにまでありがとうね、小町ちゃん。本当に助かった」

笑みを一つ。それから羽川は右から左へと視線を動かして室内を見回し、

「……あれ？比企谷くんは？」

「お兄ちゃんですか？……あー、そういえばまだ二階から降りてきてないみたいですねえ。いつもならご飯時になれば勝手にその辺りからひよつこりと現れるんですけど……むう、仕方ない。ちよつと呼んで来ますね」

言うなり、小町はパタパタと二階へと駆けていった。

それをきよとんとした表情で見送ってから、羽川は火照った顔でトコトコとこちらへ近づき、そしておもむろに俺の横に立つ。すかさず訝しみを向けた俺の視線に羽川はごく自然体な笑みを返してきた。

「……比企谷くんも、ありがとうね。本当は日帰りのつもりだったんだけど、まさかこうして家族の団欒にご同伴あずかれるなんて思いもしなかったよ」

「仕方ねえだろ。ここに阿良々木の妹一人だけを置いてくわけにもいかねえし、それに今日は親父も母ちゃんも残業で帰ってくるのが遅いらしいから都合もいいし。あとは……まあ、なんだ。わぎわぎ千葉くんんだりまで来て収穫の一つも無しに帰るのもアホらしいしな」

テーブルに肩肘つきながら答えた俺に羽川は苦笑を浮かべていた。と、不意にその視線が天井に向けられる。

二階からかすかに聞こえてくる小町の声に羽川はスツと目を細めてから、ぽつりとつぶやく。

「……阿良々木くん。まだ夕方の事を気にしてるのかな」

「……………」

夕方の事。

キツチンの端でテキパキとフライパンやら包丁やらを片付ける阿良々木（妹）の姿を横目に眺めながら、俺の脳裏では先の――阿良々木の土下座シーンがありありと思いつき出されていた。

土下座で想いを吐露した阿良々木。

羽川も、八九寺も、どこか張り詰めたような表情でその視線を俺の影に向けていて。だからこそ、なにかが起こるんだろうと。場の空気に感化されるように緊張しながら、生唾を飲み込み、そして自分の影に意識を集中していた俺の眼前で――しかし、いつまで経っても変化

は表れなかった。

表れないし、なにも現れない。ただ俺に向かってひたすらに土下座をし続ける阿良々木の姿だけが滑稽に俺の網膜に映し出されていただけだった。

――失敗した。

何も知らない俺だとしても、その結果が意味するところはすぐに解った。

羽川の語った解決策、阿良々木が吐き出した忍という言葉、それらが意味するだろう一端すら把握出来ないままに。結局、事態はなんの推移も見せず、沈痛な空気のまま時間を無駄に浪費する内にも小町達が帰ってきてしまい、そうして、俺達の行動は全てが徒労に終わってしまったのだった。

阿良々木は放心したように頭をうなだらせ、羽川は視線を伏せたまま、八九寺はまたしてもいつの間にかその姿をどこかへと消し去り、そして俺は途方に暮れ――で、現在に至る。

「……阿良々木くんには悪いことしちゃったかな。多分、本来ならもう少し時間をかけて解きほぐす問題だったはずなのに、私が無理を言ったせいで阿良々木くんに嫌な想いをさせちゃった。それに……比企谷くんもゴメンね。私の見通しが甘かったばかりにぬか喜びさせちゃって。本当にごめんなさい」

羽川は目を伏せる。その唇はなにかを悔いるように、きゅつと引き結ばれていた。

俺は一瞬の逡巡ののち、言葉を返す。

「べつに、お前が謝る必要なんてねえだろ。お前も阿良々木も、変に気にしすぎなんだよ。そもそもが他に打開案があったわけでもなし。それに俺に至ってはお前らが居なければ今ごろまだあの公園でわけもわからずボーツとしてただらうしな。つまり、感謝を要求される謂れはあれど謝罪をされるような謂れはない。だからいい加減、顔を上げろ。いつまでもお前がそんなんじゃないやあ、せっかくの小町のご馳走も不味く感じちまうだろうが」

恐らくここ最近の中で間違はなくトップクラスの出来だろうデイ

ナーである。せっかくの豪華な食事を雰囲気重いままに食べるのはやはり俺個人としてもいただけない。

第一、もしも羽川が落ち込んでいる原因に俺が関与していると小町達に知られでもしたらと考えると戦慄ものだ。小町はともかく、あの暴走娘がなにをしないでかすかが解らない。というか解りたくもない。つまり羽川が精神的に凹んでいると俺が物理的に凹まされてしまう確率が大いに出てくるという最悪な結論に至るのだ。それはなんとしてでも避けたい。

だからそろそろ空気を読んではくれないですかね羽川さん、という意味も込めて返した言葉に彼女はパチパチとまばたきをしてから、

「……ふふっ。優しいんだね、比企谷くんって」

背中がむず痒くなってくるような微笑みが打ち返されてきた。

そして俺が反論の言を向けるよりも早く、羽川は言葉が続ける。

「けど、違うの。そうじゃなくてね。今回うまくいかなかったのは、たぶん、私に責任があるから、だからごめんねって言いたかったの。きつとあの場に私が居たから、彼女は出てきてくれなかったんだと思う。だから……」

「……彼女？出てくる？」

ぽつりとぽつりと紡がれる羽川の言葉は正直言つて要領を得ない。

お前はなんのことを言ってるんだーと。喉の半ばまで出かけた疑問は、しかし更なる他の声によって上書きされた。

「おっまたせしましたー。なんだかお兄ちゃんはドーナツの食べ過ぎで食欲がないとか言っちゃってくれちゃったので、もう先に私達だけでお夕飯を食べてしましましょう。ではでは、ご飯よそっちゃうんで皆さんは席に着いててくださいいねー」

「あつ、私も手伝う手伝うー」

小町の能天気な声によつて会話は強制終了。結局、羽川の謝罪の真意を聞きそびれたままに賑やかに過ぎる食事が開催された。

晩餐の最中も羽川はまるで先のやり取りのことなどおくびにも出さないニコニコ笑顔を終始浮かべたまま。だから、俺もその話題には触れずに黙々と料理を口の中にかっこんでいくだけだった。

ただ、俺が飯を喰らいながら思い考えていたことはたったの一つだけ。

やはり小町の料理は超絶に美味かったです、はい。

夜風が心地良かった。

熱光線のようなジリジリとした日差しを発するあの殺人太陽も今は南米辺りに遠征しているし、加えて最近では雨も少なかったおかげか夏特有ともいえるあのうだるような湿気も幾分とマシになっている。ただ吹きゆく風だけが爽やかに木々を揺らし、肌を撫で、風呂上がりの身体の熱をゆっくりと冷ましていく。

まさに外出にはうってつけな心地よい環境。ただ唯一心地よくないのはその外出を決めた理由そのものだった。

『歯ブラシが無いから買ってきて』

あっけらかんと言い放ってきた阿良々木月火の言葉が苦々しく蘇ってくる。

とはいっても俺の愛飲料でもあるコーヒーの粉もちょうど切れかかっていたワケだし、だからそれを買うに行くついでとして買ってきてやるのもまあやぶさかではないとその時は大きな器量を持って承諾したはいいものの、しかし何故だろう、今思い返すとそれはそれなんんだか釈然としない。これってさ、要するに体のいいパシリなんじゃないの？

比企谷八幡ボデイの時もたびたび小町にお願いという名のパシリを請け負わされたことが幾度かあったが、だからといって身体が変わっても妹からパシられるとか俺いじめられっ子気質ありすぎでしよ。パシられ過ぎて光速の足とか会得しちゃうレベル。あとは俺を保護してくれるような美人で幼馴染みなお姉ちゃんキャラが居て

くれれば言うこと無しである。

ホント、誰か生活ごと俺を保護して養ってくれるような相手は居ねえかなあ……。

俺にとつては輝かしい未来予想図にドロドロと想いを馳せる。馳せていたらいつの間にか目的地のコンビニへと到着していた。お目当てのブーツを買い、ついでに新刊のコミックスを物色し終えてから、今度は復路を歩く。

と、その道中で俺はある建物へと目を止めた。

「……新装開店」

看板にデカデカと印字された英字の羅列。その下には祝だの祝だのと書かれた仰々しい花輪が軒先に幾つも飾られている。それは記憶にも新しいミスタードーナツの店舗だった。

開店セール！と入り口に貼られた貼り紙と手元のコーヒーの粉とを見比べる。そういえばさっきの店でなにかしらのお茶請けを買うのを忘れてたな。

一瞬の黙考。飯を食べたばかりではあるが、けれど甘いモノは別腹だつてよく言うもんね！

決断し、開いた入り口から放たれた甘い匂いに誘われるように俺はフラフラと店内へ。時間が時間なのか、都合のいい事に店の中はガラガラだった。

さて……ど・れ・に・し・よ・う・か・な？

眼前の甘味にウキウキワクワクと胸を踊らせながら、俺はケースの中身を品定めしていく。

やっぱりメジャーにポン・デ・リング？いや、だがフレンチクルーラーも捨てがたい。しかしオールドファッションこそが王道なのではないだろうか……。

思考に思考を重ねる。そして俺の中の俺会議が閉幕し、ではさつそく注文をしてやろうじゃないかとカウンターに向け俺が顔を上げた……その時だった。

俺以外誰も居なかったはずの真隣から、その声は聞こえてきた。

「おい、お前」

敵かでいて、だがその反面で稚拙さも感じさせる声。

グイツと引つ張られる左腕の感触につられてそちらに視線を向けた俺の目の前には――

「……!!」

――幼女が、居た。

金髪の、たぶん七、八歳くらいのまごうことなき外人幼女が冷めた瞳で俺を見上げていた。

絹糸のようなその腰まで伸びた金色の髪をゆらりと揺らし、幼女は静かに口を開く。

「僕はゴールデンチョコレートが食べたい」

「……はあ？」

意味不明な催促、いや、幼女風に言うならばおねだりか？

周囲には俺以外の客は誰一人として居ない。つまりこの、こまっしやくれたような幼女の言葉は確実に俺へと向けられているわけだ。ふむ、アレだな……唐突すぎて意味が分からねえ。

つーかなんで俺は見も知らぬ幼女にいきなりたかられているんだろうか。

「おい、だから僕はゴールデンチョコレートが食べたいと言っておるだろうが。ポーつと間抜け面を晒しおって。ちゃんと聞いておるのか、貴様」

対応に困り黙っていたら罵倒が飛んできた。

幼女に罵倒されるとか。よその業界ではご褒美かもしれないが俺の業界ではただそれは腹が立つだけである。しかし、相手は年端もいかないT H E幼女。俺は寛大な心を持って大らかに対応する。

「……おい、ちびっ子。お前、お母さんかお父さんはどうした。一緒にじゃないのか。もし一緒だとしたらその言葉は俺ではなくお前の保護者に向ける。いいか、第一だな、この国には知らない人からは何一つとして物をもらうなという代々と受け継がれし神聖なる風習が――」

「あとはエンゼルフレンチも食べたい。それとポン・デ・リングも忘れずに」

お願いというよりかはむしろ命令に近い偉そうな口調。そんな傍若無人にも過ぎる振る舞いに俺は軽くイラつとしつつ、仕方がない、ここは年上としての尊厳とやらをこのクソガキに見せつけてやるべきだろうと正面から向き直った所で……その幼女は淡々とした表情で唇を動かした。

「どうでもよさそうに、感情のこもらない口調で、

「ーードーナツ三つ。それが、儂が貴様らに手を貸してやる条件じゃ。この儂の力を借りるのにたったそれだけの対価で済むんじゃないからな。どうじゃ、安いもんじゃろ？のう……怪異に憑かれた哀れな小童よ」

再び向けられた冷たく、鋭い眼差し。俺は身体を射抜かれたような感覚に陥った。脳が揺れる。幼女が口に出したその怪異という言葉が、俺に多大な衝撃を与えていた。

幼女は喋る。依然として不遜な態度で、

「かかつ、契約成立じゃな。存分に感謝しろよ、小童。鉄血にして熱血にして冷血の吸血鬼、伝説の怪異であり怪異殺しとまで呼ばれ畏怖されていたこの儂と出会えたことをな」

ーー忍。

何故か、脳裏にはその言葉が浮かんでいた。

十四話

社会の喧騒から切り離された静かな空間に少女と二人きり……何故だろう。こうやって状況を言葉にしてみるだけで犯罪臭が刑事事件レベルにまで迸る。おかげで、俺は周囲の視線を気にしながら黙々とドーナツを齧る羽目になってしまった。もしも少女誘拐犯とでも勘違いされてしまったらマジで笑えない事態へとなりかねない。それでも僕はやってない、というか本当にやってないまである。

そういえば、あの映画の主人公って冤罪で捕まったんだよね……と、作品の内容をうる覚えに思い出しつつ、俺はカピカピに乾いた口の中を淹れたてのコーヒで潤した。そして、目の前の少女に視線を向ける。

少女は俺には目もくれず、ひたすらにトレー上のドーナツを貪っていた。

「がっがっ。むしゃむしゃ。パクパク。」

「……………」

いや、いくらなんでも食べるのに熱心過ぎるでしょ……。

俺の姿が見えてないどころか、むしろドーナツ以外には何も見えていないと言わんばかりの食べっぷりである。

先ほどの威圧的な態度も今ではもはや見る影もなく、そこに居るのはただの食い意地の張った金髪少女だった。

「むしゃパクがっ」

「……………おい、お前」

「んあ?」

幸福感に満ちていた表情から一転、少女は俺の問いかけに気分を害されたようにジロリと上目遣いにこちらを睨んできた。『邪魔すんな殺すぞ』とでも言いたげな眼差しだ。ドーナツへの愛情が深すぎる。どうやら、この少女の中では『ドーナツ<<<<<越えられない壁<<<<俺』という図式が成り立っているようだった。

「……なんかドーナツにすら負ける俺って一体……………」

「……………なんじゃ、小僧。儂の至福の時を邪魔するとは随分な無作法者

じやの。八つ裂きにされたいのか」

わりとマジな殺意。俺としては死因：ドーナツだけは是が非でも避けたい。

とりあえずは好感度を上げることから始めた方が良さそうだな。

「……俺のオールドファッシュョンもやろうか？」

「おおつ、お前案外良いやつじやの。褒めてつかわそう」

ドーナツ一つで褒めてつかわされてしまった。

好感度上がるの容易すぎるだろ。チョコロインにもほどがある。

そうして、俺のトレー内にあつたオールドファッシュョンが一瞬にして幼女の胃の中に収まったところで、幼女は親指と人差し指をペロリと舐めてから、ようやくまともに俺の方へと顔を上げた。

「うむ。美味かった。実に美味かった。不満があるとすればそれはちと数が少ないことぐらいじやが、まあ儂の口から三つでいいと言つた手前、ここは仕方ない。あとはマフィン二つだけで我慢してやろう」
「ぜんぜん我慢出来てねえ……」

そもそも今さつき俺の分まで食つたばかりでしょ？尊大を通り越してマリーアントワネットの境地にまで達してるんじゃないのか、この幼女。

ドーナツが無ければマフィンを食べればいいじゃない、とか今にも言い出しそうな金髪ロリ娘を前に、俺は吐き出しそうになった溜め息をこらえてコーヒーをもう一口。

間をおいて、本筋へと話を戻した。

「で、いい加減食い終えたなら俺の質問に答えてもらいたいんだが」

「マフィン」

「……………」

どうやら、さっきのはマジで言っていたらしい。

仕方なく二種類のマフィンを追加購入し、献上する。幼女は生肉を前にしたドーベルマンのように勢いよく獲物にがぶりついた。

「むぐむぐ……………して、儂に聞きたいことというのは……………もぐもぐ……………
なにかの？」

「それは」

マフィンを貪りながらの言葉に、俺ははたとして閉口する。確かに聞きたいことはそれほど山ほどある。

この幼女の正体、俺が憑かれてるとかいう怪異とやらの正体、この幼女と阿良々木との関係——解らないことは山積みで、ハッキリ言っ
てしまえば知らないことの方が多いくらいだ。

思考を働かせる。

そんな解らないづくしの中で、しかし今もつとも俺が知りたいこと
と云えば、それは……

「……本当に、お前の力があれば俺は元の身体に戻れるのか？」

「ふんっ。なんじゃ、そんなことか」

幼女は投げかけた俺の問いかけを鼻で笑う。

そして食いかけのマフィンを口の中に放り込むと、相変わらずの爺
口調でもぐもぐと言葉を発した。

「うぬの身体が戻るのかという問いに対する答えならば応じや。しか
し、儂の力で戻せるのかという問いには儂は否と答えよう」

「……？」

尊大にワケの解らないことを言ってきた。

その、つまりだ。

「結局のところ、お前の力ではどうしようもないってことか？」

「たわけが！」

「痛ッ!？」

右足の甲を突き抜ける痛み思わずシャウト!!

見れば、幼女のかかどが深々と俺のスニーカーに突き刺さってい
た。

「儂を見くびるなよ、この小童が。儂に出来ないことがあるとすれば、
それは精々が太陽を粉々に粉碎することぐらいじゃ。それに比べれ
ば、うぬの身体を元に戻すことなど赤子の手をヒネるよりも簡単なこ
とじゃわい」

「てんめえ……っ、じゃあ、さっきの言葉はどういうことだよ」

「どうもこうもないわ。言ったじやろうが。うぬには怪異が憑いてお
ると。その怪異が影響して——つまりは怪異によって発生した現象

を無かったものとする事は儂には出来ん。儂はただ、その元凶となる怪異を喰らうだけじゃからな」

「……喰らう？」

「ああ、このようにな」

言つて、幼女は最後に残っていた俺のエンゼルフレンチを自らの口の中に放り込んだ。

それから二回、三回と咀嚼し、胃の中に飲み下す。

「うぬに幸福感を抱かせたエンゼルフレンチを、儂はこうやって食すことが出来る。だが、だからといってうぬの中に芽吹いた幸福感を喰らうことは出来ん。今の状況をわかりやすく説明するとすれば、つまりそういうことじゃ」

「……!!」

そうか、つまり……どういふことだよ。

ただ単に俺のドーナツがかすめ取られたことぐらいしか理解出来ない。というか説明するだけだったら別に俺のドーナツを食べる必要はなかったのでは。

「はあ、まだ解らんのか？ やれやれ、これだから頭の回転が鈍いやつは嫌じゃ。罰としてもう三つドーナツを買ってくることを命じる」

「いや、大丈夫だ。解った。ただ単純にお前がドーナツを食べたいだけだという事がよく解った」

口の端からヨダレを垂らす幼女を前に俺は完全に白けた気分でドツカリと背もたれに身体を預けた。

ダメだ、この幼女ぜんぜん役に立たない気がする。

そもそも本当にこいつに現状をなんとかするような力があるのかよ。今のところ、偉そうな口調でドーナツを大喰らっている幼女にか見えねえんだけど。

「む。なんじゃい、その『こいつマジでいい身体してるぜ、グヘヘ』みたいな腐った目は。うぬ、もしやロリコンか」

「誰がロリコンだコラ」

風評被害もいいところである。

というか誰もそんな目で見てねえよ。第一、腐ってるのはデフォル

トだ。

「もういい。食うとか食わないとかはいまいちよく解らんけど、とにかく俺の身体を元に戻すことは出来るんだろ。だったら、さっさと戻してくれ」

「いや、残念じゃがそれは無理な相談じゃの。少なくとも今はな」
「……………」

「かっかっか。そんなに熱い眼差しで見つめられても困るのお」
愉快そうに幼女は笑う。対して、俺は全然愉快的気分ではなかった。

苛立ちを抑えることなく立ち上がる。そして、席を離れようと後ろを振り向いたところで、

「――孤毒蜘蛛」

幼女の声に俺は動きを止める。

もう一度、振り返ると幼女はその口元をニンマリと弧をえがいた形に歪めていた。

「まあ座れ、小僧。今からうぬにタメになる話をしてやろう」

「孤毒蜘蛛――それがうぬに憑いておる怪異じゃ」

再び幼女とテーブル越しに向かい合った形で。幼女は、年不相応な重々しい声音で語り始めた。

「弧毒蜘蛛は人の心に宿る怪異でな。そうして糸を張り巡らせながら、自らの餌――うぬらで言うところの負なる感情、『毒』を糧とし、存在しておる。存在し、そして寄生する。人の心の奥深くに」

「……………心に、寄生？」

「そうじゃ。早い話が寄生虫じゃな。しかし本来はある程度の『毒』を喰らったのちに勝手に消滅するものなんじゃが、極稀に、そのまま消

えず宿主の内に巣を張ることがある。そして、大概にしてそういう場合は、宿主の心に深い闇がある時に限るのじゃ。根深く、深い、深淵の闇がな」

「……………」

俺は真一文字に口を閉じ、押し黙る。

思い当たる節がないでもない。深淵というには器もスケールも小さ過ぎる、人によつてはほんの瑣末な事ではないようなものではあるけれど、しかし、確かにそれは俺にとっては今も時折に心を蝕む毒であり、闇であつた。

遙か昔に蓋をした記憶の箱から洩れ出てくるうすら暗い感情。

それを再び固く閉ざし、俺は引き結んだ口元をゆっくりと解いた。

「……………解つた。その弧毒蜘蛛だが、俺に憑いている怪異だということとは、まあ、理解は出来た。けど、それでもまだ解らないことがある。その蜘蛛が毒を喰らい、俺の中に巣を張つたとして、だからって何で俺と阿良々木が入れ替わつたんだ？」

俺の中に蜘蛛が寄生しているのだとー改めて言葉にしていると嫌悪感がやばいなーこの少女は言ったが、しかしそれはあくまでも俺個人だけの話である。阿良々木はなにも関係がない。そんな関係のない阿良々木が俺と一体、どうして、どのようになぜ入れ替わつたのか……………その謎だけが絶対的に解けなかった。

少女を見る。

少女はカカツと短く笑い、そして一つ間を空けてから、端的に答えを示した。

「わからん」

「……………は？え、なに？」

「だあかあらあ、わからんと言つとるじゃろ！儂が知つておる弧毒蜘蛛は細々と餌を喰らうだけの矮小な怪異でしかない。だから、なぜうぬとあやつが入れ替わつたのかは儂も知らん。……………少なくとも、あのアロハの小僧は弧毒蜘蛛にそんな珍妙な力があるなどとは一言も言つておらんかつたしの」

ふんつ、と。何故か偉そうに鼻を鳴らして、少女は手もつけていな

かったオレンジジュースをズズズーと一息に飲み干した。

俺は……完璧なまでの脱力状態である。

後半の方はボソボソとしていたせいで聞き取れなかったが、だがしかし、声高々に発せられたそのわかりません発言だけはしっかりと聞き取れることが出来た。ゆえの、脱力。

……無いわ。マジで無いわ。

その開き直りは由比ヶ浜に負けず劣らずの残念っぷりだった。とはいえ、原因は解らずとも元凶の正体は解ったわけだ。

つまり、後はその蜘蛛とやらを除霊するなり追い払うなりすればいいだけだという事が解ったのは確実に大きな収穫であっただろう。

「いんや、それはどうかの」

とも思ったのだが。

そんな期待を崩したのはどこか投げやり気味な少女の声だった。

「さっきも言ったが、うぬらの入れ替わりはあくまでも怪異が引き起こした現象じゃ。要するにうぬらを元に戻すことが出来るのもその怪異のみということになる。そのことを鑑みずただ怪異だけを祓っても結果は歴然じやろう。まあ、万が一ということもあるにはあるのかもしれないが」

その可能性に賭ける賭けないかはうぬら次第じゃの、かかつ。

そう嘲るように笑い、少女はどこか試すような視線で俺を見る。いや、試すようなではなく、事実試されているのだろう。

俺がどのような答えを出すのかを。少女はジツとその大きな双眸を俺に向けたまま、沈黙するだけだった。

俺は、考える。

考えて、思考して、慮って。

そしてー

十五話

「ーいや、やめとく」

どう考えてもやはり答えは否だった。

少女は目を細め、悪意をまるで隠そうともしない態度で鼻を鳴らす。

「ふん、やはり臆したか。つまらんとう」

「つまるとまらないの話じゃねえんだっての。第一、どう考えても分の悪過ぎる賭けであることは明白だろうが。そんな危険な綱渡りでこの先の長い人生を棒に振ってたまるかよ」

「かかつ、なにを言う。人の生なぞ所詮は細く儂い蠟燭の灯火のようなものではないか。瞬きをする間に終わってしまうような短きものじゃ。だからこそ、人はその短き時を少しでも長く輝かせようと醜くもがき、躍起になるんじゃないやろう?」

「生憎と俺は生まれながらの日陰者なんぞな。馬鹿やって目立つぐらゐなら、細々と裏方に徹して事を進めるほうが性には合ってるんだよ」

「……ほう。日陰者、のう」

それはどこか愉快げな笑みだった。

ガジリと、紙コップの中の氷をひと囓り。そして少女はぴよいと椅子から飛び降りると、さっさと俺の真横を通り過ぎる。

「興が冷めた。腹も膨れた。ちゅーわけで、ほれ、小僧。帰るぞ」

「帰るって……っ、ちよ、待て!」

しかし、静止の声も虚しく少女は身勝手極まる足どりで店の外へと出ていった。

慌てて続く俺。月明かりがささやかに照らす夜道の先へと声を向ける。

「お前、まさか俺ん家に泊まる気じゃ……!?!」

見知らぬ少女を自宅へと連れ帰ってきた男子高校生の凶、という確実に社会的にギリギリアウトな光景を思い浮かべながら言葉を向け

た先には、だが、なにもない薄闇がただようだけだった。あのあざやかな金髪はどこにもなく、その場には俺一人だけがぼつんと取り残される形となる。

そうして予期せぬ少女の消失に呆然としてしていると、不意に頭の中を声が響いた。

『ーイトを辿れ。頭の回転が鈍い愚かで残念なうぬに、儂からの最後の助言じゃ。後はうぬらだけで何とかせい。じゃあの』

声が止む。

しばしの間をピクリとも動けずに固まる俺。やがて、ある程度の心の整理がつくようになってから、俺は天を仰いだ。

「……もう材木座を笑えねえな、これは」

こうして、非日常系ファンタジーな世界へと俺は片足を突っ込んだのだと。

今この時になって、ようやくのことその事実を実感した。

仕事終わりのサラリーマンのごときクタクタな足取りで玄関をくぐると、阿良々木（妹）が何故か某拳王様のような仁王立ちで俺を待ち構えていた。

ギラリと鋭く光る双眸。今にも剛掌波を打ち出さんばかりに腰だめに構えられた右手が、寸分の狂いもなく俺の顔面へと突き出された。

「妹ちよーっぷー！」

「うをっ!?!」

真っ直ぐに伸びた二指が両目玉に迫る。その突然の襲撃を俺はギリギリ間一髪のところまで身体を捻って回避した。

一瞬の攻防。

のち、

「ちっ」

「あからさまにも過ぎる舌打ちだった。

チョップとは名ばかりの凶悪なサミング攻撃を行った直後だというのに、そのキチガイはまるで悪びれもせず、全然可愛くない上目遣いで俺を見上げている。むしろ、ガン付けされているといった方がいいかもしれない。九十年代のスケ番かよ、お前は。

「あは、お帰りなさいお兄ちゃん。随分と帰ってくるのが遅かったんだね。そのせいで月火ちゃんは未だ歯も磨けないままにずっと待ちぼうけだったよ。このままだともしかしたら虫歯になっちゃうかもしれないし、あわよくば近所でも絶賛されている月火ちゃんの綺麗な歯並びまでもがダメになっちゃうかもかもしれないね。ねえ、もしそうになったらお兄ちゃんはどう責任取ってくれるの？どう責任取って死んでくれるの？ねえ、お兄ちゃん、ねえ」

「……………」

デビルレディ、再臨。

ツンデレハッピーENDかと思ったらヤンデレバッドENDでしまったみたいな心境に陥りながら俺は壁際へと後ずさる。

目が怖い。それと依然として真っ直ぐ伸びたその指がすごい恐怖。あと、あわよくばの使い方間違ってるから。お前の存在ぐらい間違ってるから。だから今すぐこの場から消え去れ邪気退散！

あわよくば本当に消え去ってくれないかな、とか考えながら俺は咄嗟に右腕を突き出す。

阿良々木（妹）は突き出されたソレに視線を移すなり、一転してきりりと目を輝かせた。

「うわあ、ミスタードーナッツだ！」

「…………セールやってたから帰りがけに買った。食うか？」

「食う食う！なーんだ、遅れたのってそのせいだったんだね。まったくもう、お兄ちゃんも早くその事を言ってくれば私だって目を潰して失明させようとか思わなかったのにー」

ルンルン気分で悍ましいことを口にするキチガイ。

こいつ、本気で潰しにかかったのか……。あと女の子が食う食うとか言うんじゃないやありません。まあ故意に人を失明させようとした奴のことを女の子と定義すべきかどうかは微妙なところだけどな。むしろ俺なら悪魔超人と呼ぶ所だ。

半ば無理やりにドーナツの箱をひったくられながら、俺は靴を脱ぎ捨て家にかかる。そして、さつきとリビングへと向かおうとしていた阿良々木(妹)の背中に言葉をかけた。

「羽川とあら……比企谷兄、はどこ行った？」

「うん？ たぶん、羽川さん達なら二階に居るんじゃないかな？」
「そうか」

買ってきたコーヒーマグの粉やら歯ブラシやらをついでに阿良々木(妹)に預け、俺は階段を上がる。

すぐ間近の扉、小町の手によって書かれた『お兄ちゃん部屋』という張り紙がなされたその扉を開くと、そこには阿良々木(妹)が言った通り、阿良々木と羽川の二人の姿があった。

「あ、お帰りなさい」

「比企谷か。なんか下でドタバタしてたようだけど、なにかあったのか？」

「……いや、別になんも」

お前の妹の奇襲に遭っていた、という事はここではあえて伏せておく。その前に、この二人には話しておかなければならないことがあった。

「さつき……家に帰ってくる前のことなんだけどな。自分のことを吸血鬼とか抜かした金髪の少女と話してきた」

「……!？」

瞬間、阿良々木の表情が驚愕へと変わる。その横に座る羽川の真剣な眼差しが、先を促すようにジッと俺に向けられた。

俺はあつたことをそのまま口にする。

孤毒蜘蛛。

人の闇を喰らう怪異。

イトを辿れ。

おおまかに、要所要所を思い出しながら、そうして語り終えた頃には二人共に難しそうな顔でその視線を床に落としていた。

ぽつりと、羽川がつぶやきのようなものを口から漏らす。

「イト……つまり、蜘蛛の糸という意味かな？うーん、ヒントとしては十分ではあるけれど、でも、孤毒蜘蛛の実態を知らない現状で解ることとはまだなにもないかな」

「だな。そもそも、俺からしてみればそれが本当に助言なのかどうかも怪しい所だけだ」

忍ーやはりそれが金髪幼女の名前であるらしい。しかし、一度話してみた限りでは単にドーナツ目当てで適当なことを言っていたよな気さえする。

この入れ替わり現象のこともよくわからんとか言ってたし。信用に足る奴であるかと言われれば非常に微妙な所だ。

「……いや、そこは問題ない。あいつはー忍は余程のことがない限りは嘘をつかない。だから、あいつが言ってたことは、多分、全部本当のことだよ」

けれど阿良々木は言う。

先ほどまで萎びていたのが嘘のように瞳に光を灯して、阿良々木は再び口を開いた。

「だからこそ、僕達が今考えるべきなのは言葉の真偽じゃなくて、その言葉が意味するところだろう。かくいう僕もイトを辿れという言葉にはなにも心当たることが無いけれど、それが忍の言葉であるならばー僕は、全力で忍を信じるだけだ」

「……………」

ー馬鹿正直にも過ぎる、と。

言うのは簡単だったが、俺はあえて口を閉ざした。

阿良々木と、忍とかいうあの幼女との間になにがあつたかはやはり俺には解らない。

だが、その一方的といつてもいい阿良々木の、幼女に対する信頼に、俺は少なからず羨望のような感情を抱いていたようにも思える。

他人を信じるということは自分を信じること以上に難しいことだ。

だから、自分さえ信じる事が出来ない俺にとってそれは眩しく映るものだった。

眩しくて。

眩しいからこそ目を背けたくなる。

闇が光を嫌うように。影が光を恐れるように。

俺は、阿良々木のその意志に応えることもなく、ただ無言で口をつぐみ続けるだけだった。

「……うん、そうだね。私も忍ちゃんの言葉を信じるよ。ねっ、比企谷くん」

「ん。ああ、そうだな」

機械的に言葉を返し、浅く息を吐く。

なにはともあれ他に出来ることがあるわけでもないんだ。

イトを辿れ。

いまいち意味は解らんが、今はその言葉を頼りに動くしかないだろう。

「とりあえず、私は持ってきた本にもう一度目を通そうかな。一応、怪異に関するだろう本を三、四冊ほど図書館から借りてきてたから。もしかししたら、その中に孤毒蜘蛛に関する記述が書いてあったかもしれないしね」

「じゃあ、俺はネットで調べてみる。伝承とか、都市伝説とか、そういったものを中心に探せばいいんだよな？」

「うん、お願いするね。あつ、ついでに蜘蛛に関するものにも目を通しておいてもらえるかな？」

「わかった」

「……えっと、じゃあ僕は」

それぞれが各々に行動を開始する。

俺に憑いている怪異とやらの名称も解った。イトを辿れという曖昧ではあるものの、一応の行動指針も定まった。ならば後はいかに早く多く情報を収集するかどうかだけである。

幸いにも人手はあるんだ。

後は孤毒蜘蛛についての記述を探すだけの簡単なお仕事……そう

思っていた時期が僕にもありました。

その扉をノックする音を聞くまでは。

「お兄ちゃん。コーヒー淹れたけど飲むー?……って、あ、ごめん。もしかして勉強中だった?」

「あ、いや、そういうわけじゃないんだけど……」

扉の先から現れたのは小町だった。

分厚い本を開き、羽川と顔を突き合わす阿良々木はどこかやりずらそうに小町に困ったような笑みを向ける。

そんな阿良々木を、やはりどこか気味悪げに見ながら（それはそれで俺が傷つくんだけど）小町は幾らかトーンを落とした声音で、

「……まあ、そうじゃないなら別にいいんだけどさ。でも夏休みだからってあんまり夜更かしとかするのもダメだよ?それに確か明日は朝から部活のミーティングがあるんでしょ。だったら、今日は早い所寝た方がいいんじゃないの?」

「ああ、わかったよ。わざわざありが……ミーティング?」

唐突に阿良々木の視線がこちらへ向いた。その視線を受け、俺は咄嗟に思考を巡らせる。

部活?……部活!?

「うん?もしかして、違ってた?私は結衣さんから明日と明後日に部活動があるって、そう聞いてたんだけど」

小首を傾げる小町。きよとんとした表情の羽川。小町にぎこちない笑みを向けながら、依然としてチラチラと横目で俺にフォローを要請する阿良々木。

そんな三者三様の態度を前に、俺は頭を抱えたい気分のまま人知れず歯噛みする。

忘れていたこと。

今の今まで、さっぱりと記憶から消し去っていたことがたつた一つだけあったことを、俺は今このときになって思い出した。思い出してしまったのだ。この先に面倒事が待ち受けていたことを。

そうとも知らずに小町はのんきに言う。

気を取り直したように、さっぱりとした口調で、

「いやあ、それにしても夏休みまで部活とは、青春してますなあ、お兄ちゃん。まあ小町はお兄ちゃんかなにをしに行くのかは知らないけど、とりあえずは結衣さんと『雪乃さん』に迷惑かけないようにしてよね」

さんさんと。

明るい百パーセント小町スマイルを前にしながら、しかし、俺の脳裏に浮かぶのは氷点下零度の冷たい微笑だった。

雪ノ下、雪乃。

それは今、俺が最も関わりたくない、関わり合いになっではいけない氷のような女の名前だった。

十六話

期末試験も終わり、そして長期休暇をすぐあとに控えた、恐らく学生が最も墮落するだろう時期。それは夏休みを迎える数日ほど前のことだった。

例によって放課後を無為な部活動によって時間浪費しつつ、先日買ったばかりの少年漫画をパラパラとめくっていた最中に、その問答は行われた。

「……高校見学の準備、ですか？」

「ああ、その通りだ」

涼やかな声に凜とした答えが返る。

そこには奉仕部部长という一文の得にもならない肩書きを持つ雪ノ下雪乃と、奉仕部顧問という数百円ほどのお手当しかつかない肩書きを持つ平塚先生が向かい合って視線を交わしていた。

その横、雪ノ下の隣では由比ヶ浜がほけーっとした顔で二人を眺めており、そして俺は漫画の中の主人公とライバルとの激闘の行く末を案じている。

主人公の究極必殺技『爆碎拳（バーストナックル）』に『幻霧壁（イリュージョンフィールド）』を展開するライバル。

果たして、その結末はいかに……!!という緊迫した場面に少しばかり厨二心をくすぐられながらまた一ページをめくったところで、溜め息まじりな平塚先生の言葉が後に続いた。

「まあ、有り体に言えば雑用だよ。机を出したり、その上に冊子を用意したり。後は掃除がメインになるだろうな。その作業が私からの君たち奉仕部への依頼だ」

「……なるほど。用件は大まかには把握出来ました。けれど、承服はいたしかねますね。そもそも、その依頼はこの部活の活動趣旨にはまるでそぐわないようにも思えるんですが」

冷静なまでの雪ノ下の言い分に、平塚先生は虫歯をこらえるように顔をしかめる。ついでに言えばライバルも歯を噛み締めて主人公の

必殺技をこらえていた。

「だろうな。私も上にはそう言ったよ。だが、どうも教頭も校長もこの奉仕部をボランティア部かなにかと勘違いしているようにね。それでなしくずし的に協力を取り付けられてしまったというわけだ」
「つまり、この依頼は平塚先生ご自身からの依頼ではなく、扱いとしては学校側からの協力要請という形になるわけでしょうか？」

「……そうだな。いや、すまない。本来ならば生徒会と教師陣だけで人手は足りていたはずなんだが……その、色々あってな。外部からの助けも必要となつてしまったんだ」

色々あって。

その言葉を言う時だけ、平塚先生の声音がどこかうらめしそうなものに変わっていた。

生徒側の誰かに突然の家族旅行が入ったか、もしくは同僚の誰かが新婚ハネムーンにでも行つてしまったのか。

なんだろう、そう考えると独り身の平塚先生がすごく可哀想に思えてくる。今だけは新婚とかハネムーンとか結婚とか、そういう言葉は控えておいた方がいいかもしれない。下手をすれば言葉にした瞬間に爆碎拳（バーストナックル）が飛んでくるまでである。

それはそうとライバルの第三の目が開眼して主人公の必殺技を相殺したよ！

なにこれ超厨二病！

「だが、念のために言うが今回の件はなにも強制というわけじゃない。もしも外せぬ予定があるのであれば、無論、不参加という形を取つてもらつても構わないぞ？」

「いえ、私は特には。けれど由比ヶ浜さんはどうかしら？ 確か夏休みの間に旅行に行くという話は聞いていたけれど」

「ほへ？……あ、ううんっ、大丈夫！ 旅行は全然先のことだし、それにその日だったら他にはなんにも予定入つてないよ！」

「そう、よかった。ではそういうわけですので……」

「おい、ちよつと待て」

平然となされたスルーに思わず顔を上げてしまっていた。

そういうわけってどういうわけだよ。というかなんでこの部長様は由比ヶ浜には予定を聞いて、俺には聞く素振りすら見せようとするいの？もしかして恥ずかしがり屋なの？

……いや、確実にそれは無いけどな。

「あら？居たのね、比企谷くん。存在価値が薄すぎてまるで目に入っていないかったわ」

「密かに俺の価値を大暴落させるのとかやめてくんない？つか、これでも希少価値は高い方なんだぞ。クラスで友達居ない奴とか俺一人ぐらいだし、なんなら今までの人生でも友達出来たことがないまである。もはや、ぼっち度合いでいえば千人に一人の逸材とさえ言ってもいい」

「……いつものことだけれど、何故そういう時だけ妙に自慢気なのかしら」

異臭を放つ雑巾でも見るように眉根を寄せながら、雪ノ下はドン引きしていた。

その冷やかな視線が『なんなのこいつもう死ねばいいのに』と如実に物語っている。

「どうせ、貴方にとっては休日も平日も同じようなものでしょ。将来設計すらマトモに立てれない人に、外せぬ予定なんてものが存在するとは到底思えないのだけど」

「失礼な。俺にだってちゃんと予定はあるぞ。例えばだな……」

………

……例えば。

「……借りていたゲームを全クリしなきゃ、とか？」

「あら、聞き間違いかしら？友人が皆無な貴方に遊戯道具を借りる相手なんて一人たりとも居ないはずでしょう？」

ニツコリ笑顔な雪ノ下さん。

俺は返す言葉もなく、無言で再び手元の漫画に視線を落とした。

「ふむ。では、決まりだな。奉仕部参加の旨は私から直接生徒会の方へ報告しておく。詳細は追って知らせよう」

その言葉を最後に、平塚先生は白衣を翻して退室した。

高校見学の準備とか……休みの日にわざわざ他人のために登校なんてどうかしてる。気分は休日出勤を強いられたサラリーマンのようだった。

はあ、どうにかして休めないものかね……。

溜め息を一つ。そして、俺は主人公とライバルが笑顔で握手している見開きを最後に、ソツと本を閉じた。

以上、回想終了。

それら思い出したことを羽川達に話し終えたところで、俺は言葉を切った。その話を今まで黙って聞いていた阿良々木だったが、俺が口を閉じたのを見計らうように、次いで口を開く。

「部活動か……。そういえば何かしらの部活に入っているということ
は聞いていたけど、まさか奉仕部なんて部活に入ってるなんてな。少し、意外というか。素直に驚いたよ」

「性に合っていないってのは自分が一番わかってる。そもそも、強制的に入部させられたようなもんだからな。入部させた本人曰く、問題のある生徒は一箇所に置いて監視しておきたいんだと」

そのわりにはロクに顔も出していないんだけどな、あの先生。

ぼやきは心の中だけに溜め、俺は苦笑を浮かべる阿良々木から、今度は羽川へと視線を移す。

羽川はうーんと唸りながら、瞳を閉ざしていた。

「そつか。……ううん、困っちゃったねえ。由比ヶ浜さんの件もあるし、出来れば阿良々木くん一人で彼女と会うのは避けておきたいものだけだ」

「別に、律儀に参加することもないだろ。今回は場合が場合だし、メールなりなんなりで欠席の旨を伝えとけばいいんじゃないかねえか？」

「ううん、ずる休みはダメだよ。それにこういった事は比企谷くん自身の信用にも関わるからね。ちゃんとしなきゃ」

「……信用、ねえ」

そんなもんは元から無いような気もするけどな。せいぜいが後から小言を言われるか、悪くても平塚先生の拳をくらう程度だろう……。樂觀的な意見を述べてはみたものの、しかし羽川は意固地にも首を縦には振らなかった。

度を越した真面目っぷりだ。しかも、それが本気で俺のことを思っ
ての判断らしいということが余計にタチの悪さを際立たせていた。

つーわけで。

もはや羽川的には部活動参加は決定事項であるらしく、だからこそ話題は自然と参加不参加の有無から、参加時のその他諸々の問題についてへとシフトしていた。

まず第一に目に付いた問題はといえば、それはもちろん――

「阿良々木くんが他の人の前でボロを出さないか、の一つに尽きるわよね」

「……やっぱり、そこなんだよな」

齒にゴムでも挟まったかのような表情で阿良々木はガクリとうなだれる。

今日半日を共に過ごしてみても解ったことだが、多分、阿良々木は元来不器用な奴なのだろう。嘘が下手、ともすれば誤魔化すという行為そのものに抵抗を感じるタイプなのかもしれない。少なくとも、この様では雪ノ下を欺くなんて到底無理、夢のまた夢だろう。あるかもしれない由比ヶ浜の追及にもあっさり折れてしまいそうな程に、それは頼りなさすぎる役者だった。

「やる前から言うのも何だけれど、正直、上手くやれる自信はさっぱり無いな。なんなら比企谷の妹を相手にするだけでも一杯一杯なくらいだ。そんな状況で、僕の知らない比企谷の知り合いだらけの校舎にまで赴くことになってしまったら、それこそ僕のキャパシティオーバーだよ」

「いや、その点に関してだけは大丈夫だ。そもそもが俺を知ってる奴

なんて同じクラスの中でも一人、二人いる程度だろうからな。学年単位で言えば顔見知りどころか、顔さえ覚えられていない自信もあるぞ」

「出来ればそんな悲しすぎる自信は抱かないでおいて欲しい所だけだね……」

羽川からの本気な憐れみの視線がちよつとだけ痛い。

べ、べつに、寂しいなんて思っていないんだからねっ！

「でも、じゃあ他のクラスの人はいいとしても、同じ部活の由比ヶ浜さんともう一人……雪ノ下さん、だっけ。彼女はどうなの。今の阿良々木くんでなんとかやり過ごせるとは思う？」

「無理だな」

即答だった。ちよつと食い気味になってしまった程だ。

由比ヶ浜はともかくとして、雪ノ下には誤魔化しは一切通じない。

嘘も、虚偽も、まやかしも。

雪ノ下雪乃という完璧超人の前では全てが無意味であると断言出来る。

あいつはそういう奴なのだ。

「まあ、つっても流石の雪ノ下も俺の中身が別人と入れ替わってるなんて発想には絶対至らないだろう。性格は多分にアレなやつだが、意外と頭が固いタイプではあるし、基本的に常識外にあるものは全て死ねとか思ってるタイプでもあるしな」

「その論理でいうと僕は真っ先に抹殺対象に入ってしまうんだが……その、雪ノ下ってそんなに怖いやつなのか？」

「怖い。例えるなら、相手が泣いて謝るまで言葉責めを続ける妥協を知らない羽川みたいなやつだ」

「怖えー！超怖えー！」

「ちよつと、ふたりとも……っ！」

羽川、いや、羽川さんの素敵なまでに不穏な笑顔に俺と阿良々木は揃って口を閉ざす。

怖え！超怖え！

雪ノ下よりも冷ややかな笑顔とか初めてみたんですけど!!

「……ん、んん。ともかくだ。雪ノ下の前では下手に取り繕うより、ジツと黙っていた方がまだ良い選択だと俺は思う。あまりに無言過ぎて怪しまれても、最悪寝不足だとか体調が悪いだとか言つとけば一応のスケープゴートにはなるだろうし。後は阿良々木が口を滑らせて雪ノ下に不審感を与えさせなければ何とかなるんじゃないか?」

そもそも、あいつの視界の中では俺はポリバケツとかと同列の扱いだからな。相当に目立つような行動さえしない限り、まあ、大丈夫だろう。

最後にそのような旨を伝える。だが、それでも阿良々木の表情から緊張の色が消え去ることは無かった。

そんな阿良々木の横で一人、羽川はなにかを考えるように床を凝視しながら前髪をイジイジと指で摘んでいる。

やがて、その指の動きが止まった頃になって、羽川は『うん』と小さな呟きを唇から漏らした。

羽川の瞳に強い決心の光が宿る。

「決めた」

「……? 決めたって、羽川、なにを決めたんだ?」

きよとんとした表情で羽川を見る阿良々木。俺もその唐突な言葉に気を留め、羽川へと視線を移した。

そして、俺達の視線を一身に受けた、羽川のその口から飛び出した言葉は――

「あのね、阿良々木くん。私も、阿良々木くんと一緒に比企谷くんの学校に行くよ」

「……は?」

唐突で、やはり突然なものだった。

意図が分からずポカンと口を半開きにする俺達に、羽川はニコリと口元に笑みを浮かべ、そして自信に溢れた口振りで、言った。

「大丈夫。任せて。私に、考えがあるの」

十七話

カチコチと、規則正しくリズムを奏でる音がおぼろげな意識に波紋を打った。

薄く開けた視界の内には、淡い光の靄が広がっている。その靄が、窓から差し込んだ朝日であると気付くにはさほど時間はかからなかった。

ふと真横に目を向ければ、腹をむき出しにして床に転がる阿良々木の姿がある。どうやら、二人して敷き布団も無しにいつのまにやら寝入ってしまったらしい。それを証拠に周囲には本やらなんやらが無造作に散らばっていた。

それらをうつ向きのまま一瞥し、そして若干痛む背中筋をグツとのばしてから、俺は上体を起こす。次いで、時間を確認すべく目覚まし時計に目をやった……その瞬間だった。

床に落ちた時計の先、弛緩した顔で仰向けになる阿良々木の更に向こう側の扉から、突如として轟音と共に二つの影が飛び出てきた。

『おっはよー！お兄ちゃん、朝だよー！』

重なる声に並列する二つの顔。

蹴飛ばすように大きく開かれた扉から現れたのは小町と阿良々木月火だった。そんな騒々しくも鬱陶しい妹コンビの登場に、俺は自然と眉根を寄せる。

……つーか朝からテンション高すぎだろ、こいつら。なんなの？もしかしてエナドリでもキメちゃってるの？

「あれ、お兄ちゃんが起きてる？もうっ、なんで起こす前に起きてるのよ！ほんとごみいちちゃんは空気が読めないんだから！」

「なんちゅう理不尽な……」

第二声から意味のわからない文句を言い放つ阿良々木月火だった。

というか、夜遅くまでせつせと調べものをしていた俺にこのキチ女はなんという言い草だろうか。やはり俺にとつての妹は小町ただ一人である。さあ、真なる我が妹よ！こんな奴は放っておいて、俺の荒んだ心に爽やかな息吹を吹き込んでくれ……!!

と。

寝起きのテンションのせいかな幾分気持ち悪いことを考えながら小町へと視線を向けるが、しかし小町は小町で悪の科学者みたいな悪どい笑みを浮かべて阿良々木の顔を覗き込んでいる最中だった。

その手元にはGABANなブラックペッパーと白い作り物めいた鳥の一枚羽が握られている。

……あの、君は君でなにをしようとしてるのでしょいか、小町ちゃん。もしかしてもう既に阿良々木（妹）の瘴気に充てられちゃったの？ 良くない影響もろに受けちゃったの？

お兄ちゃん、何だかすごく不安。

具体的に言えば今後バットの打ち下ろしで朝を起こされるようになりそうでありかしマジで不安だった。

楽しいな小町、何故かそれに加わる阿良々木月火を横目に、俺は触らぬ神にとばかりにひっそりと室内を脱出、のすのすと階段を降りる。

すると、すぐ眼下でピンクを基調とした見慣れた制服を目撃した。

「ーうんーだから今日はー」

羽川だ。どうやら携帯を片手に誰かと通話をしているようで、こちらに気付いている様子は無かった。

「ごめー戦場ヶ原さー大丈ーーうん、じゃあね」

耳元から携帯を離し、羽川は蝶の羽ばたきのような溜め息をこぼす。それからようやく俺の存在に気付いたようで、はたとしてその顔を上げた。

「わっ、びつくりした！ いつのまにそこに居たの？」

「……あー、悪い。盗み聞きするつもりは無かったんだけどな」

「んん？」

なんのこと？ とでも言いたげに小首を傾けてから、羽川の視線が自分の携帯へと移る。そして「ああ、そのことか」とあっけらかんと言うなり、ニコリとこちらに笑みを向けてきた。

「べつに聞かれてマズイ電話ってわけじゃないからいいよ、気にしてないで。それよりも、おはよう。昨日はよく寝れた？」

「……まあ、ぼちぼちって所だ」

本当は今すぐにも部屋に戻って二度寝をかましたいぐらい眠かったが、しかしついついそんな風に見栄を張ってしまった。

それと、どうでもいいけど上目遣いのまま笑いかけないでもらえない。俺が並みの男子だったら今のだけで速攻で惚れてたまでであるぞ。いや、マジで。

「うん？どうかした？」

「別に、なんでもない。それよりも羽川、昨日の件についてなんだが……」

「あ」

俺が言葉を言い終わる前に羽川はその視線を俺の背後に向けた。つられて俺も振り返る。するとそこには、

「ほらほら、お兄ちゃんつ。シャキツとしなきゃ、シャキツとく♪」

「んー？羽川さんにお兄ちゃん？二人してそんなところだなにしてるの？」

「……………」

きよんとした顔で俺達に無遠慮な視線を向ける阿良々木月火。最後尾でウキウキ声を発する小町。その間に挟まれた中間にはグツグツとした表情で肩を落とす阿良々木の姿が。

恐らく最悪の目覚めを迎えただろうそんな阿良々木に憐れみの視線を向けるべきか、同情の念を向けるべきか、色々と考えた末に俺はとりあえず階段を降りる作業を再開した。

そのままの足でリビングに入り、ソファに腰をかける。と、不意に左肩に柔らかい感触が当たった。そして俺が反応するよりも早く、鈴の音のような声が耳を打つ。

「……話はまた後で、ね」

振り返った時にはもうすでに、彼女はこちらに背を向けていた。

キッチンの奥からは今日も今日とて姦しく騒ぐ妹ーズの声が聞こえてくる。

そんな騒音めいたBGMに人知れず溜め息を吐きながら、俺は一人、休日のお父さんのような心境でテーブルに置かれた新聞に手を伸

ばした。

軽めの朝食を取り、そうして第二次千葉散策へと出かけた小町と阿良々木（妹）を見送った直後のことである。

俺達三人、つまりは俺と阿良々木と羽川は顔を突き合わせて、最後の作戦会議を進めていた。

とはいえ、出来ることといえば事前の打ち合わせぐらいしかない。せいぜいが阿良々木の未だ知らぬ雪ノ下や平塚先生の外見的、内面的特徴を教えたり、はたまた今回の舞台である総武高校舎の大まかな見取り図を書いて見せた程度のもので、やはり特にこれといった対策が出来たわけでは無かった。

昨日、羽川が言っていた考えとやらも、単純に他校からの助っ人という形で阿良々木に付き添うというだけの事であるらしい。

まあ、その辺りは羽川のアドリブ能力に賭けるしかないだろうと。最後にそう結論付けて、俺は手に持ったペンをテーブルの上に置く。

うーん、と。

阿良々木は顔をしかめさせながら、低く唸っていた。

「……なんだろうな。なんだか、準備を進めれば進めるほど緊張が……」

「あつはー、大丈夫大丈夫。そんな固くならないですよ、阿良々木くん。なにかあったら私が全力でサポートするからさ」

「ああ、ありがとう。僕としてはお前が居てくれるという事実だけでも十分心強いよ」

覚悟は決まったらしい。

そもそもが気負い過ぎることでもないというのに。こいつもこい

つで根が真面目というかなんというか。

「まあ、いざとなったらバックれちまえばいいさ。昨日も言ったが場合が場合なんだ。例え直前で逃げ出したとしてもなんの支障もねえよ」

「はは、そう言ってもらえると多少なりとも気が楽になるよ。でも、大丈夫、やれるところまでやってみるさ。僕のせいで比企谷に迷惑をかけるわけにもいかないからな」

「そうやって、あくまでも他人の為にと。」

平然と言い放つ阿良々木の前に、俺は返す言葉に詰まってしまった。

やはりというか。どうやらこいつもまた、羽川と同じでお人好しの部類にカテゴライズされる人種であるらしい。

つくづくやりにくい事この上ない。

どうせなら雪ノ下のように悪意全開で来られた方がまだ答えようがあるってのに……どうにも、身体がむず痒くなって仕方がなかった。

「……ん、まあ……頼んだ」

「ああ、頼まれた」

「うん。じゃあ時間も迫ってることだし、そろそろ行こうか」

羽川の号令に、俺達は揃って玄関へと向かう。

制服姿にローファーな二人は三和土に、対する俺は寝起き姿のまま、ぼそりと羽川に言葉を向ける。

「……本当に良いのか？俺は付いていかなくて」

「あはは、ごめんね。なんか仲間ハズレにしたみたいで」

「いや、別にそんなことは思ってたねえけど……」

「というか人生を通して仲間ハズレ扱いみたいなのなので今更ハズラれた所でまるで気にもならない。むしろ、周りが妖怪ウオッチやってる中を一人人間ウオッチングしてるまであるぐらいだ。」

「……って、じゃなくてだな。」

「わかってるよ。私達を心配してくれてるんでしょ？ホント、比企谷くんは優しいね」

「……別に心配もしてねえよ」

「ふふっ、ツンデレツンデレ。でも大丈夫だよ。私達だけでもなんとかなると思うし、逆に言えば比企谷くんが来ることで余計に怪しまれる可能性が出てきちゃうかもしれないしね。それに、そんな格好で登校するわけにも行かないでしょ?」

グレーのパーカーにジーンズな格好の俺を指差しながら、羽川は困ったように笑った。

……まあ確かに、羽川の言う通りである。こんな格好では校門すらくぐれそうにない。速攻で教師に叩き出されるのが目に見えていた。

「だな。じゃあ、俺は引き続き蜘蛛についての記述でも探しく」

「うん。……あ、そういうえば学校の宿題とかはないの?」

「あるにはあるが、けど今はそんな場合でもねえだろ。まだ夏休みも二日目だし、後でいくらでも取り返しはつく」

「ホントに? 現状解決に精を出すのもいいけど、だからって勉強もちゃんとやらなきゃダメだよ? 学生の本分は勉学にあるんだからね。阿良々木くんも、全部終わって元の生活に戻ったら出来なかった分をみっちり勉強しなきゃね」

「は、はは……そうだな」

引きつった笑いはどう見ても言葉とは裏腹な感情を物語っていた。

とりあえず、心の中で合掌しておく。

がちやりと。扉が開き、熱気と共に強い日差しが漏れ込んできた。

「それじゃあ、行ってきます」

「おう」

短い返事を終え、ゆっくりと扉は閉まった。

一転して静かになる玄関で一人立ちぼうけとなりながら、俺はボソリと一言。

「さて、やるか」

そして、散漫な足取りで再び二階へと足を向けた。

ーピンポーンー

呼び鈴が鳴る音で俺は意識を活字の海から現実へと急速浮上させた。

読んでいた本から視線を離し、脇に置いた時計に目を向ける。

短針はまっすぐと真上を指し示している。いつの間にやら、時間は朝から真昼へと移行していたようだった。

ーピンポーンー

またしても鳴る電子音。

突然の来訪者の存在に、しかし俺は完全なる居留守を決め込んだ。

どうせ扉を開けた先はセールスかなにかに決まっている。おまけに今の俺はこの家において部外者でしかないのだ。つまり対応に出たところで徒労に終わるだろうことは明白の理であり、要するに時間の無駄だという結論が簡単に導き出される。以上、Q・E・D証明終了。

引き続き、俺は活字の羅列へと向き直った。

ーピンポーンー

ーピンポーンー

ーピンポーンー

ーピンポーンー

ーピンポーンー

……が、今回のセールスはやたらとしつこかった。

いつまで経っても泣き止まぬピンポン音に、俺は耳に差したイヤホンの音量を限界にまで上げることで対抗。

けれど、音は止まぬどころか激しさを増し、

ーピーピーピンポンピンポピーピーピーピンポンピンポンピン

ポーンー

「……っ、だあーうるせえ!!」

高橋名人ばりの連打のせいで今にもピンポンのゲシュタルト崩壊

を起こしそうだった。

怒り猛った右手でイヤホンを耳から引っこ抜き、怒髪天を衝く足取りで踏み抜くようにドスドスと階段を降りる。出る気はさらさら無いが、せめてどんなやつが来たのかだけは確認せずにはいられなかった。

玄関口に立ち、ドアスコープを覗く。だが、しかし、そこには誰も立ってはいなかった。

「……………」

気付けばピンポン音も止んでいる。

突然の沈黙に少なからず不気味なものを覚えながら、俺はつい扉を開けてしまった。

蝶番が軋み、日差しが降り注いでくる。急な眩しさに一瞬だけ視界が白に覆われた。思わずつむってしまった瞼をゆつくりと開く。再び開けた視界の先には、いつの間にか一人の女が立っていた。

「あら、こんにちわ。お久しぶりね、阿良々木くん。死になさい」

「……………」

言葉の意味を理解する間もなく。

ガッ、という鈍い音を最後に。

俺は意識を手放した。

十八話

慣れない道を歩き進むこと一時間弱。

そうして僕は、僕達は、比企谷の通う千葉市立総武高校へと訪れていた。

初めての土地、初めての場所ということも相まって、下手をすればこの年で迷子になってしまうのではという危惧さえあったにも関わらず、だがやはりそこは羽川翼というべきか。

まるで淀みない足どりで、なんなら途中途中で小粋な千葉知識を教えしてくれるほどの余裕さえ見せながら、羽川は道一つ間違えることなく僕をここまで道案内してくれたのである。

なんでもは知らない、知つてることだけを知っている彼女ではあるが、しかしその類い稀なる知識量は、どうやらこの新天地千葉でも大いに通用するようだった。

本当に、なんでもそつなくこなす奴だ。

僕なんかにはもつたいないほどによく出来た友人である。

「それじゃあ、まずは職員室に行かなきゃだね」

「ああ、そうだな。えっと、確か比企谷が書いてくれた地図によると職員室は……」

「阿良々木くん、そっちは違うよ。職員室はこっち」

言って、羽川はさくさくと歩き出す。

その様子から見るに、どうやら校内においても彼女のナビゲーション能力は健在であるようだ。

右へ左へと。迷いなく歩みを進めるその後ろ姿を追うこと少し。

羽川の足はある扉の前にして、動きを止めた。

「うん、こここみみたいだね」

見上げられた視線の先、入り口にかけられたプレートには確かに『職員室』の文字が印字されていた。

あまり優等生とはいえない、むしろその対極に位置するような生徒である僕としては、職員室というその名称を前にするだけで憂鬱な気分になったりもするのだが、しかして、そこは品行方正、礼儀正しく

折り目正しい、委員長の中の委員長としても名高い羽川翼である。

躊躇いもなくノックを二つ、そして扉を開けるなり流れるように自然な動作で頭を下げ、

「お忙しい中、失礼します。私立直江津高校よりボランティア活動の一環として伺った羽川翼と申しますが、平塚静先生はご在室でしょうか？」

すらすらと続く文言が浸透するように室内に響き渡った。

部屋の中に居た幾人かの教諭の視線が、ぴしりと背筋を伸ばす羽川へと集まる。

その内の一人、スーツの上に白衣をまとった長い黒髪の女教諭が、羽川に続いて言葉を発した。

「……私が平塚静だ。話は聞いているよ、入ってきたまえ」

「はい、失礼します」

もう一度頭を下げ、次いで羽川は室内へと一步を踏み出した。

続けて僕も職員室の中へと足を踏み入れる。すると、さっきまで平静そのものだった女教諭の瞳が驚いたように大きく見開かれた。その瞳が一瞬羽川へと向けられ、そしてまたすぐに僕の方へと向き戻る。

「……なんだ？もしかして、もう異変に気付かれたとでもいうのか？」

「……これは、驚いたな。電話では伝え聞いていたが、まさか本当に彼女の知り合いというのが君だったとは。てっきり、何かの間違いだと思っていたんだが」

「はあ」

そう言いながら、彼女は動物園のパンダでも見るような物珍しそうな表情で僕をジロジロと眺めていた。

しかし僕は僕で、自分の正体に疑惑が及んだのではないということが解り、ホッと胸をなで下ろす。

電話。

それは恐らく、比企谷家を出る前に羽川が事前連絡としてこの総武高へかけたという、あの電話のことだろう。

極度の緊張でうっかり描写を忘れてはいたものの、そう、確かに羽

川はボランティア参加の旨を電話を介して直接学校側に伝えたということだったのだ。

その内容はもちろんのこと、どうやって交渉に及んだのかも僕は聞いていなかったものの、まあ恐らく、理由や経緯を求められた際に比企谷の――友人の存在を答えに挙げてもしたのだろう。

それにしても友人の正体が僕、というか比企谷だと分かった瞬間の反応が大げさすぎるような気もするが……なんだろう、まさか比企谷のやつ、本当に友達が一人も居なかったりするんだろうか？

だとしたらあまりにも灰色すぎる青春だ。

いや、まあ、ついこの間まで立場がまるで同じだった僕が言うのもどうかとは思うけれども。

「ふむ、不躰だとは思うがどうにも気になってしまっているものだな。年も違う、学区も違えば出身地さえ違う君たちは一体どういった経緯での知り合いなのかね？……まさか、親同士の思惑によりその年にして結婚の契りを交わした許嫁とか、そういう甘酸っぱい間柄ではないだろうな？」

「いや……さすがにそれはいいです」

頭脳明晰、才色兼備でなおかつ一個上のお姉さんと許婚同士とか。しかもそれが羽川翼であるとか。

……あれ、ちよつと待てよ？ひよつとして、そのシチュエーションってめちやくちやに萌えるんじゃないだろうか。

試しに考えてみる。

委員長で、お姉さんで、許嫁な羽川翼がそこはかかない年上オーラを振り撒きながら僕に笑いかけてくる――ああ、なんてことだ。想像して戦慄とする。僕は、とんでもない怪物を生み出してしまったのではないだろうか。

この羽川になら叱られてもいい。いや、むしろ存分に叱られたいぐらいだ！

母性にあふれた羽川に「暦くん」と名前を呼ばれながら叱られる――まさしく、想像を絶する萌えシチュエーションである。

ここに、男心を惑わせる究極生物が誕生したのだった！

「……比企谷。何を考えてるのかは知らんが、しかし、いつにもまして目が腐ってるぞ。しかもキラキラと」

「え?」

「……比企谷くん?」

前方からは呆れられたような視線が。左方からは心底から底冷えしそうな冷ややかな視線が向けられる。

しまった!孔明の罠だったか!……なんて。

つつい思ってしまった僕だけれど、しかし実際にはただ僕の顔が口ほどに物を言っていただけのようだった。

なんなら、口よりも物を言っていたかもしれない。どちらにせよ、羽川の反応を見るに後々に叱られることは確実であるようだ。

確かに叱られてみたいとは言ったけれど。

委員長で、同級生で、僕の大恩人である羽川に怒られるのは本意ではない。普通に不本意である。不本意な本意だ。

とりあえず、この場はこれ以上余計なことーと言って僕自身はなんの行動も起こしてないハズなのだけれどーはせず、大人しくしてしているべきだろうと。

判断し、口をつぐむ。

まあ、若干、時すでに遅しな気がしなくてもなかった。

「……まあいい。君と彼女の関係がなんであれ、現状が人手の足りない中で助っ人は実に心強い。ぜひ、よろしく頼む」

「はい、こちらこそよろしくお願います」

「うむ、いい返事だ。では早速……と、その前に面合わせが先だな。比企谷」

「つ……は、はい」

突然に向けられた言葉に半歩遅れての返事。

うう……駄目だ。やっぱりまだ、他人の名前で呼ばれることには抵抗があるなあ。

「どうせ今から部室までいくんだろう?ならば、羽川も一緒に奉仕部まで連れてって行ってやれ。彼女には生徒会の側ではなく、君達の側で、共に作業に当たってもらうことにする。彼女も、知人がそばに居

た方がなにかと仕事がやりやすいだろう」

「はあ」

「私も後からすぐに行く。雪ノ下にもそう伝えておいてくれ。では、頼んだぞ」

そして、平塚教諭はデスク上に置かれた幾枚かの書類に向き直った。最後に一礼し、僕は羽川の後を付いてそそくさと職員室を出る。

……まずは第一の関門突破、というところだろうか。

結局のところ僕はなにもせず、ただ流れに流されるまま話が終わってしまったという感も否めないが、まあ、結果よければ全てよし。

さあ、というわけで、次は奉仕部の部室に向かおうか！

「ちよつと待って、阿良々木くん」

「……………」

なんて。

勢いに任せて事をうやむやにーもとい、進めようと足を踏み出した僕の背後から制止の声が向けられた。

ギクリ、と。心臓を跳ね上がらせてから、僕は恐る恐ると振り返る。

そこには、満面の笑顔の内に言い知れない圧力を内包させた羽川の姿があった。

「少し、阿良々木くんとお話したいことがあるのだけれど」

「……………」

一難去ってまた一難。

有無を言わさぬその迫力に、僕は怒られた飼い犬よろしく頭を垂れ、黙々と羽川のお説教に恭順するのだった。

校舎二階の渡り廊下を過ぎた先。人気の無いリノリウムの床をいくらか進んだ先に、その教室はあった。

「……ここが、奉仕部の部室か」
奉仕部。

比企谷が属しているという文化系の部。その活動内容や理念、実績などはまるで定かではないにしろ、ともあれ、こうしてたどり着いてしまったからにはそろそろ僕も腹をくくる覚悟を決める時なのかもしれない。

比企谷にはもちろんのこと、彼を慮って行動を取った羽川にも、迷惑をかけるわけにはいかないのだ。

気分一新。

一つ深呼吸し、隣に立つ羽川と目配せあってから、僕はゆっくりと拳の甲を扉にあてがう。

そして二つ、ノックをした。

「どうぞ」

内側からの声に従い、扉を横にスライドさせる。中に入ると僕達に視線を向ける二つの人影が視認出来た。

「……あ」

一つは、由比ヶ浜だった。

僕の姿を確認するなり、彼女の表情に暗い影が差す。そして、すぐさま俯いてしまった。

そんな彼女に僕は――なにも反応を示すことが出来ない。

ただ申し訳ないという気持ちに苛まれながら彼女から視線を逸らし、その隣に座るもう一つの人影を視界におさめる。

――比企谷が氷の女王と表現した女子。

――奉仕部の部長をつとめるといふ、絶世の美少女。

戦場ヶ原のような艶やかな長い黒髪を窓から浸入した潮香る微風になびかせながら、彼女――雪ノ下雪乃は、その大きな瞳を怪訝そうに細めていた。

「……一体、どういう風の吹き回しかしら。人間としての尊厳同様に著しく礼儀の欠如した貴方がノックだなんて。正直に言って不気味で、とても気持ちが悪いのだけれど。もしかして、今さらになって自分が社会不適合者であるという現実を見つめなおす気にならなかった

のかしら？」

第一声から、第一印象をぶち壊しにするような毒舌が飛んできた。それこそ最初期の戦場ヶ原のような歯に衣着せぬ、どころか頬にホツチキス挟むような攻撃的な口撃に、一瞬だけ比企谷の苦虫を潰したような表情が脳裏を過ぎる。

何故だろう。

不意に、やっぱり僕と比企谷は仲の良い友達同士になれるんじゃないのかと。

つい、瞬間的にそんなことを考えてしまっていた自分が居た。

「比企谷くん？人の話を聞いているのかしら？それに、いつまでもそんな場所に立っていられると気が散って仕方ないのだけれど」

「ああ、いや、悪い。すぐ退くよ……って、いや、じゃなくて。えつとー雪ノ下。実は今日は部活動を始める前にボーー俺、の友達を紹介したいんだけど」

「……とも、だち？」

雪ノ下の眉がぴくりと動く。

怪訝そうだった表情は更に険しさを増し、見るからに訝しげなその眼差しが僕を貫くように鋭くなる。

まるで頭のおかしくなった知人を見るようなーそんな視線に少しだけ気圧されつつも、それでもなんとか表面上平静を保ちながら、僕は背後に立つ羽川が部屋に入りやすいようにと一歩横に身体をずらす。と、同時に羽川は動いた。

足を前に踏み出す。

そして、その存在を雪ノ下と由比ヶ浜に確認させるようにもう一歩、身体を前進させてから。

羽川は、物怖じもせず堂々と名乗りを上げた。

「はじめまして。直江津高校からやって来ました、羽川翼といいます。どうぞよろしくお願いします」

十九話

「羽川、翼……？」

がらんどうな室内に四人。それぞれに向かい合った形の中で、雪ノ下のそのつぶやきだけが吸い込まれるように僕の鼓膜を震わした。

僕は不安を隠せず、雪ノ下は継続して怪訝な表情で、そして由比ヶ浜は呆気にとられたように口を丸く開け、けれど羽川だけはごくごく自然体な笑顔を相対する二人に向けている。

そんな混沌とした空間の中、何故か意味深げに羽川を凝視する雪ノ下に次いで言葉を発したのは由比ヶ浜だった。

「羽川、さん？」

「こんにちは、由比ヶ浜さん。昨日ぶりだね。ペットの子にはちゃんどご飯あげれた？」

「あ、うん。それは、大丈夫だったけど……」

途切れ途切れに受け答える由比ヶ浜は、やはり予期せぬ羽川の登場に戸惑いを感じているようだった。

そのやり取りを前に、雪ノ下の視線が羽川から由比ヶ浜へと移る。

「由比ヶ浜さん。貴女、彼女とは知り合いなの？」

「えつと……まあ、そうなるのかな？昨日ちよつとヒツキーの家で話したぐらいなんだけど」

「比企谷くんの家で？」

彼女の視線は次に僕へと向けられた。

問い詰めるようなオーさながら、異端者を前にした審問官のような隙の無い眼差しに、僕はドキリとしながらも、つつい出来そこないの愛想笑いを浮かべてしまう。

しかし、それは比企谷的にはあり得ない対応だったのだろう。

雪ノ下の表情に、まるで隠そうともしない不快感が瞬く間の内に広がっていた。

「……そう。まさかとは思ったけど、とうとう語るに堕ちる域にまで達したようね、比企谷くん。確かに貴方のような人種が女子と関わりを持つには、それこそ第三者の仲介なくしては有り得ないのだろうか

れど。だからといって由比ヶ浜さんをダシにして、それも他校の女子を騙すだなんてね。信じられないわ。犬畜生にも劣る小悪党ぶりね。そんなことまでして生き恥を晒すぐらいなら、もういつそ死んじゃった方がいいんじゃないのかしら?」

「いや、ちよつと待て。今なにか、自分の預かり知らぬ所で取り返しのつかない誤解が生まれたような気がするんだが……」

ダシにしてって。

騙すって。

聞き捨てならないにもほどがある。一体、彼女の中の僕はどんな犯罪計画を実行したというのだろうか。

普通に怖いよ。

何が怖いって、一片の迷いもなく部活の仲間を犯罪者に仕立て上げた雪ノ下の思考が一番恐ろしい。こいつ、ある意味で、そして悪い意味でもやっぱり戦場ヶ原に似てるんじゃないのか?

推察がとんでもない飛躍を見せる所とか。

躊躇いもなく毒舌を吐く所とか。

お世辞にも褒められたものではない部分ばかりが、見事なシンクロニシテイを奏でていた。

……まあ、文房具を手に襲撃する所とかは多分、あいっだけのマイノリティーであるとは思うけれど。

というか、そんな所まで似ていてたまるかというのが僕の本気の本音ではある。

「あのさ、雪ノ下。とりあえずその物騒極まる見当違いな見解を取り下げてはもらえないか?羽川は純粹に俺、の友達であって、別に騙して連れてきたわけじゃない。ましてや、由比ヶ浜をダシに使ったわけでもない。ただ単純に、彼女とはSNSを介して知り合いになっただけの、本当にただそれだけの関係なんだよ」

「SNS?……そう、つまりはネットを経由して彼女を脅迫したと。そういうことね?」

「だから違うって言ってるだろ!!というか、なんで騙すから脅迫へと密かに犯罪の度合いが増し増しているんだ!?!お前はどうかあつても僕

を犯罪者に仕立て上げたいのか!!」

「……僕?」

「っ、あ、いや……」

しまった。ついつい戦場ヶ原を前にしたような心境で言葉を返してしまっていた。

焦燥に駆られながらも視線を逸らす僕に、雪ノ下の不審気な眼差しが突き刺さる。

「というか昨日と同じ失敗を繰り返すとか。

普通に救いようがなさすぎるだろ……僕。

「ああ、うん、ちよつとごめんね。話の腰を折っちゃうようで申し訳ないけれど、その件に関しては私から説明させてもらってもいいかな? そもそも、この場に私が居る理由もまだ全然話せてないわけだし。それを比企谷くんに全部任せてしまうというのも、若干の心苦しさがあるといえるか……ね?」

しかし、そんな愚かな僕さえもフォローしてくれるのが羽川だった。

「後は私に任せて」と、言わんばかりの彼女の目配せに僕は感謝の面差しで応える。

「というわけでー役者交代。
そうして。

僕なんかとは打って変わって、羽川は実に流暢に、分かりやすく、そして整然と時系列を順序立てて雪ノ下達に事の経緯を伝えていった。そこはそれ、やっぱり流石は羽川さんである。

その全てを伝えるにももの五分も必要とせず、話しが終わる頃には雪ノ下に纏わり付いていた剣呑オーラも、いつの間にか霧散していた。

「なるほど。おおむね、事情は把握しました。それに、既に学校側の許可も取られているのであれば、私からは何も言うことはありません。ようこそ、羽川翼さん。私たち奉仕部は貴女を歓迎します」

「ありがとう。今日と明日の二日間、どうぞよろしくね、雪ノ下さん」

そう言つて、羽川は雪ノ下へ右手を差し出す。

対する雪ノ下は、何故かきよんとした表情で目を数回瞬かせてから、やがておずおずと手を差し出し返した。

友好の証、ということだろう。

それはいかにもというような、委員長気質の染み付いた実に羽川らしい所作だった。

「ほお、もう友情を深め合っていたのか。うんうん、実に少年マンガっぽい良いシーンだ。ジャンプ好きな人間としては喜ばしいものがあるよ」

突然の背後からの声。振り返ると、すぐ目の前に平塚教諭が立っていた。

扉の戸当たり寄りかかりながら、彼女はニヤニヤと羽川と雪ノ下の二人を眺めている。その表情はどこか微笑ましいものでも見るような——例えるならば、気難しい猫が人に餌付けされているシーンでも見るような、そんな感じだった。

「……平塚先生。いい加減、入室の際のノックを習慣付けてはもらえませんか。最低限のマナーです。それすら守れないようでは生徒に示しもつかないのでは？」

「ふむ、まあ一理ある。だがな雪ノ下。今回に限って、私は決してマナーを軽んじてはいないぞ？なんせ、その叩くべき扉が開けつぱなしだったのだからな」

「……いい大人が屁理屈を言わないでください」

不愉快げな雪ノ下。そして何故か、再び僕が睨みつけられる。

……確かに、扉を閉めなかつたのは僕の不注意ではあるけれど。しかし、それだけで僕を親の仇のように睨むのはやめて欲しい。

親の仇というか。むしろ目の敵にされているような気分だ。

「まあ、細かいことはこの際置いておこうじゃないか。それよりも、生徒会の方である程度の準備が済んだようなのでな。早速、君達の力を貸してもらいに来た」

「……ええ、わかりました」

溜め息と共に、雪ノ下は膝の上に置いたブックカバーを静かに閉じ

る。

そして立ち上がり、羽川とはまた違う堂々としたー言うならば威風堂々とした足取りで颯爽と僕の横を通り過ぎていった。それに続いて羽川も彼女の後を追う。

さて、それじゃあ僕も行こうかーと。

開いたままの扉に視線を向けた所で、不意に、右腕の裾が小さく、軽く、後ろへ引かれた。その微かな違和感に、僕は咄嗟に振りかえる。

そこにはー

「……………」

「……由比、ヶ浜?」

人差し指と親指で。

申し訳程度に僕のカッターシャツをつまむ由比ヶ浜がそこにいた。俯いたその顔からは表情を読み取れない。

ただ、ギョツと引き締められた唇から、彼女はぼつりと。

「……ヒツキー、さ。なにか、あたし達に隠してる事とか無い、かな? あたしとゆきのんに、ちゃんと、言ってる事」

動揺。そして僕は咄嗟に息を呑む。

問われたその言葉は直球でいて、なおかつ唐突に過ぎた。

由比ヶ浜は俯いたまま、僕のカッターシャツから指を離さない。小さいながらも、しかし返答を聞くまでは逃がしはしないとも言えるような、それはそんな意思表示にも思えた。

幾ばくの沈黙。

僕は動揺を隠そうとして、けれど完全には隠しきれていない上ずつた声音で、

「な……ないよ。ない。由比ヶ浜達に隠してることなんて、なにも、ない」

「……そっ、か。うん、そう、だよ。ゴメンねっ、なんか変なこと聞いちゃってさ」

やっと上げられた顔にはぎこちない笑顔が張り付けられていた。

そして彼女はシャツから指を離すと、トコトコと小走りに部屋を出る。

一人、室内に取り残される僕。

無意識に呟きが口から突いて出た。

「……まいったな」

これはーともかく、一旦羽川と相談する必要がありそうだ。

先の痛々しい愛想笑いを思い出してから僕は暗鬱とした吐息を吐き出す。心中では比企谷に謝罪の言葉を述べながら、僕は重い足取りで由比ヶ浜の後を追った。

どうやら話に聞いていた通り、僕らは主に雑用担当を任される事になっていったようで。

コの字形に机が配置された会議室の中、生徒会らしき役員達がせつせと書類やらパソコンやらに向き合っている中を、僕達はパチンパチンと、ホツチキスで『総武高等学校のしおり』に校内案内図を綴じていた。

僕の隣には羽川が、そして少し距離の離れた向かい側の机には雪ノ下と由比ヶ浜が違う冊子を、これまた同じく綴じる作業に従事している。

その間、時折チラチラと由比ヶ浜の様子を窺いはしたものの、けれど彼女は一度として僕に視線を向けることなく、また、彼女の手前とすることもあって、未だ僕は羽川に話を切り出すことも出来ずにいた。

とはいえ、なにからなにまで彼女に頼りっぱなしというのも、一人の男としてどうかとは思いうけれどもーだからと言って、僕なんかが頭をひねった所で事態解決の妙案が出てくるわけでもないんだよなあ。

思わず、溜め息を一つ。

もれなく憂鬱が全開だった。

「ん？比企谷くん、手が止まってるよ？」

「……………はあ」

「……………阿良々木くん？」

「え？」

声に呼ばれてそちらへ向くと、羽川が様子を窺うような上目づかいで僕を見ていた。

その透明な瞳の内には、見慣れぬ僕の顔が映しだされている。

比企谷八幡ーああ、そうだ。またやってしまった。今の僕は阿良々木暦ではなく、比企谷八幡だというのに。

「いや、悪い。ちょっとその……………ボーっとしてただけだよ」

「どうかしたの？見るからに『憂鬱だー』って顔に書いてあるけれど。確か、こういう単純作業は得意な方じゃなかったっけ？」

「……………やっぱりお前はなんでも知ってるんだな」

「べつになんでもは知らないわよ。知ってることだけ」

もはやサービス精神の境地で僕の問いにいつも通りの答えを返してくれる羽川ではあったが、しかしその表情はどこか不満げでもある。

まあ、あからさまに話を逸らされたのだから、それも仕方のないことかもしれない。といっても、僕としてはただ言葉に困った末の咄嗟の返答だったのだけれどーいや、まあ、ちようどいいか。

僕は、慎重に周囲に目を配りながら、小声で羽川に耳打ちする。

「……………羽川。今が作業中だということは重々承知の上だけど、でも少しだけ時間を取れないか？その……………出来ればお前に話しておきたいことがあるんだ」

「話？」

羽川は最初はキョトンとした表情で、けれどすぐに事情を察してくれたのか。

頷きを一つ、次いで、パチンと音を一つ。

そして手元の冊子を置くなり起立し、室内脇のパイプ椅子に腰を落ちつけていた平塚教諭のそばまで歩いていく。それから二、三言ばかり言葉を交わしあつてから、羽川はすぐにこちらに戻ってきた。

一体、平塚教諭と何を話していたんだろうか――なんて疑問を向ける間もなく、羽川は口を開く。

「手元の冊子は全部綴じ終わっちゃったからね。だから後は雪ノ下さん達に任せて、私たちは校内清掃の班に回ってくれって」

どうやら、彼女は僕の頼みを即座のうちに反映してくれたらしかった。

即断即決。

一切の迷いない、そのある種超人じみた決断力と行動力が今はとても心強い。

僕はその言葉に頷きを返し、羽川と連れ立って部屋を出る。

と、その際。

「……………」

――背中に感じた視線が誰のものであるかを、僕は確かめることはしなかった。

二十話

「それで、阿良々木くんはどうしたいの？」と。

それが僕の話の聴き終えた羽川の第一声だった。

清掃場に割り当てられた教室の内で、両手にちり取りと箒を持ったまま、彼女はその大きな黒い瞳で僕をジッと見つめている。

いや、どうしたいのかと言われても。

そりゃあもちろん、

「もし由比ヶ浜が僕と比企谷の件について絶対的な確信を持っていようと、それはそれでなんとか誤魔化しきるしかないと思ってる。由比ヶ浜は怪異については何も知らないわけだし。それに昨日も言ったことだけれど、あるかもしれない危険に無関係の彼女を巻き込むわけにもいかないだろう？」

「うん、そうだよ。つまりはそういうことだよ」

「……？」

雨が降ったら傘をさせばいい、みたいな。

当たり前のことを当たり前のままに言うような口調だった。

そういうことってーいや、それこそどういうことだよ、と。

若干の訝しみを込めて問い返した僕に、羽川は続けて答える。

「阿良々木くんはさ、他人に優しすぎるんだよ。優しすぎるから、だからつまりは誰も傷つけたくないから、色々と悩んじゃうんでしょ？」

「……別に、そんなことは」

ない、と言いかけて僕は思い出す。

そういえば過去にーもっと詳細に言えば、約一月ほど前に、僕は尊敬すべき後輩から苦言とも言うべき言葉を頂戴したのだった。

『助けるべき相手を、間違えないでくれ』

蛇切縄。

蛇にまつわる蛇の怪異、蛇の呪い。

そしてー千石撫子と神原駿河。

蘇る記憶の中で、忘却したい記憶の中で、過去の情景が頭をよぎる。とはいえ、今回と前回とを比べるにはいささか緊急度の度合いが違い過ぎるような気がしないでもないけれど。

だけど、確かに、羽川の言うことは的を射ているのかもしれない。誰も傷つかずに済む冴えた方法を。

誰も後悔しない完璧な手段を。

僕が考えていなかったかと言えば、しかし、それは嘘になるだろう。「阿良々木くんはもう自分のすべきことを解つてはいるんだよね。だけど、それだと由比ヶ浜さんを傷つけてしまうかもってことも理解してるから、今こうして思い詰めているんでしょう？ 思い、悩んでいるんでしょう？ それとも、それは全部私の杞憂だったかな？」

「それは……」

開きかけた口を閉ざして、僕はー

「……いや、違わない。そうかもな。多分、全部お前の言う通りだよ、羽川。だけど、その言葉に一つだけ訂正を入れるとすれば、それは別に、僕が優しいからなんて事は絶対にならない。ただ単に僕が、僕自身が後悔したくないから悩んでしまうだけなんだよ。自分の小ささを、無力さを、認識しなくてもいいように」

僕は言う。

他人の為にではなく、あくまでも自分の為にと。

それもまた偽らざる本心だった。

「自分の為に……か。全くもう、相変わらず素直じゃないなあ」

呆れ顔の羽川。

仕方がないやつだと言わんばかりの眼差しだ。

「ともかく。つまり私が阿良々木くんに言いたいののは、これ以上無理をしないでって事なの。ただでさえ慣れないことで神経を使ってるんだから。そのリソースを他の人に割く余裕なんて、今の阿良々木くんには無いでしょう？」

「……まあ、そりゃあ」

あるか無いかと言えば、確かに無い。というか絶対的に不足してい

る。自分に割り当てる分でさえ心許ないぐらいである。

「だったら、やることは一つだけでしょ？さつき阿良々木くんが言ったこと……騙す、なんて嫌な言い方はしたくないけれど、それでも今は由比ヶ浜さんに真実を伝えるべきじゃない。たとえばそれが最善の手じゃなかったとしてもだよ」

「……………」

いつにもまして真剣な面差しの羽川を前に僕は何も言葉が見つからない。

その言葉の端々からは確かに僕を気遣ってくれているのだという心情が伝わってはくるものの、けれどそれ以上に、羽川は僕に『覚悟を決めろ』と言っているようにも思えた。

小さなことに右往左往する薄っぺらい僕を、さながら叱咤するかのように。

彼女は、まっすぐと僕を見据えている。

「……最善の手じゃなかったとしても、か。ほんと、いつもいつでもお前は僕が口にしにくいことをズバズバと言ってくれるよな。やつぱり、自分にも他人にも厳しいやつだよ、羽川翼は」

「何言ってるのよ。私が厳しくするのは阿良々木くんだけだよ。阿良々木くんだけが、特別な」

「特別？なんで僕だけ？」

言う僕に羽川は少しの間を空けて、それからわざとらしく「えへん」と咳払いを口に出し、どこかおどけた風な口調で、

「それはね……私が学級委員長で、阿良々木くんが副委員長だからです」

「なんだよそれ」

自然と笑いがこぼれる。

スツと。重くなっていた肩の荷が、少しだけ、軽くなったような気がした。

「……わかったよ、羽川。それとありがとう。おかげで決心がついたよ。僕はもう迷わない。たとえばそれが間違ったやり方だとしても、僕は僕に誓って、由比ヶ浜や雪ノ下達の前では比企谷八幡であることを

突き通すよ。僕のことを、貫き通すよ」

「うんうん、良い意気込みだね」

「阿良々木暦の名は捨てた!! 今日という日をもって、僕は生まれ変わったんだ!!」

「わお、気合充分!」

「後で身体を返せと言われても絶対に返さないぞ!! 今日から僕が比企谷八幡だ!!!」

「いや、そこはちゃんと返してあげようよ!?!」

それじゃあ本末転倒じゃない、と。

ジト目に向けられた冷ややかな視線が、だが今はどこか心地良くさえ感じる。

羽川翼。

異形の羽を、持つ少女。

頭脳明晰で、委員長の中の委員長で、何でもは知らず知ってることだけを知っている、そんな彼女の存在がーやはり、とても心強かった。

それはもう、思わずにやけてしまうくらい。

心強く、心頼もしい。

「もし僕がのび太くんだったとしたら、きっとお前はドラえもんなんだろうなあ」

「……なんかいきなり、それもすごく微妙な表現で例えられてしまったけれど、一応、その言葉は褒め言葉として受け取ってもいいんだよね?」

「ああ、もちろんだとも。これ以上ないくらいの褒め言葉だよ。僕の中では『おおっ、心の友よ!』に次ぐ賞賛の言葉だ」

「ううん。やっぱり素直に喜べないなあ」

微妙な表情でぼやく羽川。

もしかして、ドラえもんは好きではないのだろうか。

しまった。女の子という点で考えるならば、プリキュアで例えた方が良かったのかもしれないな。

「でも、正直言うとなんか新しいシリーズのプリキュアはあまり見てない

だよね、僕。初代から入った身としてはなんとというか、新しいものに流されていくというのは一抹の抵抗感が……」

「また急に何を言いだしてるのよ……。ほら、そんなことぼやいてるヒマがあるなら手を動かして。無駄話はもう終わり。掃除、早いところ済ませない」と

言つて、羽川は手早く箒を動かしていく。同様に、僕も手にした箒で床を撫でた。

慣れない他人の振りに、慣れない奉仕活動。それに加えて、由比ヶ浜の件もある。

だけどーうん、もう大丈夫だ。気負うのも、悩むのも後回しにして、今はとにかく、僕が出来ることをやっていこう。

僕のことを考えて親身になってくれた羽川を前に、僕は人知れず、そんな抱負めいた決意を胸に抱きーそうして清掃作業を開始した。

ーズキズキと。またはジクジクと。あるいはズツキユンズツキユン☆と。

そんな風に前頭部を苛む疼痛で俺は不意に目を覚ました。

どことなく薄ぼんやりした意識で瞼を開くと、そこには代わり映えない我が家のリビングな風景が広がっている。

あれ？でも確か俺、自分の部屋に居たはずだよな？……なんて疑問を覚えながらもとりあえず立ち上がるうとした所で『ガタンッ』『イ

”ッ!?”バランスを崩し、転倒。床に顔面をモロに強打し、そして俺は刻の涙を見た。

「つゝゝ!!」

痛え。超痛え。

この痛みを度合いとして例えるならばそれは戸塚が俺を置いてお嬢さんに行ってしまう程の痛みであり、というかなにその激痛もういつそ死んで楽になりたいレベル。

いや、でももしかすると一旦距離が出来てからのちに禁断の愛が育まれるという昼ドラ的な展開がワンチャン残っているのかもしれない

いが、しかしそんな妄想を半ば本気で考えてしまっている自分がそろそろマジで渡つてはいけない橋を渡つてしまいそうだったので、やがて俺は考えることをやめた。

代わりに現状把握に努めるべく意識を周囲に向ける。

そうして幾許かの沈黙の果てに、俺は遅まきながらその異常に気が付くことが出来た。

「……嘘だろう？」

地面に這いつくばる芋虫のような状態のまま見下ろした視線の先には、椅子ごと縄状のもので縛りつけられた自分の身体があった。

椅子の外側、後ろ手に回された両手首にもなにやら金属製の手錠のようなものが嵌められており、試しに力を込めてみるものの、しかし当然のようにその行為はまるで意味の無いものに終わる。

というか……やべえ、マジで身動きがとれねえ。

理解すると同時に言い知れない怖気がぞくりと背筋を撫でた。

なにがどうなつてこうなつたは知らないが、少なくともこの状況にはなにかしらの悪意が絡んでいる。でなければ、気付かぬ内にこんな生殺与奪の権利をそこら中に安売りするような格好にはされていはいはずだ。

混乱と焦燥が理性を蝕む。気付けば俺はもがくように床の上で身をよじっていた。

なにかの拍子に縄が抜けるなら良し。そうならないにしても、ここで蜘蛛の巣にかかった蝶のようにジツと諦めに身を費やす気はなかった。

そうしてもがき続けること少し。元々緩みがあったのか、わずかに出来た縄の隙間に一筋の光明を見出したところで、

「ーあら、ようやくお目覚めなのね、阿良々木くん」

声がした。

聞き覚えのない、ただ何故か前頭部に化膿のようなじゅくじゅくとした幻痛を覚えさせる、それは女の声。

俺は咄嗟に顔を上げる。

はたして、そこには開いた扉越しにこちらを見下ろす見も知らぬ女

子の姿があった。

「よかったわ、目を覚ましてくれて。ずいぶんと長い間起きないから私、心配していたのよ?」

その女は能面のような無表情で俺に労わりの言葉を投げかける。目線を合わせるように身を屈め、そして口元に薄い笑みを張り付けて。

まるで俺の状態を気にかけることもなく平然と、冷然と、そいつは挨拶するような気軽い声音で、

「てつきり殺してしまっただかと思ってたから」

「っ……!?!」

瞬間にして、身の毛のよだつような悪寒が俺を襲った。

女は笑う。それはどこか優雅で、品のある、残酷な笑みだった。

奴隷を、はたまた家畜を見るようなその卑下した瞳に俺を映し出しながら、女は大きく一步、足を前に踏み出し、そして何の躊躇いもなく俺の後頭部を踏みつける。

その加減もクソもない突然のストンピングに俺はたまらず表情を苦痛に歪めた。

「ああ、ごめんなさい。ついつい間違っただけで踏んでしまったわ。でも私は悪くないわよね。だって、そんな所で虫ケラのように寝転がっている阿良々木くんの方が悪いのだから」

踏みつけた足はそのままに悪意に満ちた嘲笑が頭上から降ってくる。

その声音はどこか楽しげで、おかげで俺はまず間違いなくこの女の性根は心底から歪みきっているのだろうという確信をグリグリと押し付けられる生足の下で得た。

「それにしても愉快的な格好ね、阿良々木くん。さつきはつい口が滑って虫ケラなんて言い方をしてしまったけれど、だけどそれも中々に言い得て妙な形容の仕方だったのかもしれないわ。さすがは阿良々木くん、身体を張ってまで私の語彙力向上に貢献するだなんて、ゴミのくせにたまには良い仕事をするじゃない」

「……………」

……いや、つーかマジで歪みまくってませんかこの女？あまりに性格が悪すぎて思わず心配になってくる。……主に、俺の身の安全が。

「戦場ヶ原くーいず」

「は？」

「では問題です。今から阿良々木くんの身には一体どんな惨劇が訪れるのでしょうか。次の問いから答えなさい」

「え？は？え？」

突然のクイズ出題。

展開についていけず混乱する俺をよそに、女は無表情で右手の人差し指を立てる。

「その一、切られる」

問題以前に選択肢が大問題だった。

だが、女は気にせず続けて中指を立てる。

「その二、裂かれる」

カシャンツーツーと。どこからか金属音がする。見ればその左手にお前それどこのクロックタワーですかと聞きたくなるような大振りなハサミが持たれていた。

自然と頬が引きつる。

そして最後に女は薬指を立て、

「その三、もぎ取られる」

それは一体どこの部位をですか……!?

まともな選択肢が一つとして無い。これではクイズではなく、苦しみ痛められる図と書いて苦痛図である。苦痛図（ごうもん）である。クイズという楽しい響きを狂気でふんわり包み込んだ結果がコレだよ！

「それではしんきんぐたーいむ」

「っ、おい待てッ！先に俺の話をしてー」

「ぶつぶう。残念。時間切れよ」

「っ!？」

「正解は」

光る。

女の目が狂気に光り、凶器が走る。

窓から差し込む陽光に照らされた金属刃が鈍い反射光を伴って一閃された。

目を瞑るヒマも無ければ、覚悟を決める隙さえ与えない瞬動。

十分の一秒、百分の一秒にまで圧縮された体感時間の中で、やがて『パサリ』と乾いた音だけが鼓膜に届いた。

身体を苛んでいた緊縛感が解かれる。

視界の端で、くたびれた縄が自身の役目を終えたとはかりに鋭利な切断面を見せつけながら床の上に散らばっていた。

「……遊びは終わり。情けをかけるのも、この一度だけよ。私が聞きたいことはただ一つだけ。『本物の』阿良々木くんはどこに居るの?」

「!……お前」

視線だけで人を射殺しそうなその冷徹な瞳に宿るは確固たる意志の光。

その輝きに惹きつけられるように俺は女を見据えながら、そうして乾く喉に唾を押し込み、言葉を紡ぐ。

「……お前、一体誰だ」

その乾いた問いに返ってきたのは、堂々とした一言だった。

「戦場ヶ原ひたぎ——阿良々木くんの妻よ」

二十一話

結局縄は解かれたものの、しかし何故か両手の手錠は外されないままに俺の尋問は行われた。

今に至る経緯と、そして事情。どうやら戦場ヶ原は怪異なるもの存在については認知していたようで、おかげでその辺りのややこしい部分もあっさりと納得した上で、戦場ヶ原は俺からあらゆる情報を引き出していく。

それから、どれぐらいの時間が経過したのだろうか。

戦場ヶ原は拘束状態の俺の眼前で腕を組みながら閉眼し、そして淡々と言葉を発した。

「……なるほど、事情はわかったわ。阿良々木くんが何故昨日、今日と勉強会に来なかったのか。それを何で羽川さんが彼の代わりに私に伝えてきたのか。わかりました。全部、まるっと理解しました」

無駄に長い睫毛が揺れる。次いで戦場ヶ原は五オクターブくらい下がった地獄の奥底から響くような鈍重な声音で、

「……気に入らないわね」

クワツと目が開く。何故だか瞳の奥から見えてはいけないう黒い邪悪なナニカが見えてきそうで、俺はとつさに俯き視線を逸らした。

わあ、小町ちゃんったらフローリングのお掃除頑張ったのね！……なんて、床に視線を固定しながらガクブルと現実逃避する俺をよそに、戦場ヶ原は殺意の波動を吐息に乗せて言葉を続ける。

「そんな大事な事をまさかこの私に黙っていようとは。気に入らない、そしてショックだわ。ええ、はい、ショックです。あまりの衝撃に思わず昂ぶってしまいそうなくらい、失望したわ。……ねえ、阿良々木くん。そんな可哀想な私に是非とも教えて欲しいのだけれど、私はこの昂りを一体どのような違法手段を使って収めればいいのかしら？」

質問とは名ばかりの脅迫が眼前に座る阿良々木クンの顔を瞬く間にスカイブルーに彩った。

い、いや、でもあいにくとボクは阿良々木くんではないですし、比企谷くん家の八幡くんですし、つまりあなたの質問にはお答えいたしかねます、みたいな？

だからホントその右手のハサミをチャキチャキ鳴らすの止めろマジで小便漏らしそうになるぐらい怖いんだよ!!

「……まあいいわ。あの男の処遇は後で本人とじっくり話し合っただけめるとして、ところで貴方……確か気仙沼くんだったかしら？」

「違います……比企谷です……」

「ああ、そうだったわね。ごめんなさい。あなたみたいな腐った魚のような瞳をした人間を気仙沼呼びわりしてしまって、全国の気仙沼さんには本当に悪いことをしてしまったわ」

「謝る相手が全然違い……」

それにその理論だとまず第一に俺は生まれしてきたことを全国の比企谷さんに謝らなくてはいけない。

生きてるだけで謝罪を要求されるとかどんだけ忌み嫌われてるんだよ、俺。

そうか、俺が持つ無駄に高い土下座スキルはこの為にあつたのか……。

「小さなことをネチネチとうるさいわね。他人の名前を気仙沼と呼ぼうと生ゴミと呼ぼうと私の勝手でしょう?」

「いや、前者はともかく後者はダメだろ。だってそれ名前じゃないし、ただの蔑称だし」

「そうかしら。でも男の子って、燃えるものが好きなんじゃないの? ドリルとか、巨大ロボットとか、生ゴミとか」

「燃えるの意味が違うだろ……。男のロマンと燃える(物理)と一緒にするな」

「なるほど。つまり男の子は燃やされるのが好きなのね」
「……………」

……もうやだ、こいつホント怖いよー!

しかもその発言がわざとなのか、それとも天然なのか。寸分違わぬ無表情のせいで判断に困る。だが、少なくとも怖い女である事は確か

だった。

まことに勘弁して頂きたい。

笑顔が怖い女なんて雪ノ下さんだけで充分だよ……。

「それで比企谷くん。さっき話していた『孤毒蜘蛛』についてだけれど。羽川さん達に仲間外れにされている間に何か解ったことはあったのかしら?」

と、前後の流れを一切無視しての戦場ヶ原の問い。

その言葉にはやはりエッセンス程度に悪意が混ぜられていたものの、まあでも仲間外れというのもあながち間違っただけであつたので俺は気にせず結論を述べた。

「……少しはな」

「へえ。やるじゃない。あのクソ虫……いえ、阿良々木くんよりは多少なりとも使えるようね」

「……………」

こいつ今、自分の彼氏のことクソ虫って言わなかったか?

いや言つたよな? いま絶対言つてたよな?

「なによその顔は。見ていて気分が悪くなるわね。虫唾が走るわ。お願いだからちよつと死んでくれないかしら?」

「いや、これお前の彼氏の顔なんですけど……。なんなの? 声高に自分のことを妻とか言つてたけど実は阿良々木のこと嫌いなのか?」

「そんなわけないじゃない。だって私は阿良々木くんのことを愛しているのだから」

恥ずかしげもなく、いきなり、堂々と戦場ヶ原は明言した。その言葉は直球すぎてむしろ聞かされたこつちが恥ずかしくなってくるぐらいだ。不思議と言い負かされた感さえある。それが釈然としなくて、俺はつい返さなくてもいい言葉を返してしまった。

「……愛だのなんだのと随分と気軽に言つちやうのな、お前。じゃあアレか? もしかしてその愛とやらでお前は阿良々木が居たこの場所を特定したつてのか?」

「いいえ。……こまでは阿良々木くんの携帯に仕込んだ盗聴器を辿つて来たわ」

「そうか、盗聴器でか……。え？盗聴器？」

またしてもとんでもないことを言い出した。

え、マジで？

「うふふ、引つかかったわね。もちろん冗談よ。嘘に決まってるじゃない」

「そ、そうだよな。さすがにいくら何でも盗聴器は嘘だよな！」

「仕込んだのは携帯じゃなくて皮膚の下よ」

「嘘じゃなかった……」

そして手術までされていた……。

どうやら戦場ヶ原の愛は『愛してる(ヤンデレ的な意味で)』の愛であつたようだ。

重い。重いし、普通に犯罪だ。こいつまさか、愛の名の下であれば何をしてでも許されるとか思ってる人種じゃないだろうな……？

「まあそれも嘘なのだけれどね。単純に阿良々木くんの携帯に内蔵されてるGPSを活用させてもらっただけよ」

「それでもギリギリアウトだけれどな」

だから愛が重いんだっての。……けどまあ、その行動も阿良々木を心配しての事であれば、一応は人道的には許される範囲なのかもしれない。なんだかんだで顔を見ただけで俺と阿良々木との差異にも気付いたわけだしな。

……もしかしたら、ただ単に俺の目がほんのちよつと個性的に過ぎただけだったのかもしれないが。

「それで解ったことって何かしら？」

「あ？」

「だから孤毒蜘蛛についてよ。さっき言ってたじゃない。解ったことがあるって」

「……ああ、そのことか」

どうやら自分のボーイフレンドが巻き込まれた事もあつてか、戦場ヶ原もその怪異には少なからず興味があるらしい。

気後れするほどに真っ直ぐ向けられた視線にちよつとした危機感を覚えながら、俺はネットサーフィン中に見つけた幾つかの記述を一

つ一つ思い出し、言葉にして吐き出す。

曰く、弧毒蜘蛛は人の心に寄生しその内の闇を栄養として喰らう怪異であるということ。

曰く、弧毒蜘蛛は見る者によってその形状が千差万別であるということ。

曰く、弧毒蜘蛛は非常に臆病であるということ。

「……そして最後に、これが最も記述の多かったものなんだがー『弧毒蜘蛛は決して人に害を成さない怪異』ということらしい」

「害を成さない?」

眉をひそめる戦場ヶ原の問いに俺は小さく頷く。

「害を成さない、というよりかは基本的には不干涉を常としているみたいだな。害も益も成さない、ただ栄養を摂るだけとって、後はなにもしない。それが弧毒蜘蛛の性質ってことになってる」

「不干涉って……でも実際に、弧毒蜘蛛が原因で阿良々木くと貴方は入れ替わってしまったているのよね?それは怪異が貴方達に干涉しているということにはならないの?」

「……それは」

戦場ヶ原の疑問は最もだった。

俺と阿良々木、少なくとも二人の精神に関わっている以上、それを不干涉だと言い切るには無理がある。

ならばこそ、その情報を元に俺達が導き出せる答えはといえばそれは……

(弧毒蜘蛛が入れ替わりの原因じゃない……?)

それは方に一つもあり得る結論。そもそもが弧毒蜘蛛が関わっているという情報もあのうさくさい幼女から教えられた実にあやふやなものだ。それが間違い、はたまた幼女の勘違いだったとしてもなら不思議はない。

むしろ地味に納得出来る分、大いに現実味があるときさえいえる。

「……あのクソガキ。やっぱりでまかせ言ってたんじゃないだろうな……」

無意識の内に俺は自身の影へと視線を落としていた。自然と悪態

が口をついて出る。その漆黒な平面をおもむろに踏んづけてやりたい衝動に襲われた。

と、八つ当たりじみた考えで床を睨む俺に戦場ヶ原は平坦とした声音で、

「……仕方ないわね」

呟く。と、同時に力チリと身体の後ろで金属音がした。

窮屈だった両の腕が瞬く間の内に解放される。見れば、戦場ヶ原の右手に銀色に鈍く光る手錠が持たれていた。

「本当ならこのままの足で阿良々木くんに会いに行こうと思っていたのだけれど、仕方がない、折檻は後回しにしてあげる。今日の所はひとまず貸しを作ってあげることにするわ」

「……貸し?」

「そう、貸し」

妖艶に笑うと戦場ヶ原はくるりと踵を返す。そして今度は首だけを肩越しにこちらに振り向かせると、

「行くわよ」

はあ?

「行くわよって……どこに?」

「市立の図書館。なるべく伝承に関しての蔵書量が多いところがいいわ。あとはパソコンも置いてあれば御の字ね」

「……図書館?」

嫌な予感が脳裏を過る。戦場ヶ原はまるでその考えを読み通すように目を細め、そしてもう一度、不気味に微笑んだ。

「その案件にぜひ私も協力させてもらおうわ。でも勘違いしないでよね。私はただ、阿良々木くんの顔をした阿良々木くんを思う存分黠りたいだけだからね」

……俺の知ってるツンデレとなんか違うよー!!

二十二話

照りつける太陽が眩しい。

その陽光はさらにアスファルトを反射し熱気となって俺を蝕んでいた。肌が焼ける。流れ出る汗で肌にシャツが張り付き、言い知れない不快感が生まれていた。

そんな状況下、そんな悪環境の中で。

目の前の女は不思議なくらいに涼しい表情で汗一つもかかず、平然と言ったものだ。

「暑苦しいわね」

「……………」

「ああ、いえ、間違えました。暑いわね、と言いたかったのよ、比企谷くん。決して貴方のような虫以上人未満な存在が真横で存命している事が鬱陶しくて思わず口を突いて出た言葉というわけじゃないから大丈夫、安心してちょうだい」

「……………」

安心どころか、むしろ進んで精神状態を不安定にさせてくる能面フェイスな戦場ヶ原さん。

お前それ表情筋を真理の扉にでも持ってかれたのかよと言いたくなるような完膚なきまでの無表情に、俺はちらりと横目に視線だけを向け、思いきり苦々しく言葉を返した。

「いや、なにが大丈夫なのか全然伝わってこねえんだけど……。そんな苦しい言い訳されるくらいなら逆に真っ向から罵られた方がまだマシだ」

「存在が鬱陶しいわね同じ空気を吸うのも嫌だからちよつと永劫に呼吸をやめてくれないかしらこのゴミ虫」

「すいませんやっぱ真っ向から罵るのも勘弁してください……」

アクティブ過ぎる掌返しに俺の心がストレスでマツハだった。

というか、コイツ、一応は初対面である俺にさつきから辛辣過ぎない？

その容赦の無さとか毒舌の濃さとかが、シンクロ率百パーセントで

某部長様と重なってすごく既視感。ひよつとしてこつちも中身が入れ替わってるんじゃないかと、浮かび上がる想像に戦慄としながら戦場ヶ原を視線で牽制していると、不意に、その横顔が薄く陰った。

「……ふう。厄介なものね。中身は別物だと解っているのに、その顔を見るとつい阿良々木くんを前にしたように喋ってしまうわ。本当の私は、人前ではもっと可憐でお淑やかな少女だというのに」

「……そうですか」

「ええ、そうなの。ところで比企谷くん。私は当然この辺りの地理には乏しいわけだけれど、道はこの先で合っているのよね？」

「ああ、合ってる。後は道沿いに百メートルくらい行けばじきに目的の建物が見えてくるはずだ」

言って、俺は視線で道の先を示す。

戦場ヶ原は同じく視線を前へ向け、

「そう。わかったわ」

歩みを再開する。

俺もその進行に従い、気怠さを伴いながらも後を追った。

「……………」

「……………」

図書館へと向かう道中だった。

時に道の確認を行い、時に意味もなく罵倒され、そしてそれ以外の時間を一切の世間話もなく沈黙のままにここまで歩き続けて三十分弱。それは俺にとっては苦痛の三十分弱である。

一人ならまだしも、未だ素性が自己申告でしかないヤンデレ女と行動を共にするとかマジ恐怖。いや、決して美少女と肩を並べて歩くことに緊張しているなどということは断じてさっぱり一応多分無いが、それにしたって戦場ヶ原というこの女、あまりにも感情の起伏が乏しすぎてある意味で不気味だった。

無表情だし、声のトーンは常に低空飛行だし、そのわりに口を開けば猛毒ばかりを吐き散らしていく。なんかもう一緒に居るだけで疲れてくるというか、『アイツ』を彷彿とさせて尚更余計に近寄りがたいついていうか。

というか阿良々木は本当にこんなのと付き合ってるのかよどんだけ愛に飢えてんだよこれが愛なら俺は愛など要らねえよ。

つまり世紀末的に考えれば俺マジサウザー。

ほら、聖帝と童貞ってなんか響きのにも似てるしね！

「……………」

「……………」

……沈黙が居たたまれない。

ぼっちは多対一においてははがねのよろい並の防御力を有するが、一対一においてはステテコパンツレベルの脆さを露呈してしまうのだ。

妙にそわそわする心境で、しかし当然のようにここで爽やかに世間話を振れるようなポテンシヤルなど持ち合わせていない俺は無駄に欠伸なんかしたりしながら、一馬身ほどの距離を置いて戦場ヶ原に追従する。

そうして、また幾らかの時間を経過させたところで、

「あれがそうかしら？」

上げられた視線の先、そこに見えてきたのは壁面がガラス張りの建造物——千葉市中央図書館である。

肩越しに振り向く戦場ヶ原。視線は合わせずに、俺は小さく頷いた。

「そうだよ。俺の知る限りではこの近辺で最も蔵書量が多い図書館だ。確か八十万冊ぐらいはあるらしい。まあ、それだけあれば伝承の一つや二つくらいすぐに見つかるだろう」

「へえ、詳しいのね」

「べつに詳しいってほどじゃねえよ。ただ一人で静かに勉強するにはうってつけの場所だったからな。利用している内に自然と知ったんだよ」

「へえ、友達が居ないのね」

「……………」

……ほんとなんでこいつはこう毎回一言多いの？上げて落とすのが趣味の人なの？戦場ヶ原バスターなの？

「かっかつかつ。そうです私が魔界のプリンスです」

「いや、それ本家の方じゃなくて悪魔超人の方だし……」

まあ確かにこいつほど悪魔超人という名称が似合うような女も居ないけれど。むしろ残虐超人と呼ぶまでである。

「まあいい。こんな所で突っ立ってるのもなんだし、さっさと中に入……って、もう先に行っちゃってるし……」

俺の存在などまるで無いもののように戦場ヶ原は早々に玄関口をくぐっていった。

当然、俺は一人きり。ぽつねんと熱射の下に取り残される。

「……はあ」

溜息を一つ。

そして俺もドナドナとした足取りで入り口へ向かった。

夏休みのせいなのか、図書館の中は思いのほか利用客で混み合っていた。

発情したサルのようにやかましい小学生の集団に、机上に広げた教科書をよそにケラケラと頭の悪い会話に興じる中学生達。広間の脇にそなえつけられたソファでは甚平姿の爺さんが舟を漕ぎ漕ぎ、うたた寝している。

つーかお前ら本読めよ、とか思わず言いたくなるような光景だ。恐らく大半が涼を求めてやってきたような奴ばかりなのだろう。まるでショッピングモールの一角みたいなワチャワチャしたエントランスを前にしながら、俺はとりあえず戦場ヶ原に聞いておく。

「……で？こっからどうすんだ？」

「愚問ね。図書館に来てすることなんて一つだけでしょう？それとも

貴方はわざわざこんな場所まで来ておきながらリンボーダンスでもやるというのかしら？」

「やらないし何でそこでリンボーダンスを例えに持ち出してきたのが甚だ分かんねえ……。べつに、一応聞いてみただけだったの。解ってるよ。孤毒蜘蛛についての記述がある資料を探せばいいんだろ？」
「そう。解っているのなら別にいいわ。それじゃあ後は頼んだわよ」
無感情にそう言うってから戦場ヶ原はスタスタと奥へと歩いていった。

まあ二人で同じ所を探すよりかは二手に分かれた方がよっぽど効率的だろう。そう判断し、俺は戦場ヶ原が向かった先の真逆へと足を進める。

「つて、知ってはいたけどこんなにあるのかよ……」

進んだ先。俺が立ち入ったのは歴史や民話などに分類されたコーナーの一角だった。

そこには数えるのも嫌になる程の棚がずらりと並び立って異様な圧迫感をこちらに与えてくる。……うげえ、マジでこの中から探さなくちゃいけないのか。

手をつける前からウンザリとしてくる。仕事と同じだ。つまり専門主夫を志す俺としてはこれはやらなくてもいい作業なのではと一瞬考えてはみるものの、しかしその案を採用するのちにハサミでチヨキチヨキされるだろう未来が容易く見えてくるので、致し方なく俺は資料探しを始める事にした。

とはいえ、全ての本の中身を見て回るような時間的精神的余裕はない。

とりあえず背表紙のタイトルからそれらしいものを見繕おうと棚を上から下まで眺めながら真横へスライドしていくーと、

「わっ」

「っと」

なにかにぶつかった。いや、なにかなんて曖昧な表現をしなくても十中八九、人にぶつかったんだろう。

軽い衝撃に少しばかりバランスを崩しながら、俺はそちらへと目を

向ける。

すぐ眼下。小学生ぐらいの女の子が床に尻餅をついてうずくまっていた。

「……あー、悪い。大丈夫か。怪我とかないか？」

「いたた……ああ、いえ、こちらもすみません。少し探し物に集中していたせいで、周りが見えていませんでした」

「あ？」

「へ？」

少女が顔を上げ、目と目が合う。そして恋は始まったのだ……なんてことは当然無く、というかそこに居たのは八九寺だった。

八九寺はぼかんとした顔で俺を眺めながら、やがて目前に居るのが顔見知りだという状況を把握したのか。

シユバツと立ち上がるなり、ズザザと後ずさり、そうしてようやく次の言葉を発した。

「あ、あなたは……ひ、ひき……比企なんとかさんじゃないですか!？」

「開口一番でそれかよ」

たかが一日ぶりだというのに名前を忘れられていた。なんだよ比企なんとかって。知り合いの名前をうる覚えとかとても最低なことだと僕は思います!

「あつ、そうでしたそうでした。いま思い出しましたよ。いやあ、お久しぶりです。元気そうでなによりですね、ヒキガエルさん」

「比企谷だよ。なんで一番ダメなものを後ろに付けちゃったの? わぎとなの?」

「失礼、噛みまし……って、比企谷さんフライングです! 崇高な通例儀式を一体なんと心得ているんですか!」

「知るか。だから俺はそういう内輪ネタが嫌いだって言ってるだろうが」

「……か普通に名前言ってるし。やっぱりわぎとじゃねえか。」

「……で、八九寺。お前こんな所でなにやってんだ?」

「ふん。空気も読めない比企谷さんに教えることなんて何一つとしてありません。ええ、もう絶対に教えたりしませんからね」

「そう膨れんかったの。アレだ、後でミスドおごってやるから機嫌直せって」

「マジですか!? きゃっほーっ、比企谷さん大好きです!」

「……………」

八九寺真宵、やたらとチョロい小学生だった。

まあまた帰りにでも買っていけばいいだろう。それに、いざという時の為に常備しておこうとも思っていた事だしな。

床に写る自分の影をちろりと一瞥してから、俺は八九寺に向き直る。

「で、なにしてたんだ?」

「はい? ……ああ、私のことですか。意外ですね。そんなにも比企谷さんは女子小学生の行動に、というか女子小学生に興味があつたんですか?」

「言い直しに悪意がありすぎんだろ……。べつに興味とかじゃなくて普通に気になっただけだよ。いきなり家から居なくなった小学生がなんで一日またいでこんな所にいんのかってな」

心配していなかった、と言えば嘘になる。昨日の時点で、暗くなる前に探そうとも思った。しかし阿良々木も、あの羽川でさえも八九寺は大丈夫だと言って憚らなかった。その理由を――俺は、聞いてはいない。

「う……し、心配をかけてしまった事は謝ります。ですが、私だつてもう立派なれでいーなんです! 自分のプライベートタイムをどう山越え谷越えしようが文句を言われる筋合いはありません!」

「立派なレディーは山も谷も越えたりしねーよ。それに文句とかじゃなくてただ普通になにしてんのか聞いただけじゃねえか。それをなんでそんなムキになって返してくんの、お前?」

「べ、べつに、ムキになってなんて……」

「……………」

八九寺はキョロキョロとサバのように視線を泳がしまくっている。

と、俺はその両手が後ろに回っていることに気が付いた。今は背負っていないリュックサックの代わりになにかを背で隠すように、八

九寺はその態勢のまま動かない。
ふむ。

俺は隙を突いて背後に回ってみる。

「あつ、ちよ、なにを……!?」

「……これは」

覗き込んだ背中側に隠されていたのは一冊の本。八九寺が驚いている内に俺はその本へと手を伸ばし、かすみとる。

そこに書かれていた題名は、

「……蜘蛛隠れ？」

草書体で書かれたそれは幾分と歴史を感じさせるような古びた書籍だった。

無意識の内にパラパラとページをめくると中には蜘蛛に関する妖怪や怪談の類の記述が為されている。そして、そこには図ったかのように孤毒蜘蛛に関する記述も載っていた。

その紙面から目を離し、再び八九寺を見る。

八九寺はいたずらがバレた悪ガキのように、照れ臭そうな笑みを浮かべていた。

「は、ははっ。見られてしまいましたか。本当はなんにも知らない所にコレを差し出して盛大に驚かせようと思っていたんですがね。いやはや、ちよつと予定が狂ってしまいました」

「……お前、これを俺や阿良々木の為に一人で探してたのか？」

驚きと、そしてどこかむず痒い感情を覚えながら俺は八九寺に問う。

この膨大な本の山の内から、たった一人で、俺たちの為にーと。

だが八九寺は清々しくハッキリと「違います」と答えを返した。

「これは私が私の為に探していたに過ぎませんよ。腐った瞳をした阿良々木さんなんてもはや不気味の権化といっても過言ではありませんからね。だからさっさとお二人には元に戻ってもらって、それで私の精神衛生を清らかに保とうという、つまりこれは私の自己満足みたいなものです」

えへへとはにかみながら八九寺は言う。あざとい。あざと過ぎる。

しかしそれは恐らく表裏のない素の言葉で、だからこそ俺は戸惑うしかなかった。

——阿良々木といい、羽川といい、八九寺といい。どいつもこいつもお人好しで、どいつもこいつも俺の調子を狂わせる。俺の——信条を揺るがす。

このリア充共が溢れる腐った三次元な現実も意外と悪くないんじゃないのかと。

そう思わされる事が、しかし俺にとっては歯がゆく、許されざる事で。

その思いはしよせん偽物、仮初めの身体であって初めて得られる仮初めのモノでしかないのだから。

だから俺は——

「……比企谷さん？」

「……っ」

声が出た。

思考を途切らせたそれは心配そうに投げかけられた八九寺の声。

俺は見上げられた眼差しから逃げるように目を逸らし、とりあえず言うべき言葉だけを簡潔に返した。

「まあ、なんだ。……ありがとな」

「へ？」

馬が二足歩行で走り始めた場面を目の当たりにしたような間抜け面を伴って、八九寺は目をぱちくりと瞬かせる。そして、少しの間を空けてからニヤアと嫌な笑みを浮かべると、

「へえ、比企谷さんも意外と素直な所があるんですね。なんですか？ひよっとして健気な私にちよっとだけトキめいてしまったんですか？やっぱりロリコンなんですか比企谷さんは？」

実にウザい顔でウザい口調だった。

これ以上なにかを言って更にウザくなられても面倒なので俺は回れ右して歩き出す。

——ロリコンではない。俺は断じてロリコンではない。

そんな呪詛めいた呟きを繰り返しながら、そして後ろから背後霊の

ように付いてくるニコニコニヤニヤ顔のガキンチョを意識外に追いやりながら、俺は資料探しを再開した。

二十三話

結論から言うと資料探しはほぼほぼ徒労の内に終わった。

せいぜいが八九寺の見つけてきた本が役に立つか立たないかぐらいなもので、しかして他に孤毒蜘蛛についての記述が書かれた本は一つとして見つからず、そうこうしている内にも時刻は早くも午後三時半。俺は取り出した分厚い民謡集を元の棚に戻してから、視線を横に立つ八九寺へと向ける。

「……今日はもうこれで終いだな」

「そうですね。これ以上、時間を費やしても恐らく良い結果は出ないでしょう」

んー、と。大きく背伸びしながら八九寺はどこか疲労を残した声で答えた。資料探しを始めること約二時間。流石に疲れも出てくるというものだろう。

「しかし結局、これといって確信を得られるようなものはありませんでしたね。いくら孤毒蜘蛛がマイナーな怪異とはいえ、少しぐらいは詳細の記された文献があると思ってたんですが……」

「まあ仕方ねえだろ。元々、文献の類は羽川が先んじて探してたんだ。アイツが探して見つからなかったものが俺達に見つけられるとは到底思えねえよ」

そう考えれば、むしろ手がかりになりそうな物が一つ見つかっただけでも大金屋と言える。ならば今日の所はコイツを手土産にして退散という流れでも文句は言われまい。

時間帯を考えるならば、そろそろ羽川と阿良々木も帰ってくる筈だろうしーって、そういえば。

「……戦場ヶ原はどこ行った？」

不意に思い至り、俺は辺りを見渡した。だがやはりというか、あのスパー能面毒舌悪魔超人の姿はどこにも見当たらない。いくら蔵書数が多いとはいえ、同じ目的のブツを探すのならば場所は限られるはずなんだが……

「比企谷さん？急にキョロキョロしだしてどうしました？その死んだ

瞳が相まつてまるで不審者のようですよ。女兒好きなの」

「なんで最後に余分な形容詞を付け足した？……いや、じゃなくて、普通に連れを探してるだけだったの。帰るにしてもアイツを残してここを出るわけにも行かんからな。後が怖いし」

「連れ？ですが羽川さんと阿良々木さんは今は別行動だったはずでは？」

「あー、あいつらじゃなくて。ここには戦場ヶ原つてやつと来たんだ。いや、来たつていうか無理やり連れて来られたと言った方がこの場合は正しいかもしれんけど」

「……なぜ、あの方がここに？」

どこことなく苦みばしった表情の八九寺である。実は知り合いだったりするんだろうか。だとしたら浮かべた表情の意味合いもなんとなくだが理解は出来る。

「わざわざ阿良々木を追ってきたんだとよ。それで、なんか知らんがいつの間にか怪異調査に協力するって流れになってた」

「そうですか。そういう事でしたら私はまあ『阿良々木さんご愁傷様です』と言うほかにありませんね」

なーむー、とかなんとか言いながら八九寺は両手を合わせていた。俺も出来れば阿良々木に祈ってやりたい気分である。もちろん冥福をだが。

「まあ阿良々木の事は正直どうでもいいとして、今はとりあえず戦場ヶ原をさっさと見つけて帰ることの方が先決だ。つーわけで、ほれ行くぞ」

差し当たつてはエントランス周辺に向かえばいいだろう。

凝り固まつた首筋をほぐしつつ、俺は歩みを進める。どうやら外の日差しも幾らか弱まり始めたのか、着いたばかりの頃は利用客で混みあつていたエントランスも今ではちらほらと空席が見える程度にまで空いていた。

なんにせよ好都合だ。見通しの良くなった視界をフルに活用し、俺は戦場ヶ原を探す。あのエキゾチック物質みたいなぶっ飛んだ内面はともかく、容姿だけで見ればあいつは普通に目立つ部類だ。なら

ば、その姿を見つけるのにそれほど苦勞はしないだろう……と。

軽く考えながら周囲を見渡していた俺の視界の内に、しかし戦場ヶ原とはまた別な意味で目立つ部類の人物が予期せず映り込む。

それは、この辺りでは全く見ることはないだろうピンクを基調とした制服を着込んだ一人の女子高生。今朝ぶりに姿を見るだろう完璧超人羽川翼と、見慣れたにも過ぎる外見をした『俺』こと阿良々木暦の凸凹コンビだった。

「あれ？ひよつとして……比企谷くん？」

「……比企谷？」

俺が二人に気付いたのと同様に、どうやら羽川達も俺の存在に気付いたようだ。

まさかの遭遇に驚きを見せる羽川と阿良々木。そして二人はこちらに近づいてきた。

「お前ら、こんな所でなにやってんの？」

「いや、どちらかというそれは僕達のセリフなんだけれど……」

半日ぶりに見る俺の顔はどこか困惑したように俺を見ていた。その光景はやっぱり無条件に気色が悪い。

なので半永久的に阿良々木は視界の内に入れないとして、俺は説明を求めて羽川に視線を向ける。

「奇遇だね、比企谷くん。もしかして目的は私達と一緒にするのかな？」

「みたいだな」

どうやら羽川達も孤毒蜘蛛の資料を探しに来たらしい。

仕事を終えてまたすぐに進んで仕事を抱えこむとは……どうやらこいつらの社畜レベルは俺の遙か上に行くようである。

まあそれはともかくとして。

「……で？そっちは、上手くいったのか？」

「んー……あはは。まあ当たり障りなく、って感じかな」

「そうか」

正直、気にならないと言えば嘘になる。だが俺がどうこうして良くなる案件ではないというのもまた事実だった。ならば奉仕部に関し

てはこのまま全面的に羽川達に任せるほかないだろう。
と、

「ん？比企谷、お前の持つてるそれって……」

ふと気付いたように阿良々木が言う。

その視線は俺の右手に向けられていた。

「あ？……ああ、これか」

蜘蛛がくれ。そんなどこぞの甲賀忍法帳みたいなタイトルの本を俺は二人に手渡す。本日、唯一の成果。とはいえその本自体、俺ではなく八九寺が見つけたものなので成果もへつたくれもないんだけどな。

「八九寺？」

「ああ、俺達が来た時にはもう先に八九寺がここに居たんだよ。それでこの本を渡されたんだが……っていうかちよつと待て。そーいや、あいつどこ行った？」

気付けば、周辺にはまたしてもあのツインテールロリの姿は無かった。

まださっきの本棚の前に居るんだろうか。疑問はさておき、とりあえず戻って探そうと踵を返す俺を、だがしかし羽川の声が引き止める。

「……ねえ、ちよつと待って比企谷くん。真宵ちゃんを探しに行くのもいいんだけど、その前に一つだけ教えて欲しい事があるの」「教えて欲しいこと？」

俺は反芻するように言葉を返す。

羽川はどこか神妙な表情で俺に視線を向けていた。

「比企谷くん、いま『俺達が来た時には』って言ってたよね。確かに俺『達』って。ねえ、それってもしかして……」

神妙な表情はそのままに羽川は含みを持たせたような言い方をする。

だがおかげでーというか今さらながらに俺は思い出す。と、同時に強烈な視線を感じて、俺は反射的にそちらを向いた。

羽川と阿良々木を通り越した向こう側ーその先で仁王立ち、とい

うか、仁王そのものなオーラを発しながら立ちはだかるラスボスの姿。

戦場ヶ原ひたぎ。

まるで図つたかのようなドンピシャなタイミングで、その女はそこに立っていた。

「ーああ。あらあらあら。もしかしてもしかすると……まあ、奇遇ね。そこにおられるのはひよつとして、羽川翼さんではないかしら？」

「っ!!……せ、戦場、ヶ原さん？」

羽川が振り返る。その顔は今まで見たことがないくらいにぎこちない笑みを浮かべていた。続いて阿良々木が振り返り、瞬間最大風速を記録するレベルで一瞬にして顔面を凍りつかせる。

戦場ヶ原は笑っていた。張り付けたような薄い笑みで羽川を見て、そして阿良々木を見る。まるで獲物を前にした蛇のような狡猾な眼光をギラギラと瞳の奥で輝かせながら、戦場ヶ原は言った。

「まさかこんな所で既知の友人に出会えるとは思ってもいなかったわ。ここで会ったが百年目ーいえ、ではなくて晴天のヘキレキと言った所かしら。そうね。そうだね。こうして会ったのも何かの縁、色々と積もる話もあるでしょうし、一先ず場所を移すというのはどうかしら？ねえ、羽川さん？」

「ーねえ？あららぎくん？」

蛇は蛙を一睨み。そうして蛙はなすすべもなく、恭順の意を示すのみであった。

「まず初めに聞いておきたいのだけれど、阿良々木くんはねじり切られるのと斬り刻まれるのではどちらの方が好きなのかしら？」

まるで好きな色を尋ねるような気軽さで、戦場ヶ原は早速とばかりに死刑宣告を告げてきた。

近場の喫茶店に場所を移してからの第一声である。もちろん、その

道中で心づもりをしていた僕は何の気後れもすることなく、流暢に言葉返す。

「待て、戦場ヶ原。お前が僕にどういった不満を感じているのかは重々承知しているつもりだ。それでも、もしもお前の中に一欠片でも僕を信じる気持ちがあるのならば、黙って僕の言い分を聞いてはくれないだろうか？」

「言い分？……そうね。確かに、たとえ甲斐性なしのゴミクズ社会不適合者のドチビであったとしても、一応は言論の自由というものは与えられているものね」

「チツ……!?!い、いや、そうだろうか？だったら」

「ええ、もちろん聞いてあげるわ。だから、その後でねじり切って、斬り刻んであげる」

「……………」

「どうやら認めるのは言論の自由だけらしい。

その冷え切った目が僕を射殺すように睨みつけている。

と、

「せ、戦場ヶ原さん、ちよつと落ち着いて。とりあえず、その右手に持ったコンパスは今ではしまおう？」

「ああ、ごめんなさい羽川さん。私ったら興奮すると無性に文房具に触りたくなるクセがあつて。ええ、大丈夫よ。安心してちょうだい。

『今』はまだなにもするつもりはないから」

なだめる羽川に戦場ヶ原は齒の噛み合わせが悪くなるような微妙なアクセントを残して返答する。

今は。

ということは後からはなにかするつもりなんだろうか？

不思議と両頬がムズムズと疼いてきた。

「……戦場ヶ原さん、あのね。私が言えた義理ではないんだけど、でも阿良々木くんは戦場ヶ原さんのコトを思っただけで話さなかったの。関わる必要のない厄介ごとに戦場ヶ原さんを巻き込むワケにはいかないからって。だから——」

「——大丈夫。解っているわ」

「え?」

「どうせこの男は愚かにも私を心配して連絡をよこさなかったんでしよう? わざわざ羽川さんまで口止めして。なんとなくだけど解っていたわよ。だって阿良々木くんはカツコつけの正義マンだものね」

「正義マンって……」

とんだネーミングセンスだ。

まだ正義の味方といわれた方が嬉しい。

「まあ、だからというワケではないのだけれど、実を言えば私は今回の事についてそこまで怒ってはいないのよね」

「え? そうなのか?」

そのわりにはエラく不機嫌だったような気もしたんだが。

「怒りと不満は別のものよ。挙句に私は勉強会もボイコットされているのだから、少しぐらいは機嫌を害していてもおかしくないでしょう?」

「……そういえばそうだったな」

怒りの本命はそっちだったか。

いや、確かになんの連絡もなしに勉強会を休むのは些かマズかったのかもしれない。少し遅刻しただけでも烈火のごとく毒舌を振りまく戦場ヶ原である。一人、来ない来客を待ちながら過ごす無為な時というのは彼女にとって最もフラストレーションを溜め込む時間だったのだろう。

少し、反省した。

「……ごめん、戦場ヶ原」

「それは何に対しての謝罪なのかしら?」

「なんの連絡も入れなかったこと。気の利かない、それでいて不甲斐ない彼氏だということ。それと……心配かけまいとして、結局心配させてしまったこと」

戦場ヶ原が僕のことを解ってくれていたように、僕も戦場ヶ原のことを解っているつもりだ。

要するに、戦場ヶ原は僕の身を案じてここまでやってきたのだろう。心配したがゆえに単身でこんな遠くの所にまで。それだけで僕

はこいつに平伏叩頭して謝らなければいけない気がする。

頭を下げる僕に戦場ヶ原は「ふーん」と気のない返事を返し、そして、

「そうね。まあいいわ、特別に許してあげる」

「……戦場ヶ原」

「か、かんちがいしないですよっ！私はべつに、下手に出た阿良々木くんなんか优越感を感じたりしてないんだからっ！」

「いや、それちよつとなんか違う気がするんだけど……」

キャラがブレブレな戦場ヶ原さんだった。

まあそれはそれで新しいジャンルが生まれそうな気がしないでもないけれど。

「……あー。それで話は終わったのか？」

話し合いの末の和解が成立した所で、第三者の声が僕らに呼びかける。見れば、どこか面倒くさそうに距離を置いていた比企谷が、タイミングを見計らっていたかのようにこちらに視線を向けていた。

「ああ、いや、ごめん。もう大丈夫だ。悪かったな、僕達の事情で貴重な時間を割いて」

「いや、べつにいいけど……」

心底どうでもよさそうに言う比企谷。それから彼は仕切り直すように小さく息を吐いてから、そしてその視線を戦場ヶ原に向ける。

「それはともかくお前はこれからどうするつもりだ。一応、阿良々木とのアレコレはこれで解消したんだよな。だったらもう帰るのか？」

「そんなわけないじゃない。もちろん事態が解決するなら、地獄の底まで付き合うつもりよ」

「やっぱりかよ……つつても、ウチには空いてる部屋はもう無いぞ？」

「それについては問題はないわ。この辺りには二十四時間営業しているファミレスも多いみたいだし、いざとなったら押入れの中でだって私は寝れるわ」

「お前はドラ○もんかよ」

比企谷は一つ溜め息をこぼし、それから続けて、

「……仕方ねえ。だったら部屋に関しては俺がなんとかする。だから今日の所はウチに泊まってけ」

「いいの?」

「いい。逆にこれでなんかあって面倒事が増えるよりかは幾らかマシだからな」

「……そう。なら、お言葉に甘えようかしら」

聞くからに素っ気ない返事だったが、しかし戦場ヶ原は本心ではないくらい安心していうようだった。僕としても戦場ヶ原が外で寝泊まりするというのは正直心穏やかではない。

だからと言ってなにからなにまで比企谷の世話になるのは心苦しくもあるのだが、まあ、今だけはその好意を甘んじてうけさせてもらおう。

「……ありがとうな、比企谷」

「別にお前から礼を言われる筋合いはねえよ。つーかそう思うのならさっさと身体に戻し方でも見つけてきてくれ。せつかくの夏休みだ。早いところ終わらして俺は夢のインドア生活に戻りたい」

言って、比企谷は視線を逸らす。いつも捻くれている分、もしかしたらこういう直球な言葉や礼に弱いんだろうか。だとしたら今度機会があれば神原にも会わしてやりたい所だ。意外と相性の合うコンビになるかもしれない。

「さてと……それじゃあ、そろそろ帰ろっか?もう少しで日も暮れてきそうだし」

と、窓の外を見ながら羽川が言う。確かに時刻はすでに十七時を回っていた。日の長さを感じる夏といえど、あまり遅い時間に外をうろつくわけにもいかないか。

伝票の紙を持ち、レジスターの前で支払い（とりあえずこの場は僕が出す事になった。もちろん僕の財布から）をする。

その間、

「……………」

「……………」

比企谷と羽川がなにかの本を開きながら、どこか真剣な面持ちで話

し合っていたのが何故か妙に記憶に残った。

二十四話

「どうも初めまして月火さん。私は戦場ヶ原ひたぎ。あなたのお兄さんとお付き合いをさせてもらっている者です」

「……………」

帰宅早々、なんだかよくわからない空気がリビングに蔓延していた。

ソファには呆然とした小町と阿良々木（妹）が。入り口側には今にも頭を抱えそうな阿良々木と苦笑する羽川が、そしてその間で俺は戦場ヶ原の真横に立ち、見合いの真似事をさせられている。

先手を打ったのは戦場ヶ原。

後手に回った阿良々木の妹は前述の通り、呆然と目をパチパチとさせてから

「どい」

「……………」

「どういうことだこのお兄ちゃん野郎ツ!!」

「ぶっ!!」

さながらロケットのように打ち出されたグーパンチが俺の左頬にクリティカルヒットした。

ドゴーンとかいう擬音がつきそうなそのパンチはおまけとばかりに体当たりもセットで追加され、俺は自然と押し倒される形になる。もちろん俺は抗議を向けた。

「っ、いきなりなにしゃがる!!」

「それはこっちの台詞だア！なに？なんなの？お兄ちゃん彼女居たの？そんな素振り今まで一度も見せたこと無かったじゃん！」

知るか。というか本気で知るか。

そんなこと俺に言われても。

「まあまあ、落ち着いてくださいいな月火さん。そのゴミーいえ、お兄さんとは先々月の中頃からの交際になるので、おそろく阿良々木くんも落ち着いた頃合いを待って話を切り出そうとしていたのではないのかしら?」

「はっーぐ、ごめんなさい！ついカッとなつて自己紹介が遅れてしまいました。私は阿良々木月火です、いつも愚兄がお世話になってます！」

阿良々木月火は俺の上からどくなりサラリーマンよろしく頭をぺこぺここと下げている。

どうでもいいけどこれ、完全に損な役回りを押し付けられただけだよな、俺。

「む。お兄ちゃんなにしてんの？戦場ヶ原さんが見てる前なのについてまでも座り込んでないでよ恥ずかしいでしょ！」

「誰のせいだよ……。というかもう何度目になるかもわからんけど、お前まだ居たのかよ。もう本当いい加減帰れつての」

「べーだ。そんなことお兄ちゃんに言われなくなつて明日には帰るもん。今日はちよつと小町ちゃんと色々見て回つてたから遅くなつちやつただけだもん」

ねー、とでも言いたげに顔を見合わせるダブルシスターズ。

君達ほんとうに仲良くなつちやつたのね。お兄ちゃん、すつごく心配。具体的に言えば小町ちゃんが大人の階段登る前に変な前衛的な階段登りそうですつごく心配。

「たはは、すみません月火ちゃんのお兄さん。私が色々連れ回しちやつたせいで月火ちゃんにもお兄さんにもご迷惑かけちゃつて」

「それは違うよ小町ちゃん！私が無理言つて観光案内してもらつたのー！」

「……観光案内ねえ」

「でも、おかげで昨日今日だけで千葉の良い所たくさん教えてもらつちやつた。私もいまや立派な千葉っ子だよー！」

「ほう」

それは聞き捨てならないな。

どれ、ちよつとテストをしてやろう。

「なら、問題。千葉を代表する飲料水といえは？」

「マックスコーヒー！」

「では第二問。千葉で有名なマスコットキャラの名前は？」

「チーバくん！」

「ほお、どうやら基本は押さえているようだな。では最後だ。千葉県民が誰もが一度は耳にしたことのある有名な県民体操の名前は？」

「え？体操？」

きよとんと首を傾げる自称千葉っ子。

やれやれ、仕方がないな。特別に教えてやろうじゃないか。

「ふっ、正解は『なのはな体操』だ。そんなことも知らずに千葉っ子の名乗るとは片腹痛い。せめて千葉の特産品を全て丸暗記してから出直しなおしてくるんだな」

「……なんでお兄ちゃんがそんなに千葉に詳しいの？なんか普通にキモいんだけど」

「うわあ、なんだかうちのお兄ちゃんみたい……」

気付けばダブルシスターズからダブルで引かれていた。

なぜだ。解せぬ。

「ふんだっ。でも私だって一つぐらいお兄ちゃんが驚く知識を仕入れてきたんだから。流石のお兄ちゃんもこれを聞いたら、ビックリすること間違いなしだよ！」

「無駄なことだとは思うけどな。言っておくが千葉に関して俺が知らない事など、ほとんど無きに等しいといっても過言ではない。それでも無謀にも挑むというのならかかってくるがいい！」

「いや、だからなんでお兄ちゃんそんなに千葉に詳しいのよ……」

再びのドン引きである。しかし阿良々木月火は気を取り直すように目に活力を込め、とっておきの知識とやらを自慢気に披露する。

「ふふん、絶対にお兄ちゃん驚くと思うよ。なんとねー千葉県にも『星神神社』があったんだよ！」

じゃああああんと。背景に効果音が鳴りそうな勢いで阿良々木月火は発表した。

だが、

「……星神神社？」

「……え？なにその『初めて聞きました』みたいな反応。え？嘘でしょ？」

愕然とした表情だった。

もしかして、こいつらの地元ではそんなに有名な神社なのだろうか？

ちらりと横目に視線を向ける。

するとその意図に気付いてくれたのか。同じように話を聞いている戰場ヶ原が説明口調で答えてくれた。

「星神神社……確か、町の外れにある神社ね。なんでも天津ミカボシを祭神として祀っているとか。何故か近所では縁結びとか必勝祈願とかで有名なのだけけどね」

「ほお、そうなのか」

「そうなのかーじゃないよ！なんで知らないフリしてるわけ!?お兄ちゃん、高校受験の時に何度も通ってたじゃん！忘れたなんて言わないんだからね！」

猛る阿良々木月火。俺は再び視線を動かし、阿良々木を見る。

阿良々木は苦笑混じりに小さく頷いていた。

「みたい……だな。いや、そうだ思い出した。たしかに行った覚えがある」

「当たり前だ！私と火憐ちゃんだったと一緒に合格祈願してあげたんだから！これで忘れてたなんて言ったら例えお兄ちゃんでも正義の鉄槌を食らわす所だったよ！」

正義の鉄槌と聞いて思い出す。

寝起き。ベッド。金属バット。……そうか、この話はもう終わらせるべきなのかもしれない。

と、内心でガクブルな俺の背後から、それまで会話に参加していなかった羽川が唐突に言葉を向けた。

「月火ちゃん。星神神社と同じものがこの辺りにもあったって、ホント？名前だけが一緒なだけ、とかじゃなくて？」

「へ？……あ、はい。全く同じものだと思いますけど。外観とか、入り口の赤い鳥居とか、瓜二つでしたし」

「……そう。そうだったんだ」

羽川は何事かを察したように深く頷いていた。そして顔を上げる

と、

「ありがとうね。月火ちゃん」

「へ?」

「あ、ううん。こつちの話。……と、そうだ。比企谷くん、サークル活動の事でちよつと話がしたいんだけどいいかな?出来れば戦場ヶ原さん達も一緒に」

「……ん、解った。戦場ヶ原とヒ……阿良々木もいいよな?」
頷く。

戦場ヶ原も同様に同意を示した。

「じゃあ月火ちゃんと小町ちゃん。私達、ちよつと上の方で話があるから、何かあったら呼んでくれるかな?」

「はい、了解です。あ、それと今日の夕食は中華ですから。また腕によりをかけて作らせてもらいますねっ」

「うん、ありがとう。私も話が終わったら手伝いに行くから」
笑みを一つ。そして俺達は二階に上がる。

部屋に入った途端、羽川は開口一番に、

「――孤毒蜘蛛の正体がわかったわ」

信じられないような言葉を発した。

「わかったって……本当なのか、羽川?」

「うん。その正体も、たぶん、この現状の解決策も。まだ推測の段階だから断言は出来ないけどね」

「……べつに推測だろうが憶測だろうがなんだっていい。それよりも教えてくれ、羽川。どうすれば俺達は元に戻る?」

俺ははやる気持ちを抑えながら羽川をまっすぐ見る。

羽川は、けれど申し訳なさそうに眉尻を下げ、

「……ごめん、比企谷くん。言うのはもう少しだけ頭の中を整理させてもらってからでいいかな?わかったとは言ったけどまだ後一つだけ、確認したいことがあるの」

「確認って……んな悠長なこと言ってる場合じゃ」

「落ち着きなさい、比企谷くん」

戦場ヶ原が俺を見る。落ち着いているのか単に無表情なのか判断

に困る表情で戦場ヶ原は向けた視線を羽川に移して、

「……羽川さん。つまりその確認したい事さえ確認出来れば、私達にも話してもらえるのね？」

「約束します。だから、今は私を信じて少しだけ時間をもらえないかな？」

嘆願のような声。見上げられる瞳。

そうして真摯な眼差しを向けてくる羽川から俺は視線を逸らし、一言。

「……ああ、わかった」

どうやら柄にもなく熱くなってしまったらしい。くそ、またしても俺の黒歴史に消したい一ページが追加されてしまったようだった。

と、内心で悶え苦しむ俺の横で、素知らぬツラをした阿良々木が仕切り直すように、

「まあ僕も言わずもがな羽川には全幅の信頼を持って待たせてもらうわけだけれど。でもさ、その確認したいっていう事柄だけでも教えてはもらえないのか？」

「あ、ううん。もちろんそれは教えるよ。というか、私と阿良々木くんは明日も奉仕部の活動で時間が取れないからね。だから、それについては比企谷くんと戦場ヶ原さんに任せようかなって思っていたの」

「俺達に？」

自然と眉根が寄る。

それはそんなに簡単に確認できるモノなのかと疑問を視線に乗せて向ける俺に、羽川はニコリと笑って、

「大丈夫。難しいことではないから。あのね、比企谷くん達にはー」
夜は更けていく。

それは、俺達が共に過ごす最後の夜だった。

二十五話

翌朝。

ようやくの帰宅を前に泣きそうな顔で別れを惜しむダブルシスターズを尻目に、俺と戦場ヶ原は会話もなく、ある場所へと向かっていた。

入り組んだような細い路地を何度も通りすぎ、途中ちらほらと居場所を携帯のナビで確認しながら、そうして辿りついたのは赤い鳥居を入り口に構えたこじんまりとした敷地。

星神社——そこが俺達の目的地だった。

境内を見渡しながら、戦場ヶ原はぽつりと呟く。

「……驚いたわ。本当になにからなにまでそっくりなのね」

「はあ。そんなにか？」

「ええ。実を言うと、少し前に向こうの星神社には足を運んでいたのだけれど、ここはその時見た光景とまるで変わりないわ。むしろ変わりなさすぎて不気味なレベルよ」

珍しく感情の発露した声で戦場ヶ原は言う。

県さえまたいだ遠方の地に突如現れた見慣れた光景。そりやあまあ、少しぐらいは驚きもするわな。

ぼうつと鳥居の前で立ち尽くす戦場ヶ原に先んじて、俺はなんの感慨もなく境内に足を踏み入れる。完全初見ということもあるし、とりあえず狭いながらもぐるりと敷地内を回ってみようと俺は更に一步を踏み出して——

「……ん？」

——奇妙な既視感に襲われた。

年季の入った石畳、苔の生えた石灯笼、敷地面積のわりにやや大きい古ぼけた社。

覚えが無いはずなのに、見覚えのある景色が記憶を刺激する。

俺は……ここを知っている？

「なにをしているのかしら、比企谷くん。道の真ん中で立ち止まったりして」

と、背後からの声で俺はハッと意識を戻した。

同時に奇妙な感覚は霧散する。……まあ気のせいだろ。記憶を探る必要すらない。こんなことで脳細胞を浪費するのも馬鹿らしいしな。

「……どうかした？」

「いや、別になんでもない。ただちよつと狭いなって思ってただけだ」

「え？あなたの器が？」

「ちげーよ。なんでさも当然であるかのようにその言葉が出てきたんだよ」

息を吸うような自然な罵倒におもわず頷いてしまいそうになっていた。

危ない危ない。危うく自虐嗜好に目覚めちゃう所だったぜ。

「狭いつてのは境内の話をしたんだよ」

「なんだ、そつちのことだったの。ええ、確かに少し狭いかもしれないわね。それでも比企谷くんの器量よりかは幾らか広そうだけれど」

「ねえ、なんでもう一回言ったの？それそんなに大事なことだったの？」

「では、社に入りましょう。羽川さんの言うことが正しければ、そこに『例の物』が祀られているらしいから」

「そして無視かよ……」

げんなりと目を腐らす俺をよそに、戦場ヶ原は恐れ多くもズカズカと土足で社の中に入りこんでいた。

俺も周囲に人影が無いことを確認してから、ソツと忍び込む。

腐った木の匂いがむずむずと鼻腔をくすぐった。

「……まるで泥棒にでもなった気分だな」

「どちらかといえばスパイの方が近いような気もするけれどね」

多少ホコリ臭い空間の中を進む。

少し広いワンルームほどの室内、その奥に作られた小さな祠のようなモノの中で、俺達はすぐに『ソレ』を見つける事が出来た。

「これが……」

「……羽川が言ってた『神体』か」

楕円状の物体。それは見るからに古めかしい造りをした『銅鏡』だった。

「机は五列、一列を六つとして横に並べてちょうだい。それと長机は南側に二つ、これも横に繋げて。あとは冊子を一組ずつ机の上に並べ……って、なにをやっていいのかしら比企谷くん？ 私は確か長机は南側に置いてと言ったはずよね。ニワトリでさえ数歩歩くまで覚えていられるようなことを貴方は記憶に留めておけないのかしら？ もしかして健忘症？ だとしたら今すぐにでも病院にかかることをお勧めするけれど」

「……………」

実際に作用するとしたならば確実に致死性のあるだろう毒舌を振るいながら、黒髪の美少女ー雪ノ下雪乃は、実に凜とした立ち振る舞いで黒板の前に佇んでいた。

対する僕、比企谷八幡の皮を被った阿良々木暦はといえば、それはもう、誰が見てもすぐ解るほどに疲労困ぱいとしながら机を運搬する作業に従っているーいや、従じているというか、この場合は従じさせられていると言った方が正しいのかもしれない。

誰に、なんて野暮なことはこの場合においてもはや言うまでもなく。その代わりに辟易とした溜め息を吐いてから、そうして無意識に眩きをこぼした。

「……………なんで、こんなことに」

「あら、愚問ね。人手が足りないという現状は前もって知らされていたでしょう？ それでいて男手も少ないのだから、貴方がこういった力仕事の役割におさまるのは至極当然の結果だと思っただけ」

「……………」

聞こえるか聞こえないか程度の声量で呟いた独り言にまで、雪ノ下は律儀に答えを返してくる。どうやら、そういう所まで雪ノ下は戦場ヶ原に似ているらしい。

まさか、あいつみたいなの高校生女子があいつ以外にも存在していたなんてなーと

若干戦慄を覚えなくてもない心境に陥りながら、僕は雪ノ下に視線を向ける。

そして汗ひとつかいていないその涼しげな表情に向け、なんとはなしに言葉を向けた。

「なあ雪ノ下。お前ってさ、もしかして蟹が嫌いだったりするか？」

「……は？蟹？」

この奴隷野郎はいきなりなにを言っているのかしら、とでも言いたげな視線に「いや、やっぱり何でもない」と言い直してから、続けて言葉を向ける。

「というか、それよりもさ。学校に来て早々に俺、は力仕事に従っているわけだけど、この作業は一体いつまで続くんだ？かれこれもう一時間以上は経ってるだろう？いい加減、手とか足とか腰とかが限界に近いんだけど」

「……そうね。準備だけで言えば後はこの教室を含めて、四クラスほどこかないから。早ければもう一時間ほどで終わる計算になるでしょうね」

「四クラス……」

まだそんなに残っているのか……。

知りたくも無かった事実がドシリと落ち込む。そんな気分を引きずられるように、心なしか身体にまとわりつく重力までもが更に圧力を増したような気がしてきた。

「……働くって、意外に大変な事なんだな」

「当たり前でしょう。なんの労力も要さない労働なんて、それこそただの職務怠慢でしかないわ。良かったわね、比企谷くん。貴方はいま、その年若さで非常に貴重な体験が出来ているのだから」

「……………」

慈しむような笑みとは裏腹にその言葉の響きにはシビアな辛辣さが混じり合っていた。どうやら雪ノ下は羽川の天使のような笑みと戦場ヶ原の悪魔のような毒舌の両方を兼ね備えたハイブリッド型であるらしい。

世の中にはまだまだスゴイヤツが居るんだなあ……。そんなことを考えながら不思議と達観した心持ちで僕は散漫な動きで作業を再開する。

と、

「……やっぱり、皮肉は言わないのね」

「はっ」

ささやくような小さな呟きに作業を止める。

顔を上げると雪ノ下が無表情に近い、それでいてエッセンス程度に困惑を混ぜたような面持ちで僕を見ていた。

「雪ノ下……う？」

「……いいわ、比企谷くん。労働はたしかに尊いものだけれど、だからといって過重労働は愚の骨頂だものね。無理して怪我でもされたら面倒だし、仕方がないけれど少しでも休ませよう」

「……う？まあ、雪ノ下がそう言うんなら遠慮なく休ませてもらうけど」机を下ろす。腕の節々からは痺れるような痛みが発生していた。

「……何ヶ月ぶりだろうな。筋肉痛なんて」

春休みの時はおろか、その後も後遺症のせいかこういった痛みとは無縁だった僕だ。確かに辛くはあるものの、しかし不思議とその辛さも痛みもどこか懐かしい。

自分が普通の人間であるというただただ実感出来る。

「……比企谷くん。たしか以前も言ったと思うけれど、その何も無い所でニヤつく行為をぜひとも止めてくれないかしら？ 実に気味が悪いわ」

「え？もしかして笑ってた？」

「……………」

無言の肯定に僕は急いで口元を隠す。

恥ずかしい。絶対に見られてはならない変な癖を他人に間近で目

撃された時ぐらいの羞恥心だった。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………あー、そういういえば羽川と由比ヶ浜はどこにいったんだ？」

もうギブアップだ。痛々しい静寂に耐えかねて、僕は雪ノ下言葉
を向ける。

彼女は冷え切った眼差しはそのままに口を開いた。

「彼女達には別室で雑務を任せているわ。まあ由比ヶ浜さんともか
く、羽川さんには分不相応な仕事を任せて申し訳ない限りではあるけ
れど」

「分不相応？」

なぜかその言い方が気になった。

反射的に問いかけを向ける。すると雪ノ下はすぐに見て取れる程
に険しい表情を浮かべ、こちらを睨みつけてきた。

「あなた……………本当に何も知らず、羽川翼と知り合ったの？」

「ど、どういことだよ？」

「どうもこうもないわ。貴方が彼女の才能も知らず、ただ彼女を偶然
知り合った普通の女子高生としてしか見ていないのだとしたら、それ
がどういう理由であれ愚か者だと罵倒されても仕方がないというこ
とよ」

雪ノ下は恐らく初めて見せるだろう真剣な表情で僕を見据えてい
た。

その迫力に僕は息を呑む。

彼女は淡々と語った。

「……………名前を聞いて初めは驚いたわ。まさか『あの』有名な才女が、
ひょっこり目の前に出てくるなんて思ってもいなかったもの。だから、
最初は同姓同名の人違いだと思ってた。そんな人が貴方みたいな
人間の腐ったような男と知り合いだなんて到底考えられなかったし
ね」

「……………」

人間の腐ったって……比企谷は普段どんな目で見られてるんだろうか……。

それに羽川。アイツもアイツで、只者ではないとは知っていたけれど、一体全体、地方に住んでる田舎暮らしの一女子高校生の名前が、どうしてこんな異境の地にまで伝わっているんだろうか……。

驚きを通り越してただただ閉口する僕をよそに、雪ノ下はつづける。

「でも、昨日調べてわかったわ。彼女が真正銘の羽川翼であることが。彼女が本物の天才であることが。彼女がー」

ー姉さんをも凌駕する人物であることが。

そう言う雪ノ下の瞳には落胆にも似た失望の色が現れていた。

まるで小さな自分を恥じるように。届きようなない希望から目を逸らすように。

彼女はその小柄な身体を短く揺らした。

そして沈黙。

喉の奥の辺りがむず痒くなるような居心地の悪さに、僕はゴクリと唾を飲み込んで、

「……あー、その、羽川ってそんなに有名人だったのか？ だったら、今のうちにサインとか貰っておこうかな。あ、あははは……」

投げかけた乾いた笑いに返事はない。

ただ一つだけ、蝶の羽ばたきのような溜め息をこぼすと雪ノ下は顔を上げ、

「……もういいわ。つまり私が何を言いたいかというと、貴方は彼女との付き合いをもっと真摯に考えるべき、という事よ。もしも下衆な考えで羽川さんに関わろうというのなら尚更。発情期のチンパンジーが人間に恋をするようなものよ。身の丈と、そして身の程を弁えるべきだわ」

「チンパンジーって……」

せめて人間で例えてくれないものかなあ……まあそれだけ不釣り合いであるという事実を強調しているのだろうけれど。

ともかく、冷たさと鋭さを伴った眼差しに僕は小さく頷きを返し

た。

「……ああ、解ったよ。ようするに、安易な下心は身を滅ぼすつてこと
だろ？もちろんそんなつもりなんて無いけれど、でも肝には命じてお
く」

「そう」

素っ気なく返事を返し、雪ノ下は備え付けの時計を見上げた。

休憩を入れてからまだだいたい五分ほどしか経っていないだろう。
そうだな。次の作業の為にも今はゆっくりと身体を休めて体力
をー「もう休憩は充分ね。さあ、作業を再開しましょう」ー温存
しているヒマなどなかったようだ。

澁々と立ち上がる。

と、雪ノ下に背中を向けた所で彼女は呟くように言った。

「それとーいい加減、由比ヶ浜さんとも和解しておきなさい」

「え？」

不意打ちにも過ぎる言葉。再び振り返ると雪ノ下は優雅に腕を組
みながら、涼やかな顔で僕を見ていた。

「気付かないとでも思っていたの？彼女、昨日からずっと様子がおか
しかったわ。特に貴方の前では」

「う……」

「いい加減、鬱陶しいのよ。この際、由比ヶ浜さんの様子が変わっても比企
谷くんの様子が変わっても構わないわ。それでも『二人揃って』視界の内
でギクシャクされるのは勘弁ならないの。何が理由でそうなってい
るのかは知らないけれど、可及的速やかに正常に業務だけはこなせる
ようにしなさい。これは部長命令よ」

「……はい」

何もかも見通していそうな透き通った眼光に僕はなすすべもなく
頭を垂れた。

雪ノ下雪乃。忘れていたが、彼女は比企谷が最大限に警戒しろと嚴
命した要注意人物だったのだ。

その片鱗をまざまざと見せつけられた気分だった。

「まあでも心配する必要はないわよね。比企谷くん、そういうの得意

でしょう？謝罪とか、土下座とか、切腹とか」

「お前は最終的に自殺しろと言いたいのか!？」

責任の取り方が武士すぎる。

というか、

「そんなことしなくてもなんとかしてみせるさ。元々、俺、が蒔いた種だ。自分のしでかした事ぐらい自分でケジメをつけてみせる」

「そう。なら頑張りなさい。期待しないで待っているわ」

小さな、けれど柔らかい笑みを雪ノ下は薄く口元に浮かべる。

それを見て、僕の脳裏にふと一つの想像がよぎった。

無意識に口が動く。

「……雪ノ下。お前ひよつとして、俺、達の事を心配してくれてたのか？」

「っ……なんですって?」

一瞬見開いた目は、しかしすぐにキツく細められる。

瞬間、雪ノ下の舌剣は振り抜かれた。

「貴方、私の話をちゃんと聞いていたのかしら?心配するとか心配しないとか以前に奉仕部の活動に支障をきたすと私は言っているの。事実、昨日からの作業効率は目に見えて悪いものだったわ。それを改善しようと思うのは必然の考であるし、そもそも私は奉仕部部长として課せられた義務を果たさなければいけないの。それをなに?言うに事欠いて心配してたのかですって?そんな妄言を吐くヒマがあるのなら可能な限り早く問題の解決に労力を割くべきだと私は思うのだけれど、貴方は違うのかしら。第一、貴方には自覚が足りないのよ。思慮と言い換えてもいいわ。だいたいにして貴方はー」

……後悔先に立たず。止まる事を知らない雪ノ下の論舌に晒されながら、僕は深く深くうなだれるのだった。

二十六話

「ーはい、みんなお疲れ様でした」

生徒会一同が会する中で、その朗らかな声が作業の終わりを宣言した。

会の代表者ー城廻めぐりは柔和な笑みを彼ら彼女らに向けている。僕の知らない所で色々と苦労もあったのか、生徒会の面々は業務からの解放を心の底から喜んでいるようだった。中には打ち上げの企画を嬉々として話し始める生徒も居る。委員会(クラス委員は別として)や部活動とは縁遠い位置で学校生活を送っていた僕からしてみれば、それは幾らか新鮮味のある光景でもあった。

と、周囲に劳いの言葉を向けていた城廻の視線が不意にこちらを向く。

彼女は少し離れた所で様子を見ていた僕達奉仕部組に歩み寄り、

「雪ノ下さん達もお疲れ様でした。それとありがとうね。せつかくの夏休みなのに生徒会の仕事を手伝ってくれて」

「いえ、お気になさらず。私達はただ定められた部活内容に沿って活動したまですから」

「それでもお礼は言わせて。実の所、二日っていう期日じゃあ間に合わないと思っていたの。それなのに気付けばきっかり仕事が終わってて、先生達も驚いていたぐらいなんだから」

「それは……羽川さんのおかげです。彼女という助力があったからこそ、恐らく作業は停滞することなく進んだんでしょう」

雪ノ下は珍しくもハッキリとしない声音でそう言った。それはある種卑屈じみた独白だったのかもしれない。けれど、その言葉はどうしようもなく間違っていると僕は知っていた。

自然と笑みが浮かぶ。

雪ノ下の隣にはそれが当然であるかのような顔で羽川が立っていた。

「ううん。それは違うよ、雪ノ下さん。だって一人の力なんてたかが知れてるもの。生徒会の人達が居て、比企谷くんが、由比ヶ浜さんが、

それに雪ノ下さんが居て、みんながみんな協力して頑張ったからこの結果が生まれたの。それが誰か一人のおかげだなんてことは絶対に無いわ」

「……羽川さん」

雪ノ下はどう反応したらいいのか解らないような表情で俯き気味に羽川を見ていた。

羽川は笑う。

まるで困っている妹に優しく接する姉のように彼女の頭に柔らかく触れ、

「だから、そんな寂しいこと言わないでよ。一緒に頑張って、一緒にやり遂げたんだから、一緒に喜びましょう？だって私達はもう友達なんだから」

「友、達」

その時、雪ノ下が浮かべた表情をどう形容していいかは解らない。だけど、それが決して嫌なモノではないという事だけは確かに確かなものだった。

雪ノ下が羽川に対して抱える感情を僕は知る由もないけれど、あの様子ならば何の心配もいらぬ。なら、あとは『僕と彼女』の問題だけだ。

一人、更に僕達から少しだけ距離を置いて俯いている少女の元に僕は行く。

そして声をかけた。

「由比ヶ浜」

「っ……」

ピクリと震える身体。緩やかに顔を上げた彼女はとって付けたような笑みを浮かべている。

「ど、どしたの、ヒッキー？」

揺れる瞳は僕を映しているようで映していない。その先には恐らく本当の彼が映っているんだろう。由比ヶ浜の知る本当の彼が。

だけどそれでいい。今はそれでいい。

だから僕は、今この時だけは『比企谷八幡』としてではなく『阿良々

木曆』としてこの言葉を彼女に向けよう。

「……大丈夫だから」

「え？」

「今はまだ、僕から由比ヶ浜に向ける正しい言葉なんて見つからないけれど。でも、大丈夫。じきに全部元に戻るから。きつとー」

それは少し卑怯な言葉なのかもしれない。よけい彼女を混乱させる言葉だったかもしれない。けれど他に言葉は見つからなかったから、だから僕は僕の言葉で彼女に告げた。

「きつとー由比ヶ浜の知る比企谷八幡を取り戻してみせるから」

「っ……!!」

返事は無かった。

唐突に過ぎた言葉だということは理解している。何も知らない由比ヶ浜にとって、僕の言葉はまるで意味を成さない戯言にも聞こえるだろう。

それでも、無駄だとしても、僕には言葉にして彼女に意志を伝える事しか考えつかなかったのだ。

静寂の中でただただ由比ヶ浜を待つ。

彼女は視線を落とし、口を閉ざし、瞼を閉ざし、思考を重ね、逡巡を重ね、躊躇して、そして強く制服の裾を握りしめてー

「……わかった」

ーやがて、小さく頷いた。

「……そうか。なら良かった」

笑いかける。と、彼女は俯かせた顔を再び上げた。

まだぎこちない、だけど偽物ではないそれは本物の、

「うんっ」

比企谷八幡ではなく阿良々木曆に向けたー初めての笑顔だった。

日が暮れかけていた。

人通りが無い薄闇の路地を僕と羽川は歩いている。コツ、コツと。地面を叩くローファアの音だけが路面に響いている。

しかし、やがてはその音すらも止み、僕達は赤い鳥居の前で立ち止まる。

視線の先には見慣れた人影が二つ。

僕はカラカラの喉を震わせた。

「待たせて悪かったな、二人共」

まるで一枚の写真を前にしたような錯覚を覚えながら、こちらを見る『僕』と戦場ヶ原に声をかける。

初めに口を開いたのは戦場ヶ原だった。

「いえ、気にしないで阿良々木くん。べつに私を待たせた秒数分だけ阿良々木くんを針のムシロに座らせようとか、ましてや羽川さんと散歩デートを楽しむ阿良々木くんを考えうる限り非道な方法で痛め付けようとか、決してそんなことを考えてはいなかったから。ええ、安心してちょうだい」

「いや、その言葉からは絶対的に不安しか生まれませんが……」

姿形は変われど、戦場ヶ原の僕に対する毒舌だけはやはり不変なものだった。

なんだろう。下手をしたらこいつは僕が脳みそだけの存在になつたとしても平然とした顔で罵ってきそうな気がする。

「まあ正直に言えばそんなに待っていたわけでもないんだけどな。つか、んなことより聞かせて欲しいんだが、わざわざここを集合場所に選んだってことはそれなりに理由があるってことなんだよな？」

「ん？ああ、実はその事については僕もまだ何も知らないんだよ」

比企谷の問いに僕は横目に羽川を見る。

『一時間後、星神社に集合』——その文面を送信した本人は、今は大きめのシヨルダーバッグを手に、神妙な表情で社に目を向けていた。

「……『中』に入ってから全部説明するよ」

短く、ともすれば簡潔に答えて、羽川は足を進める。

その後ろを僕達は互いに顔を見合わせてから黙って追従した。

——思えば、この時に僕は気付くべきだったかもしれない。羽川が見せたその些細な異常に。その真意に。

「阿良々木くんは『まつろわぬ民』って知ってる？」

社の中、外から入る日差しを遮断する作業に意識を向けていた僕に羽川は突然そんなことを言ってきた。

まつろわぬ民。聞いたことがない言葉だ。なにかの伝承かなにかだろうか？

「いや、知らないけど」

「じゃあ比企谷くんは？」

「一応、聞いたことはある。確か——」

「大和時代に生まれた、朝敵を意味する蔑称ではなかったかしら？」

「……………」

比企谷の言葉を遮ったの聲。戦場ヶ原は手に持った黒布を窓部分に貼り付けながら、平然とした顔で作業を続けていた。

黙りこくる比企谷に羽川は苦笑を向け、

「うん、正解。まつろわぬ……つまり従わないっていう意味だね。地方によってはまつろわぬ者、まつろわぬ鬼とかつて伝えられているけ

れど、まあ広く捉えればどれも同じような意味として使われているかな」

「へえ……」

「ちなみにまつろわぬ民が信奉していた神様の名前は天津ミカボシ。彼らはその神を畏怖と敬意をもって『天星蜘蛛（あめのほしぐも）』と呼んでいたそうよ」

「あめのほし……ぐも？」

その響きがどうしようもなく頭に引つかかった。

まさか……と、振り返る僕に羽川は小さく頷き、続けた。

「それが時を経て、様々な伝承を経て、そうして埋もれた歴史の中でその名すら変えて現代に残ったものが――孤毒蜘蛛。私達が探していた怪異の名前だよ」

「いや……いやいやいや、ちよつと待ってくれ、羽川。ということは孤毒蜘蛛は妖怪の類である怪異ではなくて、つまり元は神様だったということになるのか？」

「そういうこと。まあ要するに名称が変わっただけだからね。孤毒蜘蛛はいわゆるニツクネームみたいなものだよ」

「ニツクネームって……」

罰あたりにも程がある。神様の名前をそんな気まぐれに変えていものなのだろうか？

「あはは、あんまり良くはないよね。でも怪異は呼ぶものではなく、呼ばれるものだから。そうして人の願いを最も集めやすい形に帰結するのは自然な流れだよ」

「……なるほど。だから蜘蛛だったのね」

納得したように言うのは戦場ヶ原だった。

ウンウンと頷いているところ悪いが、僕には全くもってなるほどな考えは浮かんでこない。見れば、比企谷も僕と同じように眉根にシワを寄せていた。

「まつろわぬ民は他にも土蜘蛛という蔑称で呼ばれていたわ。人扱いすらされず、存在すら忌むべきものとされたそんな彼らが神を蜘蛛として信奉するのは当然の結果と言えるでしょうね」

「……ん？それって普通は逆じゃないか？蔑称として蜘蛛と呼ばれているなら、むしろ蜘蛛自体を嫌忌しそうなものだけけれど」

「……はあ」

「え？」

何故か馬鹿を見るような目で見られた。おまけにあからさまに溜息まで吐かれた。

え？なにか変なこと言ったか、僕？

「そうね。なら例え話をしましょう。ある日、比企谷くんが周囲からヒキガエルと呼ばれるようになったとします」

「おい、急に例えになってない例え話をするのはやめろ。というか阿良々木で例えろよ。なんで俺に振った」

「あら、これは失礼。じゃあ阿良々木くんがヒキガエルと呼ばれるようになったとします。阿良々木くんはそれでカエルの事が嫌いになったりするかしら？」

「……あー、いや、それは」

不思議と即答は出来なかった。

まあさすがにカエルカエルと呼ばれ続けたら見るのも嫌になる可能性もあるけれど、しかし逆に言えば疎まれるカエルを疎まれる自分と重ねてシンパシーを感じるようになる可能性だってある。

改めて聞かれてみると、それが簡単に是非を決めれる問いではないことがわかった。

「断言は出来ないでしょう？」

「まあ……そうだな。けど、だからってそれが蜘蛛を信奉する理由にはならないんじゃないのか？」

「……いや、そうでもないな」

なんとなくムキになって反論する僕に今度は比企谷が異を唱えた。話を聞いていてなにか思い付いた事があったのか。比企谷はちらりと一瞬だけ戦場ヶ原を見てから、淡々と言葉を紡ぐ。

「確かに蜘蛛はまつろわぬ民達にとって屈辱の蔑称だったが、同時にそれは朝廷に敵対する意志を示す証としても名前が広まっていたからな。蜘蛛の名を冠する奴らが旗印として蜘蛛を祀りあげるのとはな

んら不思議なことじゃない。……まあ、実際にまつろわぬ民が蜘蛛を神様に据えたのは別の所に理由があつたんだろうけどな」

「別の理由……?」

僕は問う。

比企谷は——何故か自嘲気味にその口元を歪めていた。

「簡単な話だ。理不尽に迫害された奴らが神様を使って考えることなんて大概にして二つしかない。一つは気休めの救いを求める。そしてもう一つは——」

「——復讐ね。それもただの復讐じゃない。朝廷が忌むものとして自分達に冠した蜘蛛そのものを使って、彼らは朝廷を呪い殺そうとしたんでしよう。毒を持って毒を制す。幼稚な考えだわ」

「復讐」

呪い。毒。人の悪意を集めた蜘蛛の猛毒。それは——どんなに悍ましいものなのだろう。

想像したくもない、想像を絶する業。

身が竦むようだった。

「……まあ、でも、その復讐も結局は成し遂げられていないだけだね。だから今のはあくまでも推測の域の話。むしろ今の状況で一番大切なのは、孤毒蜘蛛が人を呪う神様でありながら、人を救う神様でもあるということだよ」

「呪って、救う?なんか矛盾してないか、それ?」

「じゃあ違う側面から考えて。孤毒蜘蛛はつまり、人の願いを叶える神様なの。呪いも救いも、元を辿れば人の願いから生まれたものでしょう?」

「……ああ、なるほど」

ここにきて、恐らく初めてちゃんと理解出来たかもしれない。

願いを叶える。……え、でもそれはつまり。

「もしかして僕達の入れ替わりも、つまり誰かの願いが叶えられた結果ということか?」

「……うん。多分、そういうことになるね」

「……………」

僕と比企谷の入れ替わり。何がどうしてこんなことになったのかと最初は嘆きもしたが、しかしようやくその原因がハッキリと判明したのだ。怪異現象が怪異によるものであるならば、それには必ず解決策がある。

戦場ヶ原ひたぎに重さが戻ったように、羽川翼が自分を取り戻したように、千石撫子が蛇から救われたように、八九寺真宵が呪縛から解き放たれたように、怪異が起こす現象には必ず終わりがあるはずだ。

一筋の希望が見えてくる。――ただその反面、増えた希望の代わりとでもいうようにまたしても一つの謎が増えてしまったワケなのだから。

叶えられてしまった願いをどうにかする方法なんて、本当に存在するののか？

「もちろんあるよ。シンプルで、簡単な方法が一つだけ」

「なっ、本当か羽川!？」

「うん。……つまり、孤毒蜘蛛に捧げた願いを返してもらえばいいのよ。願いを叶えた本人の元に」

一足す一は二、とでも言うようにあっさりと羽川は言った。

だが当然、僕は間髪入れずに反論を返す。

「願いを叶えた本人って……いや、でもそいつを探し出すのはさすがに無理だろ？手掛かりだって何も無いし、それとも願いだけを取り出す方法があるってのか？」

「それは無理だよ。たぶん、本人の願いは本人でしか取り除けない。だってそれはその人にとってその人だけの願いなんだから」

「だったら」

「違うわ。……違うのよ、阿良々木くん。そもそも探す必要なんてないの。だってその人はもうこの場に居るんだもの」

「……え？」

羽川は僕から視線を外した。

それからゆっくりとその視線が滑っていく。僕はつられるようにその行く先を追った。

やがて、それは一人の男に向けられる。

「ねえ、そうでしょう……比企谷くん」
「……………」

言葉が出て来ない。

無表情の比企谷はただ冷め切った瞳で僕を見ていた。

二十七話

「……どういうことだよ、羽川。比企谷が、この状況を願ったって」
「……………」

羽川は俯くだけだった。

どこか辛そうに、どこか申し訳なさそうに眉尻を下げながら、彼女は言葉を探すように視線を彷徨わせる。

ある意味衝撃だった。

羽川がこんなにも狼狽している姿は初めてだったから。

「……比企谷、羽川が言ったことは本当なのか？」

「……………」

答えない。

言葉の代わりというように視線だけが一瞬向けられ、次いで比企谷は羽川を見た。

その唇が最小限の動きで上下する

「羽川、俺がこの状況を願ったっていう根拠はなんなんだ？」

「……」一つは、孤毒蜘蛛の性質だよ。孤毒蜘蛛は人の持つネガティブな感情、深い心の闇に反応して、その内にある秘められた願いを汲み取るの。そして孤毒蜘蛛は今、比企谷くん——比企谷くんの心、精神に寄生している」

心の闇に反応して、寄生する。比企谷自身から伝え聞いた忍の言葉だった。

その言葉が正しいのであれば、それは確かに根拠の一つとしてなりうる。

「けど、それはあくまでもあの幼女がただ言ったことなだけだろ？もしかしたら俺じゃなく、阿良々木に孤毒蜘蛛が憑いていた可能性だってある」

「それはありえないの。何故なら孤毒蜘蛛は依り代となる神体を媒体として人の心に宿るから。そして私達の町の星神社には神体が無い」

「神体が無い？」

驚きを見せた僕に羽川は領きを返し、

「実は私、以前ボランティアで星神社の清掃を手伝ったことがあるの。その時に社の中も掃除したんだけど、そこに神体は無かった。気になって試しに神主さんに聞いてみたら『何年か前の地震で落ちて割れてしまった』って。だから、私達の星神社にはもう孤毒蜘蛛は居ない。もし孤毒蜘蛛が憑くのだとしたら、それは神体があるこの町に住む比企谷くんしか考えられないのよ」

「……………」

神の居ない神社。

神の居る神社。

だからこそその確認だった。星神社がこの町にあると知った時には恐らく羽川は気付いていたのだろう。その答えとも言えるべき結論に。

「忍ちゃんが言っていたのよね。イトを辿れって。多分それって蜘蛛の吐く『糸』ではなく、思惑の方の『意図』だったんだと思う。どうやって比企谷くん達が入れ替わったのかじゃない。『どうして』比企谷くん達が入れ替わったのか。視点が違っただけ。私達はそこに目を向けようとしていなかったのよ」

「視点が違った……………ね。じゃあ聞くがな、羽川。俺は一体なにを願ったって言うんだ？俺が、怪異になにを願ったって言うんだ？」

比企谷の願い。孤毒蜘蛛に彼はなにを願い——そしてなにを求めたのか。

「……………これはあくまでも私の憶測でしかないけれど、比企谷くんは恐らく自分に無いものを求めたのだと思う。いえ、無いものではなくて、心の奥底に捨て去ってしまったもの。自分ではもう絶対に手に入らないと諦めてしまったものを。だから、孤毒蜘蛛は反応した。その比企谷くんの想いに。でも同時に貴方は知っていた。その想いは『比企谷八幡が比企谷八幡である限り』叶わないと。それは多分、比企谷くんの強い理性のようなものがそう思わせたのかもしれないけれど。そうしてある種の呪いとも言える強迫観念が、貴方の願いを歪ませたのよ。自分の持っていない『何か』を持つ誰かに『自身が成る』とい

う願いの形に」

「それが……僕？」

「うん。怪異は怪異を惹きつける。阿良々木くんは元々、怪異との関わりも多かったから。だから接点の有る無しに関わらず入れ替わりの対象に選ばれたのだと思う。比企谷くんの願いを体現するモノとして」

「……………」

比企谷はなにも言わなかった。

僕も、なにも言えなかった。

羽川は辛そうに目を伏せたまま、戦場ヶ原は静観を保ったまま、僕達の時間は止まる。

——それからどのくらいの間が経ったのだろう。未だに口を開けないでいる僕の目の前で、大きな音を立てて突然比企谷が座り込んだ。足の骨が無くなったかのように足を投げ出して、彼は左手で顔を覆っていた。

「比企、谷？」

「……笑えねえ。結局、全部俺のせいだったってわけか。まるで笑えねえよ。ここまで死にたくなかったのは初めてだ。むしろ今すぐ首くくる縄が欲しいまである」

掌で隠された比企谷の顔がどんな表情を浮かべているのかはわからない。

ただ僕はその声が泣いてるようにも思えた。どこかおどけた風の言葉だというのに、その内に秘めた感情はどこか悲しく、虚しい。

自分が吸血鬼になったと知ってしまったあの頃の僕のように、比企谷は涙は流さず心で泣いているようだった。

「……………」
「……ごめんなさい、比企谷くん。私はあなたの心を土足で踏みにじつたの。結果の為だけに、あなたの心を暴くようなことをしてしまった。ごめんなさい。本当にごめんなさい」

「べつに羽川が謝る必要なんてねえだろ。お前はお前でやるべき事をやっただけだ。責められる謂れはない」

それにな——と、比企谷は続けた。

「俺はお前の主張を百パーセント信じたわけじゃない」
「え？」

「お前の推測は、お前が言っていた通りあくまでも推測でしかないってことだよ。だから俺はお前の言葉を全部信じてやらない。俺はたとえそれが無意識下の願いだったとしても、俺は俺が今まで抱いてきた『信条』を信じるだけだ」

比企谷が信じた信条。それは果たしてどんな想いなのか。比企谷八幡ではない阿良々木暦には果たしてそれがなんなのかは解らないけれど、でもまあー

「ーそれでいいんじゃないか？」

と、僕は言った。

「比企谷は比企谷で、僕は僕だ。だから僕には比企谷の心なんて解らないし、お前だって僕の心なんて解らない。信じるものだってきつと違うだろうさ。けどー信じるものを信じたいという想いは多分同じだと思うから。お前はお前の信じる通りにすればいいと僕は思う」
結局、比企谷の願ったモノさえも僕には解らないけれど。それは解らないままでいいのだろう。

比企谷の想いは比企谷だけのものだ。

僕の想いが、僕だけのもののように。

「……さて、じゃあ羽川。準備の続きをしよう」
「準備？」

「そうだ。僕と比企谷が元に戻る為の準備。そもそも、その為に僕達はここに来たんだろう？」

「……そうね。確かにその筈だったわね」

それまでの沈黙を破り、戦場ヶ原が言った。

……どうでもいいけど、その手に持った僕の親指くらいなら簡単に切断出来そうな裁縫ばさみがそこはかとなく怖い。

いや、今回に限っては正しい用途として使われていると解ってはいるのだけれど。

「んん？どうかしたの阿良々木くん？なんだか無性に切られたような顔をしているけれど」

「それは確実にお前の勘違いだ！というか切られたような顔ってどんな顔だよ!？」

「虐げられたような顔をしているけれど」

「やめろ！虐げたような顔で僕を見るな！」

「冗談よ。だって私と阿良々木くんは切っても切れない縁で結ばれているのだからね」

「僕は今すぐにでもその結び目を切りたい気分だけどな……」

溜息を一つ。

やはり戦場ヶ原ひたぎだけはどこまでもいっても戦場ヶ原ひたぎであるようだった。

なんだよその不安定な安定感は。

末恐ろしすぎる。

「まあ、というわけだ比企谷。いつまでも座ってないで仕事の続きをしようぜ。雪ノ下も言ってたぞ？労働は尊いものだってな」

手を伸ばす。

比企谷はその手をどこか不機嫌そうに見ていた。

それはいつもの比企谷のように、いつもの比企谷らしい表情で。

そして彼は気怠そうに言った。

「……あいにくと俺の信条の一つが『絶対に働かない』なんでな。労働が尊かろうが素晴らしかろうが知ったことじゃない。俺は俺の信条を優先させてもらうまでだ」

……どうやら、どんな状況でもブレないのは戦場ヶ原だけじゃないらしい。

ひんやりと冷たい掌を握りしめながら、僕は一人、そんなことを思った。

蠟燭の灯火だけが辺りを照らしている。

遮光の済んだ室内の中央で比企谷は一人で立っていた。

神前の儀式。そのどこか厳かな雰囲気を感じながら、僕は囁くような声量で羽川に言葉を向ける。

「……羽川。本当にこれで上手く行くのか？」

「蜘蛛がくれー真宵ちゃんが見つけてくれたあの史書に書かれている事が確かなら、この手順でいいはずよ。あそこには神様の祝福を受ける儀式の他に、裏切りものからその祝福を取り上げる手段も書かれていたから」

祝福を取り上げる。要するに破門のようなものだろうか？

昔の人が神という存在をどれだけ崇拜し、重視していたかは知っている。だからこそ、彼らにとってそれは死と同等ほどの業だったに違いない。

昔の人の絶望が、今の僕達の希望と思うと少し複雑な気分にはなるけれど。

今はーこの希望に縋るしかない。

「でも……これで、ようやく元に戻るのか」

たかが三日間、されど三日間だ。

思えば色々と濃密な時間だったような気もする。そりゃあ、あの地獄のような春休みやゴールデンウィークに比べればなんてことのない事件ではあるけれど、それでもあの時は自分が他人のフリをして生活するなんてことは無かったのだから。

孤毒蜘蛛。人の願いを叶える神様。

その真相に辿りつくまで本当に色々と右往左往しー

『ー結局は成し遂げられていないんだけれどね』

「……ん？」

ふと奇妙な感覚に襲われた。感覚というかー違和感というか。再び言葉が脳裏をよぎる。

『――細々と餌を食らうだけの怪異』

それは確か――忍の言葉だっただろうか。比企谷が聞かせてくれた彼女の言葉。そこで僕達は初めて孤毒蜘蛛という怪異を知った。

「……あれ?」

おかしい、と。唐突に思った。その疑念を上手くは掴めないけれど、とにかく何かがおかしいと思った。

口が開く。僕は気付けば彼女に言葉を向けていた。

「羽川、ごめん。繰り返しになるんだけどさ、もう一度だけ確認してもいいかな?」

「……なにを、かな?」

羽川の横顔は動かない。

ただわずかに細められたその瞳を見ながら僕は言うべき言葉を探した。

順序がアベコベなのは自覚している。それでも言わなくちやいけない言葉があると思ったのだ。

捻り出す。考えて、咀嚼して、そして僕はその喉に詰まっていた言葉をようやくのこと吐き出した。

「――『孤毒蜘蛛は、本当に人の願いを叶える怪異』なのか?」

「……」

記憶を呼び起こす。それは考えてみれば少しおかしい話だった。

孤毒蜘蛛は人の毒を喰らう怪異だ。調べたどの文献にも確かにその特徴は書かれている。それは、あるいは人の悪意、穢れを浄化するという意味合いを持っているのかもしれない。多くの穢れを集め、浄化する受け皿としての役割。元が神様という点で考えればスンナリと納得もできる。

けれど、それは『願いを叶える事と同義』ではなかった。

事実、孤毒蜘蛛が大和朝廷を呪いで滅ぼしたなんて記録はどこにもない。そもそも『孤毒蜘蛛が願いを叶えるだなんて記述さえどこにもありはしなかった』のだから。

僕は彼女の答えを待つ。

羽川は――

「――やっぱり、気付いちやっただか」

おどけた声で、泣きそうな顔を浮かべた。

「ごめん、阿良々木くん。私ね、皆に一つ嘘をついていたの。孤毒蜘蛛は人の願いを叶えるわけじゃない、ただ願いを集めるだけの怪異なんだよ」

「……!？」

言葉を失った。

でも、じゃあ比企谷に憑いている怪異は――

「けど、比企谷くんは憑いている怪異が孤毒蜘蛛である事も確かなんだよ。この意味が阿良々木くんには分かる？」

「お前は、なにを……」

わからない。お前は……お前はなにを言ってるんだ、羽川。

「……大丈夫。私に任せて。一応、幾つか対応策は考えてきたから。もしそれでもダメだった時は……それこそ『彼女』に助けをもらうしか方法がないんだけどね」

ポツリと、一滴の雫を水面に落とすように言葉をこぼして、羽川は歩いていった。

僕は――後を追うことができない。

ただ、羽川が最後に見せた覚悟を決めたような表情が網膜に焼き付いて、先に進ませることを拒絶していた。

「……じゃあ始めるよ、比企谷くん」

そして、そうこうしている内にも儀式は始まる。

羽川の合図に従って、比企谷は歩き出した。

一歩、また一歩と歩みを進める。床板を鈍く軋ませながら、そうして比企谷は祠の前でピタリと動きを止めた。

右手が伸びる。その指が祠の内にある銅鏡に触れた――瞬間。

「ッ、!？」

一陣の風が吹いた。それは立てた蠟燭の灯りに触れ、巻き上がるようにその火を炎と変える。

強い光に照らされた室内で僕は確かに見た。

驚く戦場ヶ原を、警戒を見せる羽川を、呆然と立ち尽くす比企谷を。
そして、

「アレ、は……!?!」

銅鏡から生まれ出でた一つの闇。それはやがて人の形を形成していき、一人の影になった。

眼前の光景に僕は驚きを露わにする。

「比企、谷……!?!」

全身を闇色に染めた人。人影。

そこに『もう一人の比企谷八幡』が立っていた。

二十八話

そこは公園だった。

視界に広がるセピア色の世界の中で、僕と同年代くらいの子供が遊んでいる。男の子が三人、鬼ごっこでもしているんだろうか。きやいきやいと騒ぎながら走り回る彼らはみな楽しそうに笑っていた。それが羨ましくて、仲間に入れてもらいたくて、だから勇気を出して声をかけてみた。

「ぼくも仲間に入れて！」

声は……届かなかった。何度も何度も言ったのに何故か届かなかった。

仕方がないから僕は一人で遊ぶ事にした。

暗転。

僕は教室に居た。下校のチャイムが鳴っている。クラスメイト達はランドセルを背負い、澆刺と廊下へ出ていく。

僕は一人で帰る支度をしていた。本当は誰かと一緒に帰りたかったけれど、誰も一緒に帰ってはくれなかったから。

教科書をしまい、文房具をしまい、ランドセルを背負う。と、教室の隅に僕以外に一人だけ女の子が居た。僕が好きな子だった。彼女は困った顔で机の周りを見渡している。なにか探しものをしているのかもしれない。声をかけるのが少し恥ずかしかったけれど、僕は彼女を放っておけなかった。

「探しものしてるの？ だったら俺も手伝うよ！」

けれど、また声は届かなかった。やがて彼女は諦めたようにランドセルを背負い、そそくさと教室を後にする。

仕方がないから僕も一人で帰った。

暗転。

またしても僕は教室に居た。放課後。夕焼けに染まった教室。目の前には女の子が居た。

憧れていたクラスメイト。勇気を出して告白したけれど、すぐに断られてしまった。泣きたくなかった。でも泣き顔を見られたくなかつたら急いで家に帰った。

次の日、クラスの皆が笑っていた。

僕を指差しながら笑っていた。

右から左から前から後ろから、笑い声が僕を取り囲む。頭が割れそうに痛んだ。心が軋むように痛んだ。

仕方がないから僕はその日一日を耳を塞いで過ごすことにした。

暗転。

……気付けば一人だった。どうしようもなく一人だった。

仲間に入れてもらいたかっただけなのに。楽しく会話したかっただけなのに。一緒に居て欲しかっただけなのに。

それなのに、気付けば僕は一人で暗闇の中に居た。

息が苦しい。けれどすぐに慣れた。身体が寒い。けれどすぐに慣れた。世界が暗い。けれどすぐに慣れた。心が痛い。けれどすぐに慣れた。

やがて……孤独にさえ僕は慣れていった。暗闇が僕の全てになっていた。

だからもう他に何もいらぬ。何も欲したりしない。痛みも苦しみも絶望もこの世界にいる限り届かない。

僕は一人がいい。僕は一人がいい。

誰も傷つけない、誰にも傷つけられない世界で。

そうして僕は一人で眠りについた。

暗転。

『――阿良々木くん』

……声がした。どうしてだろう。何故だか心が弾む。閉じていたモノが、柔らかく開かれていくような感覚がした。

『――阿良々木さん』

呼ばれている。僕は、それが僕を暗闇から引きずり出そうとしていることに気が付いた。嫌だ。嫌だ。絶対に嫌だ。僕はここから出たくない。もう痛いのも苦しいのも嫌なんだ。もう辛いのも悲しいのも嫌なんだ。

開こうとするモノを押し留め、僕は再び闇の中に身を沈める。

『――阿良々木先輩』

うるさい。やめろ。黙れ。消えろ。あっちに行け。一人にさせてくれ。もうなにもいらなくて決めたんだ。もうなにも欲しくないって決めたんだ。だから、頼むから、僕を放っておいてくれ。

『――暦お兄ちゃん』

けれど声は止まらなかった。心の騒つきも止まらなかった。

何が違ったんだろう。どこで間違えたんだろう。僕とアイツとの間に大した差なんて無いはずなのに。僕とミンナとの間に違いなんて無いはずなのに。どうして僕だけが苦しい思いをするんだ。どうして僕だけが辛い思いをするんだ。悪いのはなんなんだ。わからない。教えてくれ。誰か僕に教えてくれよ……。

『――ラギくん』

違う。もうそいつの名前を呼ぶな。聞きたくない。考えたくないんだ。僕は【――】じゃない。僕は……僕は……『俺』は……!!

「――阿良々木くん!!」

「ツ……!?!」

チリンツーンと、鈴の鳴る音がした。

「阿良々木くん!!」

モーニングコールにしてはやけに穏やかさに欠けた声で目を覚ます。

視界の中央、すぐ眼前には羽川の姿。顔が近い。え、もしやこれが朝チュンというやつなのか？

「待て……しかし僕には戦場ヶ原という心に決めた人が……」

「……はあ。起きて早々に何を言い出してるのよ、この男は」

呆れたように溜息を吐かれてしまった。ボンヤリとした意識が次第にハッキリとしていく。

「……羽、川？」

「うん。おはよう、阿良々木くん」

「つう……もしかして寝てたのか、僕は」

「まあ、そんなところかな。それよりも身体の方は大丈夫？どこか痛み所はない？」

「いや、特に問題はないけど……」

精々、気怠さが多少あるぐらいか。それ以外にはこれといって異常は見当たらない。腕が無くなってるとか、足が血だらけだとか、そんなことも一切無く、いつも通りの阿良々木暦の姿がそこにあった。

「……って、え？」

しかし、だからこそおかしい事に気が付く。

そうして困惑を浮かべる僕の前に、横からコンパクトミラーの鏡面が差し出された。

「……戻ってる」

「みたいだね。でも、おめでどうって言うにはまだちよつと早いかな？」

「え？」

羽川の横顔は睨むように僕の後方を見ていた。

振り返る。奥行きさえ解らない濃厚な暗闇の中を、不思議な事にそ

いつはその輪郭をハッキリと映し出しながらそこに立っていた。

「……比企谷？」

呼んで、けれどすぐに『違う』と確信した。比企谷の形をしたソレは不気味に笑う。

頭の中に響く声があった。

【本物が欲しい】

「……え？」

【仮初めのものなんていらぬ。偽物なんていらぬ。建前も気遣いも偽善も欺瞞も必要ない。俺はただー安らぎが得たい】

「っ!？」

響く声に混じって感情が流れ込んでくる。孤独、絶望、諦念、悲哀。胸が締め付けられるような感覚。痛くて苦しくて切なくて寂しい。

目の前がー暗くなっていく。

「ダメだよー吞まれちゃダメー!しっかりしなさい!」

「……!!」

チリンツ。

またその音がした。薄ぼんやりとした意識が再びクリアになっていく。視界の端に羽川の姿が見えた。彼女の手首に巻かれたソレに僕は視線を向ける。

「鈴の音色ーやっぱりお前の仕事だったんだな、羽川」

糸に括られた丸い金色が羽川の手首から澄んだ音を発していた。

その音色が、不思議なことに内から湧き上がる負の感情を霧散させていく。ただ、声だけは依然として頭の中に響いていた。

「声に意識を傾けちゃダメだよ。いまはまだ流れ込んでくる悪意を鈴の音で祓えてはいるけれど、それにも限度があるの。こちらから向こうに足を踏み入れてしまったら、たちまち吞まれてしまうわ」

「そ、んなこと言われても……!!」

聴覚を通さずに直接響いてくる声は否が応でも意識をそちらに集中させる。

ダメだ。無理だ。この声を無視するには僕はあまりにも脆弱すぎる。

「本物が欲しい。触れて壊したくない。触れられて壊れたくない。だから俺は本物が欲しい。だから、俺は本物だけが欲しい。だからー」

「っ、避けて阿良々木くん!!」

「なっ……!?!」

暗闇が歪む。歪みはやがて亀裂に変わり、亀裂の内からは漆黒の触手が生まれ出でる。合計六本の触手。それはまるで蜘蛛の足のよう。比企谷の周囲から生え、唐突にこちらに振り下ろされた。

僕は咄嗟に回避行動を取る。だがあともう少しの所で間に合わない。躲しきれなかった触手の一つが撫でるように僕の右腕に触れた。

「ツーあああああああああああああ?!?!」

痛いー痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い!!!

まるで腕ごと硫酸の中に突き入れたような激痛だった。神経が肉ごとズタズタに引き裂かれる感覚だった。あまりの痛みに腕が千切れたのかとも思ったが、けれど現実として僕の右腕はちゃんと身体に繋がっている。どころか、見た限りでは些細な外傷一つすらそこにはついていない。

「阿良々木くんツ!!」

「っう……いや、大丈夫だよ、羽川。怪我は……ないみたいだ」

怪我は無い。たしかに無いが、それに反して右腕は未だ断続的に痛みを伝えていた。広がる痛み、その苦痛を僕はつい先月に起こったあの事件で経験している。

「これはー毒か」

毒。蛇の毒。蜘蛛の毒。性質は違えど、それが身体を蝕むものであることには変わらない。

不味いーーと思った。吸血鬼は毒に弱い。おまけに忍に最後に血を飲ませたのは五日前だ。大した吸血鬼性も備えていない今の僕では、あの触手を受け切るのはあまりにも至難の業だった。

「……右腕、動かないの?」

「いや、大丈夫だよこれくらい。全然、まったく、なんともないーっ

て、ごめん。強がった。正直に言うとうち当分は動きそうにない」

「そっか。じゃあ足は？両方共ちゃんと動きそう？」

「そっちはまあ、大丈夫だけど」

「よかった。それじゃあー」

言って、羽川は僕の前に一歩出る。

「ー反撃開始だね」

「反撃って……なにか手があるのか？」

「一応、一つだけね。でもその為には阿良々木くんの力を……じゃないか、うん、ごめん。言い直すね。阿良々木くんの『命』を私に預けて欲しいの」

「命……」

羽川は真剣な表情でそう言った。

この状況で彼女が命を賭けると言うのであれば、それは掛け値なしに危険を伴う行動なのだろう。もしかしたら死ぬかもしれない。もし運よく生き延びたとして、五体無事でいられるかもわからない。

緊張が走る。

恐れがあった。

けれどー迷いは無い。

僕は即答した。

「わかった。今から僕の命はお前のものだ。僕は羽川翼に阿良々木暦の全てを預ける」

「……ありがとう、阿良々木くん」

羽川は笑う。だから僕も笑った。

一歩、僕も前に出て羽川の横に立つ。

「ーさあ、反撃開始だ」

今更ながら状況確認をしようと思う。

攻略すべきは一人と六つの触手。対する戦力は僕と羽川の二人だけだ。

周囲は暗闇。だが何故だか互いの姿は見えている。どうやら、この空間そのものが比企谷もどきの作り出した領域であるようだ。戦場ヶ原の姿がどこにも無いのは、彼女が比企谷もどきの意志で領域の外に弾き出されたから。それが本当だとしても不安は消えてはくれない。加えて、あの比企谷もどきが比企谷に憑いた怪異であると同時に比企谷本人であるというこも。

つまりは『ブラック羽川』ならぬ『ブラック比企谷』。

だが、伝え聞いた僕の動揺を見透かしたように羽川は喝を入れてくれた。

「今は私の話に集中して。これは言ってしまうえば比企谷くんを助ける為の作戦でもあるんだから」

だから絶対に失敗は許されない。しかし、考えるまでもなく戦力比は絶望的である。純粋な手数も、地理的なアドバンテージもあちらが有利だった。

そんな状況で僕が羽川から伝えられていた作戦は二つ。

一つは、

『ひたすら逃げ回って彼の注意を引いて』

要するに囷ということだろう。だが、これに関しては難なく実行出来た。邪気を祓う鈴の音から遠ざかったせい、触手は羽川ではなく僕を優先して狙ってきたのだ。

しなるように縦から振り下ろされ、滑るように横から振り払われ、そうして繰り返される触手に途中何度も危うい場面を見せながらも僕は付かず離れずで彼の触手を引き付ける。アレにわずかでも触れたらダメだ。例えそれが体毛の先、爪の先程度のものだとしても、毒は瞬く間に周囲に広がる。極論でいえばシューティングゲームのよくなものだと考えればいだろう。問題なのは自機が一つしかないという事と、このゲームがこちらからは反撃出来ない超難易度仕様と

いう事なんだけれど。

触手が走る。

「くっ!!」

鋭くはないが、縦横無尽に繰り出される敵の攻撃を僕は後ろにステップを踏んで躲す。前に飛び退いて躲す。転がって躲す。神経を削るその作業はもはや数えるのすら億劫になる程の回数に到達している。しかし、それは羽川も同様だった。僕ほどではないにしろ、迫る脅威を持ち前の反射神経で彼女はやり過ごしている。いや、やり過ぎているだけではない。そうして触手を躲しながらも、羽川は『ブラック比企谷』を挟んだ僕の対面でタイミングを伺いながらジリジリと彼に近づいていた。

僕はともかく、羽川が危険地帯に入っていく事が焦燥を駆り立てる。それでも僕は根気よく待った。羽川からの合図を、いずれ来る好機の瞬間を。

そうして待って、躲して、待って、避けて、待って、逃げてーやがてその時がやってきた。

「……!!」

羽川が一瞬、僕を見る。それが最初で最後の彼女からの合図だと気付いた瞬間、僕は躊躇も捨てて触手のイバラに飛び込んだ。

僕に任された策。その二つ目を思い出す。

羽川は無茶をしなくていいと言った。無理なら無理でいいと。

だけどそれこそ無茶で無理な相談だ。頭脳明晰な羽川ならともかく、愚鈍な僕にはこういうやり方しか思いつかないんだから。

だから僕は走る。二本の触手が振り下ろされた。それを横に飛んで躲す。続いて二本の触手が交差してこちらを襲う。間一髪のとこで前転、回避。立ち上がる手間すら惜しくなると、僕は這うように、転がるように彼に近づいた。と、気付けば一つの漆黒が貫くように間近に迫っている。身を捻る。ギリギリで躲せたと思ったが、微かに触手の端が肩に触れたらしい。激痛。悲鳴を奥歯に力を込めて噛み殺すが、その瞬間に見せた隙が命取りになった。最後の一本、必殺のタイミングで振り下ろされた触手が正中線に沿って僕を引き裂こうと

迫る。

だから、

「ウーッアアアアア」アアア!」

残る左手で掴み取る。掌の皮膚が根こそぎ灼けるようだった。

手の感覚が無くなる前に触手を振り払い、足に力を込める。比企谷との距離を一から零にーとは、しかし、いかなかった。

「ウグッ!」

どうやら少しだけ遅かったらしい。

右の肋骨を砕くような衝撃。真後ろからなぎ払うように振られた触手が僕を紙くずのように吹き飛ばす。だけど、それでいい。何故なら僕は『僕の役目を果たせた』んだから。

動かぬ身体で僕は比企谷を見る。『比企谷の真後ろにいる』羽川を見る。擦り傷だらけの彼女の手には、一枚のお札があった。

『一瞬でいいから、隙を作って』

羽川は比企谷に迫る。触手が羽川に迫る。彼女は札を持っていない反対の手でコンパクトミラーの鏡面をかかげた。まるでその小さな枠内に活動範囲を制限されたかのように触手は動きを止める。もはや彼女を遮る障害は無かった。羽川は手を伸ばして、比企谷に触れー

「……え?」

ーられなかった。まるで時間が止まったかのようなだった。

それは驚きからでもない、体感的なものでもない。現実には、時間が止まったかのように、羽川の身体が中空で留まっていたのだ。

蜘蛛の巣にかかった蝶のように。羽川は動かない。

その制服の表面に、黒くて細い幾条もの線が食い込むように張られていた。

「ーごめん、阿良々木くん」

「っ、羽川アツ!!」

触手が彼女を弾き飛ばす。羽川は何度も何度も地面を転がり、やがてその動きを止めた頃にはピクリともしなかった。

羽川の白磁のような肌に、一筋の血がスーッと真紅の線を描いて

多分、僕は比企谷に――

『――きつと、由比ヶ浜の知る比企谷八幡を取り戻してみせるから』

「……甘っ、たれてんじゃ、ねえぞ、比企谷八幡……!!」

――腹が立っていた。無性に腹が立っていた。内臓が煮えくりかえりそうになるくらい、脳みそが沸騰しそうになるくらい、僕はただ、比企谷八幡という男に怒りを覚えていた。

目を開く。瞼を動かすという行為にすら激痛が走る。それでも僕は湧き上がる情動に任せて無理やり立ち上がった。

血反吐と共に、言葉を吐き出す。

「言いたい事はそれだけかよ、比企谷。お前が自分を殺してまで言いたかったことはそれだけかよ、比企谷。だとしたら、僕が返す言葉はただの一つだけだ」

――甘ったれてんじゃねえぞ、この野郎。

痛みすら忘れて、僕は言う。

「断言するぞ。お前は、ただの馬鹿野郎だ。根暗で、捻くれてて、陰気で陰鬱で、幸せを幸せと見ずに自分をただの不幸者だつて悲劇の主人公気取ってるだけの、ただの大馬鹿野郎だ。お前が今までどんな想いで暮らしてきたかなんてもう僕にはどうだっていい。そうだよ。先に言っておくぞ比企谷。僕はお前に対して同情も共感も一切しない」
怒りは留まることを知らず湧き出てくる。奥歯を噛み締めすぎてガリツと口の中で鈍い音がした。

「孤独だった？だからどうした。お前の寂しさなんて僕は知らない」
知っていた。

比企谷の感じた心の痛みを僕は夢の中で知っていた。

「声が届かなかった？だからどうした。お前の悲しみなんて僕は知らない」

知っていた。

存在を認めてもらえなかった比企谷の虚無感を僕は夢の中で知っていた。

「拒絶された？だからどうした。お前の絶望なんて僕は知らない」

知っていた。拒絶された絶望も、笑い者にされた失望も、壊れそうになる心の軋みも、僕は夢の中で知っていた。

だけど、

「だから、どうしたってんだよ比企谷。だから全部を諦めたってのか。だから全てに失望したってのか。はっ、ちゃんちゃらオカシイぜ。僕はお前のことなんか知らないけれど、だけどお前より遥かに不幸な女の子のことを知っている。僕はお前のことなんか知らないけれど、だけどお前より遥かに絶望を知っている女の子のことを知っている。僕はお前のことなんか知らないけれど、『お前を遥かに大切に思ってくれてる女の子達』のことを僕は知っている！お前を気にかけてくれる人を！お前を心配してくれている人を！僕はッ、お前以上にッ、よく知っているッ！」

気付けば頭の中で響いていた声は止んでいた。闇に染まった比企谷の瞳が僕を見ている。その周囲で、触手が不気味に蠢いていた。

「要するにさ、比企谷。比企谷八幡。お前はただ、見ていなかっただけなんだよ。見ようとしていなかったただけなんだよ。お前の周りには確かに居たはずなんだ。本物ではない、けれど限りなく本物に近い本物が。なのに、よりにもよってそれから目を逸らしたのは比企谷、お前自身だろ！だということのに、言うに事欠いて本物が欲しい？ー！ふざけんな、甘ったれてんじゃねえよ。手に入らなかったわけじゃない。ただ、お前が手にしようとしなかっただけじゃないか！」

説教が出来る立場じゃないことはわかっている。人のことを言えない立場じゃないこともわかっている。実際の所、僕と比企谷の間に差異なんてそれほどありはしない。ただ『救われた』か『救われなかった』かの違いだ。僕は羽川翼という本物に救われて、比企谷は救われなかった。たったそれだけの違い。

でも、だからこそ、僕はーッ

「っ、う……！！」

力が抜ける。怒りを上回った痛みが、再び僕に牙を剥いた。

片膝をつく。それでも睨みつけるように比企谷へと向け続けた視

界の隅で、シビレを切らしたかのように突如漆黒が動いた。

動かぬ身体へ一直線に向かう凶器。ここで倒れるわけにはいかな
いと分かっていながらも、身体は思うように動いてはくれない。

悔しかった。約束を守れないことが。なによりも比企谷に何も伝
えてやれないことが死ぬほど悔しかった。

触手は迫る。そしてー不意に光が差した。

「……？」

希望の光、なんて安っぽい表現をするつもりはない。ただ、どうし
ようもなくそれは光だった。まるで夜空に走る流れ星のように、それ
は僕の頭上に輝いていた。

なんとなく、今が危機的状況であることすら忘れて僕はソレを見上
げる。そして気が付いた。

ソレはーライトの点灯した携帯電話だった。

「あれは……羽、川の？」

携帯電話はクルクルと回りながら、無秩序に光を撒き散らす。回
る、廻り、光はちようど僕の真上で僕を照らす。まるで月の光のよう
に、それは包むように淡く僕を照らし、影を作る。

長く、細長く、伸びていく。炎の揺らぎにも似たその黒影から生ま
れ出でたモノは、影も形も無い、ただ、耳の中に溶けていくような、愉
快げな笑い声。

『ーカカツ。情けないのう』

それは瞬間にして、閃く。どこまでも伸びた影から千切れ、宙を
舞った断片が、一瞬にして触手を切断した。

ソレは頭上、頂点に達すると、その場で円を描くようにして重力に
吸い込まれていく。やがて僕の眼前に落下したソレはいつか見た時
と同じように、凄絶な切れ味を持って地面に突き刺さっていた。

刃の下にー心あり。

キスショット・アセロラオリオン・ハートアンダーブレードの通り
名の由来となる、最強最悪の妖刀『怪異殺し』。

比企谷はもう目前だった。が、その視界を遮るように漆黒の悪意が顔面に迫る。

――邪魔を、するな。

正面から、頭ごと僕を潰そうとする触手に、僕はギリギリまで首を捻って、刃先を向けた。漆黒の塊が中央から引き裂かれていく。もう止まらない。止まるわけにはいかない。

だから僕は、比企谷に向けて、走りつづける。

「ウウウヴヴヴウウウツツ!!」

比企谷は言った。偽物なんていらないと。

比企谷は言った。友達なんて居ないと。

比企谷は言った。一人が好きだと。

比企谷は言った。俺とお前は違うと。

比企谷は言った。お前の価値観を押し付けるなど。

比企谷は言った。比企谷は想いの中で言い続けた。届かない声を枯らしながら、孤独を嘆くケモノのように泣き続けた。

それでも届かなくて、やがては届かせるのさえお前が諦めてしまったというのならさ――比企谷、僕がお前の言葉を聞くよ。お前が孤独だと言うなら僕と一緒に居てやるし、お前が寂しいというなら僕と一緒に馬鹿騒ぎしてやる。何度、暗闇の中に閉じこもったとしても、僕が無理やり引きずり出してやる。

お前の絶望も失望も僕と一緒に背負って、そしてお前の希望や喜びを僕は一緒に祝おう。今の僕が皆にそうして支えられたように、今の僕が皆とそうして笑ってきたように。

僕がお前と一緒に全てを分かち合ってやるからさ。

「……だから」

比企谷の胸に顔を埋める。柄は根元まで突き刺さり、彼の背中からは一振りの刃が突き出ていた。

僕は倒れそうになる身体でかろうじて踏ん張って、比企谷の肩に頭を乗せる。いわゆる二番煎じではあるけれど、ようやく僕はその言葉を比企谷に伝えた。

ほんのちよつとだけ気恥ずかしい、けれど僕の本心からの気持ち。

「……だからさ……そんな寂しいこと……言うなよ。僕達もう……
『友達』だろ？」

暗闇に亀裂が入る。天井にはまるで蜘蛛の巣のように何条もの光の筋が走り、やがてパキツという軽やかな音を立てて世界が割れた。視界が赤くなる。それが窓から差しこむ夕焼けの光であると気付いたのは少し後のことで、前方で両手にあらん限りの文房具を装備する戦場ヶ原を発見した直後の事だった。

視線と視線が合う。一瞬、殺されるかもと本気で思った。その鬼気迫るといつてもいい迫力と覚悟に満ちた表情にどうしようもなく死の気配を感じた。

息が詰まるような沈黙。次いで戦場ヶ原が駆け出した。殺られる、と思つて咄嗟に目を閉ざした僕にガバリとなにかが首に巻きつく。もしやこのまま頸椎をへし折る気か！……とも思つたが、しかしいつまで経つても折られる気配は無い。

そつと目を開く。見れば僕は抱き寄せられるように戦場ヶ原の左腕の中に居た。その横では同じように羽川が右腕で抱き寄せられていた。

戦場ヶ原は……震えていた。けれどその顔だけは誰にも見せまいと更に強く僕達を抱き寄せ、ぽつりと。

「……おかえりなさい、阿良々木くん。羽川さん」

僕と羽川は顔を見合す。

それから打ち合わせをするまでもなく、僕達は同時に答えたのだつた。

「ただいま、戦場ヶ原さん」

「ただいま、戦場ヶ原」

エピローグ

後日談というか、今回のオチ。

翌日。僕達は再び星神社に来ていた。僕達というのはつまり僕と羽川の二人だ。そこに比企谷と戰場ヶ原の姿は無い。その辺りの事情を簡潔に説明するのであれば、つまり比企谷は他の用事で外出、戰場ヶ原は彼氏を置きざりにさっさと帰宅、といった所だろうか。

そもそも戰場ヶ原に至っては『事件さえ解決したならもう滞在する理由はない』とかで昨夜の時点で早々に千葉を退去している。淡白なやつだと思う反面で、しかしその即断即決の行動力はたくましい。――結局、あいつは何をしに来たんだと思う感情も一応は無きにしてもあらずだが、逆に言えばあいつが居てくれたからこそ阿良々木暦はどんな状況でも阿良々木暦らしく振る舞えたのだと思っただけもする。そういう意味ではやはり僕はあるいつに感謝をしなければいけないんだろうなあ。

「……まあ、帰ってからの勉強のペースを考えるとそれどころではないんだろうけど」

「ん？阿良々木くん、なにか言った？」

「いや、べつに」

ともあれ、である。それはともあれ、僕は羽川と二人きりで（ここ重要）昨日と同じように社の中に居た。日をまたいで二度目の不法侵入。気後れはあるものの、やむをえない事情というものは総じてあるものだ。

どうか近隣住民に通報だけはされませんように、と心中で祈り――神前で不届きを働いているものに果たして聞いてもらえる祈りがあるかどうかはわからないが――ながら、僕は祠の前で作業をする羽川を後ろから眺める。

なんでも穢れを貯めた神体から穢れを払う作業を行っているとか。もともと邪気を払うための神体から邪気を払うとはこれやいかにと頭を悩ませた僕ではあるが、しかしまあ羽川にその辺りの事情を聞くのはなんというか、無様を晒すというか無能を晒すような気がして憚

られる。

なので代わりに違うことを聞くことにした。

「結局さ、あの怪異って一体なんだったんだろうな」

「ん？」

作業の手は動かしたまま、羽川は横目に僕を見る。

僕は「いや、だからさ」と続け、

「結局、アレは純粋な孤毒蜘蛛じゃなかったってことだろう？ だったら、やっぱりお前の時みたいに怪異が比企谷の内で変容したってことなんだろうか」

「……どうなんだろうね。実の所、アレは比企谷くん自身が生み出した怪異なんじゃないかって、私は思っていたりもするんだけど」
「……比企谷が生み出した怪異？」

怪異が違う性質に変化したわけじゃなくて、ヒトが怪異を生み出した？

……果たして、そんなことが本当に可能なのだろうか。

「絶対無いってことはないと思うよ。ただ、前例が無いってだけで。とはいえ阿良々木くんの疑問通り、本当にヒトが怪異を生み出せるのかは私にも解らないんだけどね」

「へえ。お前でも知らないことってあるんだな」

「当たり前じゃない。私は知ってることしか知らないんだから」

一体私を何だと思ってるのよ、みたいなジト目はこちらに向けられる。やったあ！羽川さんのジト目が見られたぞ！……じゃなくて、僕は愛想笑いを浮かべて、視線を逸らした。

そうして待つこと数分。

「……よし、こんなもんかな」

手ぬぐいから始まり、その他諸々と用意された道具をショルダーバッグの中に片付けて、羽川は振り向いた。

その満足気な笑みに僕も笑みを返す。実質、僕はなんにもしていないという空虚な事実は今脇に置いておくとして。右手に着けた腕時計に目を向けながら、僕はなんとなくボソリと呟いた。

「……あとは『アイツ』が上手くやるかだな」

「うん、そうだね」

脳裏に浮かぶのは気怠げに歩く一人の『友達』の姿。

僕は顔を見合わせてからまた軽く笑い合い、そうして社の外へ足を運んだ。

「あれ？阿良々木さんじゃないですか？」

携帯画面を見ながらの道中、俺はやけに聞き覚えのある声を耳にして顔を上げた。

目の前にはもはやお馴染みとなったツイントールのロリ少女。しかし俺は再び携帯に視線を向けてその脇を通り過ぎる。

間髪入れず、ふくらはぎに蹴り足がめり込んだ。

「痛ッ!？」

「……なにを普通に素通りしてくれてるんですか。せつかくの美少女からの呼びかけを無視するなんて、全国のロリかけーお兄さん方が黙ってはいませんよ」

「て、めえ……!!」

そのロリかけーお兄さん方とやらが出てくる前にここでしばいてやろうかと一瞬考える。だが、確かに無視した俺にも悪い所はあったかもしれない。

仕方がないので振り返り、俺は渋々と言葉を返した。

「人違いだよ。俺はそんな発音するのにも苦労しそうなややこしい苗字は持ち合わせてない。俺の名前は比企谷だ」

「……なんと。ではようやく元に戻られたんですね」

「まあ、そんなところだ」

「それはそれは。では、私は謝らなくちゃですね。すみません。名前

を間違えてしまいました」

「別にいい。わかればいいんだよわかれば」

「それで、ヒジ神さん」

「やっぱり間違えるんじゃないかねえか……」

「てへっ」

お茶目に舌なんて出してんじゃないやねえよペコちゃん人形かよお前は。

喉まで出かかったセリフを呑み込んで、俺は携帯を閉じる。が、目敏い八九寺がその動作を見逃すはずはなかった。

「うん？携帯なんて握りしめてどうしたんですか？それは他者とコミュニケーションを取るためのツールですよ？比企谷さんには必要の無いものの筈ですが？」

「暗に俺のコミュニケーション能力を乏しめるのやめてくれない？俺が携帯持つてて何がおかしいんだよ」

「いや、だって比企谷さん、友達居ないじゃないですか」

「っ……」

「……んん？」

顔を逸らす。だというのに八九寺はジーツと俺に視線をぶつけ続けていた。

なんというか、その、すごくウザい。あまりにウザかったのでつい反応を返してしまった。

「……なんだよ」

「ああ、いえ、すみません。ちょっと拍子抜けてしまったというか。比企谷さん、いつもなら『友達が居なくて何が悪い。そんなの居たって腹の足しにもならんし、内申点の足しにもならん。むしろ居ない方が人生を有意義に過ごせるまであるぜ』みたいなことを得意げに言うじゃないですか。キメ顔のドヤ顔で」

「なにそれそんなウザいやつ本当に居るの？ちょっと呼んでこい俺がぶっ飛ばしてやんよ！」

「……あの、比企谷さん？本当に大丈夫ですか？」

小学生にわりと本気で言動を心配されてしまった。生暖かい優しさがすごく心に痛い。

「やめろ俺に優しい眼差しを向けるな。うっかり泣いちやうだろうが」

「……どれだけ優しさに飢えているんですか、貴方は。いえ、そうではなくてですね、比企谷さん。もしやひよっとしてですが、いまなにか緊張されていますか？」

「いや、してない。全然もう緊張なんてしてはるはずがない。なんなら緊張じゃなくて尊重してるまでである」

「なにを尊くされていらっしやるんですか……。というか、ほらやっぱり変ですよ、比企谷さん。ツツコミとボケの比率が逆転しています。そんな調子では私がツツコミに回らざるを得ないじゃないですか！」

「うるせえよもう勝手にクルクル回ってるよ。俺は今それどころじゃないんだよ。早急に考えなくちゃいけない事がー」

「考えなくちゃいけない事？」

「……………」

つい余計な事を喋ってしまった。

八九寺の瞳がキラリと光る。眼前の女子小学生は更に一步俺に近づくと、

「そうですか。どうやら、お困りのようですね」

「困ってねえよ。困ってたとしてもお前にだけは絶対に助けを求めねえよ」

即答してやった。だが八九寺は諦めない。完全に待ちの姿勢で、ジツと俺の顔を見上げ続ける女兒。もういつそ走り出して振り切つてやろうかとも思ったが、予想外に真剣な眼差しを向けてくる八九寺に俺は動くことも出来ずにたじろぐだけだった。

そうして不毛な時間が流れる。

やがて、折れたのはやはり俺だった。

「……わかった。じゃあ一つだけ聞いてもいいか」

「はい、なんでしょうか？」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……やっぱりやめた」

踵を返す。しかし、走り出す一歩手前で服を掴まれた。

「……なにナチュラルに逃げようとしてくれてるんですか。男のクセに一度言ったことを取り消すおつもりですか!」

「うるせえ離せ俺はお前にだけは絶対に話さねえ!」

男のくせにじゃなくて、男だからこそこんなことを年下女児なんかに話せない。話せてたまるか。そんなことをしてしまえば俺は帰ってから布団の中で「うをおおおお死にてえええええ!!」と叫ぶハメになってしまう。

なので俺は拘束される上着を無理やり引つ張って前進。決死の逃避行にただ全身全霊の全力を尽くしてー

「ふむ。そうですか。ならもういいです」

「ぬお!」

唐突に手が離された。おかげで俺は発射されたピンボール玉よろしく勢いよく前に弾かれ、地面とこんにちわ。ギリギリで手を付き、華麗な四つん這い土下座態勢を取る俺の尻に向けて女児の呆れた声が降ってくる。

「まあ女子小学生に相談、しかも『二度目』の相談ともなれば比企谷さんのカメムシサイズなプライドだって粉々でしょうしね。仕方がありません。今回は特別に私が退いてあげましょう」

「なんで微妙に上から目線なんだよ……」

物理的にも上から目線だしよ。そっちの方がプライドを傷つけると思うんですがそれは。

「ただし、アドバイスだけは勝手に送らせてもらいますよ」

「はあ? アドバイス?」

立ち上がり、手の平と膝の土埃を払いながら俺は眉根を寄せる。

八九寺は一昔前のツンデレヒロインのように片手を腰に、もう片方の手でビシリと俺に人差し指を突きつけ、

「比企谷さんはもう少しだけでいいですから素直になってください。」

自分を好きになれとか他人を好きになれなんて大それたことは言いません。ただちよつとだけ素直になるだけでいいんです。そうすれば自ずと伝えたい言葉というのが見つかると思いますよ」

見透かしたように、見通したように八九寺真宵はそう言った。思えばこいつは出会った時からそうだったかもしれない。率先して関わろうとしない俺に無理やり関わって、無理やり問題を解決していく。勝手な奴だと思う。勝手に、けど純粋に良いやつなのだろう。

自然と笑みが浮かびそうになる。俺はそれを強引に不機嫌な表情で塗り替えて、言つてやった。

「お前、それって要するにただの嫌味じゃねえか。口を割ろうとしない俺に対する」

「む、バレてしまいました。私の計画では『至極のアドバイスに感激感動した比企谷さんが感涙しながらエグエグと相談事をこぼしてしまふ』といった流れになるはずだったんですが」

「計画がずさんすぎるだろ……。欠陥住宅だってもう少し綿密に考えて造られてんぞ」

「むむむ……では仕方ありませんね。比企谷さんの弱味を握るのはまた今度の機会としましょう」

「こねーよそんな機会は一生」
断言して、溜息を吐く。八九寺はにししと笑みを浮かべるだけだった。

再び携帯を開く。時間に目を向ける。……残念なことあまり時間に残されていないようだ。

「悪いけどお前との無駄話はここで終了だ。今すぐ行かなきゃいけない所があるんでな」

「そうですか。でしたら、ここで一旦お別れですね」

存外素直に聞き入れて、八九寺はリュックサックのベルトに両手をかける。

と、その絆創膏付きの膝小僧が動く前に、俺は気付けばその言葉を向けていた。

「八九寺。お前もひよつとしてさー」【ああいう存在】だったりするの

か？」

問いかける。八九寺は最初キョトンとした顔を浮かべ、次いで目を大きく開いて数度瞬きをし、それから柔らかな、それでいて悪戯っ子のような無邪気な表情を浮かべ、

「秘密です。その話はまた今度にしましょう。また今度会って、遊んで、その時にでもお喋りしましょう。ねっ、比企谷八幡さん」

八九寺は笑っていた。いつもは憎たらしい態度ばかりといいのに、今だけは年相応の眩しさを内包した、それはまぎれもなく「本物」の笑顔だった。

それは俺だけに向けられた、確かなー

「……ははっ」

「……比企谷さん？」

気付けば俯いていた俺の視界の中に八九寺は入り込む。ズカズカと。ズケズケと。パーソナルスペースなんて言葉がこの世にある事も知らなそうな、距離感の近過ぎるその女の子を見ながら、俺は考える。

絶望を知らなかったあの頃の俺だったら、彼女に何を聞くだろうか。

失望に耐えられなかったあの頃の俺だったら、彼女に何を応えるだろうか。

諦めを知ったあの頃の俺だったら、彼女に何を求めるだろうか。

考える。考えて、考え続けてー結局、考えるのを止めた。

頭の中の動きが止まって、代わりに手が動く。

開いた右手。伸ばした掌をおもむろに眼下の黒頭に乗せて、ワシヤワシヤと頭皮を撫でまくってやる。

存外に触り心地の良いその前髪の下で、胡乱な瞳がジロリと俺を見上げた。

「……比企谷さん。一体、いきなり、なにをされてるんですか？」

「あー、その、なんというか、アレだ。良い毛並みだと思っただけ。ナイスキューティクルだ。例えるなら、夏毛に生え変わったばかりのウチの家猫に匹敵するレベル」

「私の自慢の黒髪と猫の毛並みを同列に扱わないで下さい！というかつ、ああもう、いつまで人の頭をワシヤワシヤしてるんですか終いにはセクハラで訴えますよ!!」

止まらない魔の手から勢いよく飛び退きつた八九寺はフシヤーと目を吊り上げて俺を威嚇している。毛並どころか行動まで同列だった。

ふと、胸に何かが入み上げてくるのを感じる。それが何なのかは分からないが、込み上げた何かは胃を通り、喉を通り、口に到達して、気付けば外に出ていた。

距離を取った猫娘が眉間にシワを寄せて俺を見ている。

その瞳は確かに「なんで笑っているんだ」と俺に語りかけていた。

「……あの、もう一度お聞きしますが、本当に比企谷さんなんですよね。紆余曲折の末に阿良々木さんと比企谷さんが融合して生まれた合体戦士アラガヤさんとか、そういうドツキリだったりしないですよね?」

「違う。昔はちよつとはそういうのに憧れもしたが、しかし今の俺は真正銘の比企谷八幡だ」

「本当にそうですかねえ……」

未だ疑いの眼差しで俺を見る少女を逆に見返してやりながら、俺はまた、込み上げた何かを静かに吐き出した。

ひとしきり吐き出し終えて、そして今度こそ本当に踵を返す。もう十分だった。

十分に過ぎるほどに『アドバイス』は貰ったから。

だから俺は歩き出す。

ーと、その前に。

「八九寺」

「はい?」

足を止めて首だけで肩越しに振り返る。

続く言葉は、存外にすんなりと出てきた。

「また明日、な」

八九寺はパチクリと目を丸くする。

そして間もなく、恐らく今日一番だろう輝くような笑顔で、

「はい！また明日、です！」

ありがとう。

さようなら。

また明日。

そうして俺と八九寺は別れた。

まるで友達同士のような、他愛もない『約束』を残して。

階段を上る。

ずっと考えていた。昔から俺が欲しかったものとはなんだったのか。

欲しくないものであればすぐに出てくる。偽善、欺瞞、馴れ合い、自己を欺き虚実で塗り固められた嘘の関係。どれもこれもが吐き気を催すほど醜く、悍ましい。見るのも嫌になるほど歪で、だから俺はそういつたものに嫌悪さえ抱いていた。

ならば逆に問おう。俺は一体、そうした嫌悪が渦巻く世界の中で何を欲してきたのだろうか。

階段を上る。

答えは未回答のままだった。そりゃあ一度は考えたこともあるかもしれない。ただ真剣に向き合ったことがあるかといえ、俺はNOと答える。それは永遠に完成しないパズルを必死に組み立てようと

するようなものだ。俺自身が思っていたからだ。

通路を歩く。

だったら今はどうだろう。もしも誰かにそう尋ねられたとしたら、俺はおそらく言葉に詰まってしまいかもしれない。知ってしまったから。気付いてしまったから。もしかしたら、このパズルは完成するんじゃないかという希望を見せつけられてしまったから。

だから俺もつい、そんな馬鹿げた希望につられて目を向けようとしていた。

通路を歩く。

だが、そうして盤上に目を向けても未だに答えは見つからない。

少女はヒントをくれた。少しだけ素直になればいいと。

少年は言った。お前は手にしようとしなかつただけだと。

全く簡単に言ってくれたものだ。それらが自分にとっては最も困難なことであるというのに。素直になる。正直になる。心を、開く。無理だと思った。無理で、不可能なことだ。

けれど、もしもその不可能を可能に出来たとしたら、俺は――

気付けば扉の前に立っている。

その先、室内からは彼女達の声がしていた。知っているけど知らない。いや違う。知らないんじゃない、知ろうとしなかつた彼女と、彼女が、居る。

俺はゆっくりと息を吐く。深呼吸を一つ。二つ。三つ。四つ。五つ。そして扉に手をかけ……やめた。伸ばした手を握りしめて、二度、ノックする。

「はい？」

返ってきたその声が心臓を強く脈動させた。ドキドキとする。バクバクとする。ウジウジとする。だが、もう、迷うつもりはなかった。引き手につけ、力を込めた指で一気にスライドして、俺は久しぶりにその光景を目の当たりにした。

「……ヒツキー？」

「……比企谷くん？」

いつもの場所、いつもの席に座る二人。

由比ヶ浜は息を呑むように俺を見て、雪ノ下は訝しむように俺を睨む。

伝えるべき気持ちは定まってる。伝えるべき言葉もまだ見つかってない。ただ、手に取ったままの一片のピースを恐る恐るパズルにはめ込むようにして、

「……よう。久しぶりだな」

俺は一步を踏み出した。

後書きというか蛇足というかお願いというか

後日談というか今回のオチというか筆者の感想というか。

・こんな駄文をここまで読んで頂きありがとうございます。
感想、きちんと目を通して頂いておりました。読むだけではない、コメントまで残して頂き、感謝感激でございます。

・正直、途中途中で地の文が雑だったり、文章の構成とかが歪だったりと、読者の方々以前に自分としてモヤツとする感じが自覚出来る状態での完結なので、なんとも言い難しというか。

・そんなわけで、読者の方も感じていた、そういう悪い所が出ているだろう箇所を、感想なのでコメントいただけると助かります

・悪い所というか、もうなんならちよつと気になった部分があればなんでも構いません。

・自分が感じているモヤモヤと読者の方々の感じるモヤモヤが違うのであれば「あらやだ私の価値観って社会とズレすぎい！」となって今後の創作に活かしますし、逆に感じるモヤモヤが同じであれば「あらやだ私の価値観って社会とシンクロしてるう！」となって、やはり今後の創作に活かれます。

・なので、本当にもう気が向いたらでいいので、ご指摘ご感想のコメント頂ければとてもとても嬉しく思います。

・……もちろん「ここが面白かった！」みたいな幸せすぎるコメントも頂ければ嬉しいですけども……w

では改めまして、ここまで貴重なお時間を使って頂き、本当にありがとうございました！

*以下、文字数埋めついでに以前書いた一話だけの番外編？みたいなものを載せときます。ちなみに今作との繋がりはありません。パラルワールド！

「――誰が犯人なのか、多数決で決めます」

馬鹿げた発端から始まり、生々しい過程を経て収まりのつかなくなつた泥沼の学級会。それを老倉育は最低な最期で締めくくろうとしていた。

犯人を探しだすという善意の行動は、一転して犯人を作り出すという悪意の所業にすり変わる。その結果はもちろんハッピーエンディングとはならない。当たり前だった。悪意に沿った手段で出された結論は、当然のように悪意によって染め上げられたものでしかないのだから。

『では次です』

『出席番号、六番』

『私――老倉育が犯人だと思う人』

『手を上げてください』

示し合わせたかのように上がる幾つもの手。こうして正しさは作り上げられる。大勢の悪意によって。そうして僕は目を逸らした。正しさに絶望したから。見たくもないものから目を逸らし、僕の信じる正しさから目を逸らした。

だから――見逃していた。

教室の隅。今まで一言も発言していなかったその男子生徒が、ただ一人だけ手を上げていなかった事を。

「……あー、ちよつと待った。結論が出た所で悪いけど俺から一つだけいいか？」

彼は言う。室内に渦巻く悪意をもともせず、むしろその空気をどこかあざ笑うような歪んだ笑みを浮かべたまま、

「俺は……こういう民主主義的な決め方が嫌いだ。反吐が出る。人は一人でなんでも決めれるはずなのに、それを他人の手で勝手に決められるのは虫酸が走る。だから――会議のやり直しを要求する」

『……はあ？なに言ってるんだよ。犯人を多数決で決めるって言ったのは老倉自身じゃないか。当然、やり直しなんて容認できるわけねーだ

ろ』

「いや、むしろその理由で容認できない道理が俺には解らねえよ。少なくとも俺は多数決に賛成してない。それはあいつが勝手に決めたことだ」

『ふざけないでよ。これ以上、なにを議論するっていうの？時間の無駄だわ。だって犯人はもう決まったんだから』

「いや、違う。犯人は老倉じゃない」

『はあ？』

かき乱す。かき乱れる。呆然と目を見開く老倉をよそに、気付けば団結された敵意はすでにその男子生徒へと対象を変えていた。

『……意味わかんねえ。いきなりなんなんだよ、あいつ。頭おかしいんじゃないのか？』『っていうか、彼、今まで議論には全然参加してなかったじゃん。それで今さら納得いかないって言われてもねー』『道理がどうか言ってたけど、そういう自分が一番筋通ってないよな』
ひそひそとした陰口。堂々とした罵倒。誰しもが彼を嫌悪したような瞳で睨みつける。

けれど、それでも彼は平然としていた。平然とー笑っていた。

「犯人は老倉じゃない。何故なら老倉は多数決で決められた犯人だからだ。だから、老倉は犯人じゃない。犯人は別に居る」

『……だからさ、その犯人が見つからなかったからみんなの意思で犯人を決めたんだろ。もういい加減にしろよ。場をかき乱すだけかき乱して、結局お前はなにがしたいんだよ』

「なにがしたいか？……はっ、そんなの決まってるんだろ」

ーそのお前らが言うみんなの意思とやらをただ粉々にしたいだけだよ。

笑う。嘲笑う。歪めた笑みは悪意をもって教室中の生徒を嘲笑していた。吐き気が込み上げてくる。気付いてしまった。これから彼がなにをしようとするのか。気付いてしまった。これから彼がなにを背負おうとするのか。

彼はー

「犯人は老倉じゃない」

彼は――悪意に悪意をもって、一人の人間を救おうとしたのだ。

「犯人は、俺だ」

比企谷、八幡。

それが彼の名前であるということを知ったのは、比企谷が一週間の停学を言い渡された次の日のことだった。

「…………お見舞い?」

羽川の問いかけに、僕は首を傾げた。

「お見舞いって、誰の?」

「だから比企谷くんのだよ。比企谷八幡くんの」

当然のように言う羽川。だが、僕はその言葉の意味を未だ図りかねていた。

というか。

「…………比企谷って、もしかしてあの比企谷か?」

「んん?阿良々木くんの言う『あの』がどれを示しているのかはちよつと解らないけれど、うん、たぶん阿良々木くんが想像している通りの比企谷くんで合ってると思うよ。私達のクラスメイトで、今は長期欠席中の、あの比企谷八幡くんだよ」

「……………」

思わず、言葉に詰まってしまっていた。

まさか羽川の口から比企谷の名前が出てくるとは思ってもいなかったから。

ともあれ、こちらから聞いておいて無言になるというのもいささか罰が悪い。

生まれた動揺を隠すように浅く息を吸い、僕は再び羽川に言葉を向けた。

「……で、その比企谷くんのお見舞いと僕らが今向き合ってる文化祭の準備とでどんな関係があるんだよ?」

「関係大ありだよ。比企谷くん、なんでも交通事故に遭ったとかでまだ当分は学校に来れないみたいだから。文化祭でなにをしたいだとか、いつ頃からクラスに顔を出せるようになるのかとか。後は、休んでる最中の授業の進捗だつて知っておかないとのちのち困ることになっちゃうでしょ? 私達はもう三年生なんだし」

「そりゃあ……まあ、そうだけど」

つまり羽川は単純に委員長として比企谷を心配しているのだろう。

だからこそのお見舞い。羽川らしいといえば、まあ、羽川らしいといえる。

「そういう訳で、ある程度仕事が片付いたら比企谷くんのお見舞いに行きましょう。なにせ私は委員長で、阿良々木くんは副委員長なんだから。困った時は助け合わなきゃ」

「行きましようって……え?もしかしてそのお見舞いには僕も同行するの?」

「なに言ってるのよ、当たり前じゃない。それとも阿良々木くんはケガをして困っている同級生を見て見ぬフリするほど冷たい人間だったのかな?」

「う……いや、見て見ぬフリをしようとしたワケではないんだけど……」

「なら、決まりだね。それになんだかんだ言いつつもちよつとは心配だったりするんじゃないの? たしか比企谷くんと阿良々木くんって一年、二年、三年とずっと同じクラスだったよね?」

「……お前はなんでも知ってるな」

「なんでもは知らないわよ。知ってることだけ」

こうして、放課後の教室で行われた僕達の会話は羽川の決まり文句を最期に終了した。

その、一時間後。

「ーあつた。ここみたいだね」

「……………」

比企谷。

そう書かれた表札の前で僕と羽川は目前の戸建てを見上げていた。

「……なあ、今さら聞くのものはばれるんだけどさ。ここって病院じゃなくて比企谷の自宅だよな？たしか僕がお前から聞いた限りでは比企谷が事故に巻き込まれて病院に入院してるって話だったんだが」

「うん。おおよそ間違っつてはいないかな。でも、ちょうど昨日退院したばかりらしくてね。まだ絶対安静だけど、家の中で活動するぐらいには回復したつて事みたい」

言いながら羽川はチャイムを押す。少しして、扉の向こう側からドタバタとした足音が聞こえてきた。扉が開く。そこから出てきたのは僕の妹達と同年くらいの女の子だった。

「はいはいー……へ？えっと、どちら様ですか？」

「はじめまして、こんにちは。私は比企谷八幡くんの同級生でクラス委員長も務めています羽川翼といいます。それでこっちがー」

「……僕は阿良々木、暦。同じく比企谷の同級生で、副委員長だ」

「はあ。委員長さんと副委員長さん……？」

状況が理解出来ていないように女の子は首を傾げていた。

僕は羽川に目配せを向ける。彼女は小さく頷いて、

「実は担任の先生から比企谷くんが先日退院されたということを聞いて、それでクラスを代表して比企谷くんのお見舞いに来ました。あ、これはお見舞いの品です。よかつたらどうぞ」

「ああ、これはこれは親切にどうも。へえ、お兄ちゃんのお見舞いです

かあ……つて、お見舞い!？」

何故か驚愕するように女の子は目を見開いていた。

そしてアワアワと慌てふためきながら家の奥へと走って行き、玄関にいる僕らにも聞こえるような声で、

「お兄ちゃん!!おきや、お客さんだよお客さん!お兄ちゃんにお客さんー!」

「はあ?お客さんって誰だよ。つーか声デケえよ」

「だーかーら、お客さんはクラス委員長でお見舞いなんだって!なんかもうスゴイよ!老倉さんとはまた違う意味で綺麗な女の人だよ!私史上最強の眼鏡美人だよ!」

「いや、更に意味わかんなくなってるからな。つていうか痛ツ!!おま、ギプスの上から離れる!」

騒然とする家中。

もしかしなくても僕らの来訪が原因であることは明白だった。

「……なんか、意外と元気そうだね、比企谷くん」

「……みたいだな」

それから少しして。

「やー、やー、お騒がせしてすみませんでした。兄にお客さんが来るなんて滅多にないのでちよつと慌てちゃいました」

「いえ、こちらこそ何の連絡もせずいきなりお伺いしてごめんなさい」

「いやいやいや、なにをおっしゃりますか!兄に対してそんな遠慮は全くもって無用ですから、はい。あつ、それよりもどうぞ狭い家ですが上がってください」

「ありがとうございます。それじゃあ、お言葉に甘えて」

女の子一恐らく比企谷の妹なんだろうーに促されるまま敷居をまたぎ、リビングに案内される。そしてこれまた促されるように椅子を勧められ、丁寧にも緑茶とお茶菓子まで出された所で、

「あつ、お兄ちゃん来るの遅い!ほらほら、もうお客さん達待ってるよ」

「……………」

ガチャリ、と蝶番が軋む音に続いて『彼』が現れた。

右腕に松葉杖を、右脚に白いギプスをはめた比企谷はお世辞にも覇気があるとはいえないその瞳で僕と羽川を交互に見比べる。

そしてポツリと。

「あー……悪い。待たせたか?」

比企谷はどこか罰が悪そうに視線を明後日の方向へと向けていた。

羽川はそんな比企谷に笑みを向けながら静かに立ち上がり、なめらかな動作で頭を下げる。

「こんにちは。お久しぶり、比企谷くん。怪我の調子はどう?」

「……まあ特に問題はない。少なくとも、もう痛みも無いしな」

「そうなんだ。うん、よかった。順調なようだなによりだね。それと、これは休んでいた授業の分の板書。ちよつと量が多いけれど、要点はまとめておいたから」

ショルダーバッグから出されたノートの数々。比企谷は面食らったように無言の驚きを見せていた。おそらく僕も似たようなものだろう。

「さすがは委員長の中の委員長。どうやら僕が思っていた以上に羽川は委員長だったようだ。」

「ん? ひよつとして余計なお世話だったりしたかな?」

「……いや、助かる。こういうのは誰にも頼めなかったからな」

「うわっ、出たお兄ちゃんのボツチ発言。っていうかそんなこと言いながらもいつも老倉さんに助けられてるクセに。ホント、お兄ちゃんはツンデレさんなんだから」

「おまつ、余計なことを……!!」

「老倉さん? 老倉さんって隣のクラスの?」

羽川が尋ねる。

比企谷は言いたくなさそうに渋い表情を浮かべていたが、代わりとばかりに彼の妹が嬉々として話し始めた。

「はいっ、そうなんですよー! お兄ちゃんったら一年の時からずーつと老倉さんにはお世話になりっぱなしで。もう私からしてみたら義理の姉というか、将来の姉というか。じつは老倉さん昨日も来てくれ

「てたんですよ？退院するお兄ちゃんに連れ添って歩く姿なんてもうアツアツでーあ」

視線が突き刺さる。比企谷は学校では見たことがないくらい剣呑な表情を浮かべていた。その異変を察知したのか、女の子は乾いた笑いを浮かべ「は、ははは。小町ちよつと用事思い出しちゃった」退散。後に残された僕達と比企谷の間には変な空気だけが漂っていた。

「……で、用事はこれだけか？」

「え？……あ、うん。あとは文化祭の出し物の希望と、それとー」

羽川が流暢に聞くべくことを聞いていく。その横で、僕はただ比企谷に視線を向けるだけだった。

そうして気付けば比企谷宅を出た帰路の途中。終始無言を貫いていた僕の横で羽川はどこか楽しげに口を開く。

「比企谷くん。思ってたよりも大丈夫そうだったね」

「……ああ。そうだな」

「それに仲のいい友達も居るみたいだし。うん、良かった良かった。ちよつとだけ安心したかな？」

「安心？」

言葉の意味がわからず、自然と尋ねる口調になる。

視線を僕に合わせて、羽川は言った。

「比企谷くん、なんだかいつも他人と距離を取ってる感じだからさ。心配してたの。友達居るのかなーって。学校楽しくないのかなーって。ほら、一時期の阿良々木くんみたいに」

「一時期って……正直、今もあまり変わってないぞ、僕。学校が楽しいとかって思ったこともないし」

「でも友達は居るじゃない。私が」

「っ……………」

「……こいつはホントに。よくそんなこつぱずかしい事を素面で言えるもんだ。」

「でも老倉さんだっけ？うん、ちゃんと比企谷くんにもそういう友達が居てくれてよかった。これならわざわざお見舞いに行く必要もなかったかな」

「……なんだか嬉しそうだな」

「そりゃそうだよ。クラスメイトの幸せを考えるのもクラス委員長の役目なもの」

本気でそう思っている風に羽川は言う。実際、羽川はそういう奴なのだ。

人間のデカさを見せつけられるというか。そもそもの器量が全然違うというか。

(それに比べて僕は)

それに比べて僕はーずっと考え事をしていた。

老倉のこと。比企谷のこと。……二年前の、こと。

(僕はー)

言葉の先は出てこない。

ただ、そういえば比企谷とは一度として話した事は無かったなーと。

羽川との帰り道、ふとそんなことを思うのだった。